

2022 年度 (令和4年度) 三鷹市民大学事業総合コース

あゆみ



第 55 号

三鷹市生涯学習センター

表紙の写真は、市民大学公開講座（10/14 開催）の様子

目 次

総合コースとは	2
5 コース開設概要	3
令和4年度総合コース企画委員会について	4
令和4年度総合コース企画委員を終えて	5
運営委員会より	7

各コースの学習記録

【環境と科学】“脱炭素社会”に向けた大変革が始まる！ ～地球市民として考える、脱炭素社会実現への行程～	11
【子育て・孫育て】 子育ての輪でつながる～！みんなで子育て・孫育て	27
【哲学・文化芸術】 暮らしの中の哲学・文化芸術	39
【経済】 ポストコロナの日本経済 ～格差は克服できるか～	55
【現代社会と政治】 今あらためて日本の民主主義とジャーナリズムを考える	71

総合コースとは

総合コースとは

三鷹市の市民大学総合コースは、開設以来今年で55年目を迎えました。当初から「学習の主体は市民にある」という命題を掲げ、コースの企画段階から運営に至るまで、市民自らが主体となって行う講座です。

平成28年度までは、三鷹市社会教育会館を会場に開催（開設当初4年は市民会館で開催）してきましたが、社会教育会館の閉館に伴い、29年度からは会場を三鷹市生涯学習センター（29年4月オープン）に移し、運営や事業理念を市から公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団に引き継ぎ実施しています。

1 総合コースの企画と運営

（1）分野検討委員会の開催

後段に示す、企画委員会の委員を募るために、事前アンケートや公募の委員の意見を集約して、次年度に取り上げる5つの分野を決定します。

（2）企画委員会の設置

公募による委員と担当職員とで企画委員会を設け、半年以上かけて、広く市民の学習要望をもとに、講義内容やそれにふさわしい講師を検討し、カリキュラムを作成します。

（3）運営委員会の設置

各コースの学習生から選出された委員と担当職員とで運営委員会を設け、学習生の意見や要望をコース間で情報共有や意見交換し、一人ひとりが主体的に学習できる環境づくりを行います。

2 学習方法

各コースとも、講座回数30回のうち20回はゼミナール形式の講義、10回を自主学習の時間としています。年間を通じて、講義・発表・討論などを積み重ね、学習課題についての問題解決や知識の習得をめざします。自主学習では、講義を契機として各人が互いに意見を交わしたり、交流を深めたり、運営について話し合ったりするなどして、自主的に学習を進めていきます。

3 学習の記録『あゆみ』の作成

総合コース『あゆみ』とは、総合コース1年間の学習記録です。

毎年、各コースの学習生が終了時に学習の記録や感想を執筆し発行しています。

4 学習成果の発表

学習成果の発表として、今までの学習内容をコースで話し合い、模造紙2枚にまとめ、12月に開催される『生涯学習センターフェスティバル』で展示を行っています。令和4年度は、コロナによる2年間の中止期間をはさみ3年ぶりの開催となり、総合コースが学習グループの一団体として初めてフェスティバルの実行委員会に参加し、学習室内での展示発表を行いました。環境と科学、子育て・孫育て、経済、現代社会と政治の4コースが学習内容を模造紙にまとめをし、学習生による来場者への説明を行ったコースもありました。哲学・文化芸術コースは自主グループと合同で哲学対話を紹介する展示を行ったほか、来場者も参加し哲学対話の体験会を開催しました。

更に、3月11日（土）から25日（土）までの期間、模造紙展示を元気創造プラザ1階休憩コーナー前の廊下で行いました。

5 コース開設概要

令和4年度の総合コースは、新型コロナウイルス感染症による学習室の定員制限が解除されたことから、各コースの定員を15名から通常の28名に戻して開催しました。途中、感染者数が増加する期間もありましたが、Zoom等のオンライン会議ツールを活用したり、出席時の体温計測、手指消毒やこまめな室内の換気など感染防止対策を徹底した結果、全30回の全講座日程を無事に終了することができました。

会 場 三鷹市生涯学習センター（元気創造プラザ4階）

開設時間 午前10時～正午

【分野】 コース	要 旨
<p>【環境と科学】 “脱炭素社会”に向けた 大変革が始まる！ ～地球市民として考える、 脱炭素社会実現への行程～</p> <p>5月13日～3月10日 (金曜日 全30回)</p>	<p>地球規模での気候変動による深刻な自然災害の発生、更には、生態系の破壊が急速に進行しています。特にCO₂発生増に起因するとされる地球温暖化を如何に食い止めるかが、今や人類の最大課題となりました。</p> <p>科学的見地に基づき環境問題を探り、環境活動の現場にも学びながら、私たちは次世代のために何ができるのか、深く考えることから始めませんか？</p> <p>室山 哲也 さん（日本科学技術ジャーナリスト会議会長） ほか</p>
<p>【子育て・孫育て】 子育ての輪でつながろ～！ みんなで子育て・孫育て</p> <p>5月13日～3月10日 (金曜日 全30回)</p>	<p>親だけの“孤”育てではなく祖父母・地域の大人も子育てに関わって安心して楽しく子育てをしたい。</p> <p>コロナ禍で近所づきあいや地域とのつながりが希薄になってきました。コースでの学びを通して多様な視点を身につけ、様々なバックグラウンドを持つ方々とゆるやかにつながりましょう。</p> <p>ひとりひとりの子供にとって、そして親にとって大切なことは何か、皆で楽しく考えてみませんか？</p> <p>松田 妙子 さん（一般社団法人ジェイス理事） ほか</p>
<p>【哲学・文化芸術】 暮らしの中の 哲学・文化芸術</p> <p>5月13日～3月10日 (金曜日 全30回)</p>	<p>私たちは今、コロナ禍を経験し、格差や貧困、民族対立、分断と不寛容の広がりなどに直面しています。こうした渾沌とした時代を生きていくにあたり、日常の暮らしの中で本質的なことを見極めていくという哲学的な思考、そして心豊かな暮らしを営むために不可欠な文化芸術が求められています。</p> <p>本講座では、哲学、文化、芸術の多彩な講師陣を招いて広いスコープの学習を展開したいと思います。</p> <p>池田 喬 さん（明治大学文学部教授） ほか</p>
<p>【経済】 ポストコロナの日本経済 ～格差は克服できるか～</p> <p>5月14日～3月11日 (土曜日 全30回)</p>	<p>コロナ禍により、経済は大きく落ち込んだだけでなく、様々な問題を浮かび上がらせました。不安定化した雇用、膨らむ一方の借金財政、大戦後の世界を支えた経済成長要因の変質、実態経済の停滞をよそに高止まりする株式市場等々。変容するグローバル社会はますます格差を拡大し、そのツケは中間層に回ってくると言われています。</p> <p>明るい未来を実現するための手立てを共に考えてみませんか。</p> <p>岩村 充 さん（早稲田大学名誉教授） ほか</p>
<p>【現代社会と政治】 今あらためて 日本の民主主義と ジャーナリズムを考える</p> <p>5月14日～3月11日 (土曜日 全30回)</p>	<p>民主主義は本来、人権、自由、平等、寛容等を大切にします。しかし今日、世界の多くの国々で人権や民主主義がないがしろにされ、究極の人権抑圧というべき戦争さえ勃発しました。また、コロナ禍は、権力のあり方について改めて考える機会となりました。情報化の中でフェイク・ニュースの蔓延やメディアの機能不全も見られます。こうした状況をふまえて、自由で民主主義的な政治体制がもつ意味やジャーナリズムの意義について学んでいきたいと思います。</p> <p>杉田 敦 さん（法政大学法学部教授） ほか</p>

※夏・冬休みは除く

令和4年度総合コース企画委員会について

企画委員会では、公募による市民の委員と担当職員が一堂に会し、毎年、次年度の開設コースのテーマ、学習内容、講師などについて協議し、決定しています。

令和4年度は令和3年9月から令和4年3月までの約7か月間、計11回の会議を行いました。

令和4年度企画委員会の開催日、主要課題

回	開催日	主要課題・内容
1	9/16 (木)	○自己紹介 ○総合コース概要及び分野選定経緯の説明 ○企画委員会概要と日程 ○司会・書記について ○開催日の検討、決定 ○全体キャッチフレーズの検討
2	9/30 (木)	○全体キャッチフレーズの決定 ○主軸となる学習内容の検討
3 ・ 4	10/7・21 (木)	○コースの趣旨、年間30回の大まかな流れを検討 ○メイン講師、ゲスト講師の検討
5	11/4 (木)	○コースの趣旨、年間30回の大まかな流れを検討 ○メイン講師、ゲスト講師の検討 ○市民大学公開講座の検討
6	11/18 (木)	○メイン講師の決定 ○メイン講師との打合せ日程調整 ○カリキュラム、ゲスト講師の検討
7 ・ 8	12/16・1/20 (木)	○カリキュラム、ゲスト講師の検討 ○コースタイトル、サブタイトルの作成 ○総合コースPRポスター及びチラシの作成者選出 ○講座開設趣旨180字(募集チラシ用・広報誌用)の作成
9	2/3 (木)	○カリキュラムの完成 ○ポスター、チラシ完成
10 ・ 11	2/17・3/3 (木)	○ポスター、チラシの配布準備 ○総合コース開講式の打ち合わせ ○学習記録「あゆみ」企画委員会ページの執筆者の選定 ○反省会(企画委員会を振り返って)

<時間・場所> 午前10時5分～正午 生涯学習センター ホール

令和4年度市民大学総合コース企画委員を終えて

「“脱炭素社会”に向けた大変革が始まる！」

環境と科学コース 岡村 章

私はこれまで三鷹市民大学総合コースを聴講したことはありませんでしたが、市の広報で企画委員の募集を知り、以前から関心のあった環境分野のコースを希望し、応募しました。

企画委員会の「環境と科学コース」の分科会で初めに議論したのはビジョンの確認です。一口に環境といっても地球環境、自然環境、生活環境などがあり、環境問題は、水俣病や福島原発事故による放射能汚染のような歴史に残る災害から、東京外環道路工事の影響、外来種、ゴミの削減といった私たちに身近な問題まで多種多様です。

昨年の分野検討委員会において、本コースは、地球環境問題を取り上げるという大まかな方向性は決まっていますが、分科会で改めて喧々諤々の議論をした結果、大気中の温室効果ガスの増加に伴う気候変動問題を講座の基本にしつつ、生物多様性や食の安定供給・安全性といったその他の環境・科学の問題もサブテーマに含めようということになりました。

講座の中心となるメイン講師は、他の経験豊富な分科会委員の方々の提案で、以前に哲学コースのメイン講師を担当していただいたことがあり、映像を多用した分かりやすい講義が好評で、環境及び科学技術分野にも精通している室山哲也氏（日本科学技術ジャーナリスト会議会長、元NHK科学担当解説委員）をお願いすることに決定しました。

サブテーマと担当講師の選定に当たっては、各委員の推しリストをもとに、内容が先か人物が先か、対立する主張も聞くべき、市民活動に関わりのある実践的な講師を加えよう、といったような議論を経て候補者を選定し、事務局の交渉努力の結果、何とか期限内に確定することができました。

新型コロナに次ぐ新たなパンデミックや、首都直下地震、南海トラフ地震、富士山噴火といった巨大自然災害、朝鮮半島・台湾海峡の有事、少子高齢化による社会保障制度の破綻なども、日本の抱える大きな懸念です。ただ、国連「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」報告書によれば、大気中炭酸ガス濃度の増加に伴う地球温暖化の進行は、抜本的な対策を講じずに放置すれば、海水面の上昇など地球環境に不可逆的な変化を与え、その影響は極地や島嶼国に留まらず、気温・海水温の上昇、異常気象の増加などにより、ほぼ確実に人類と多くの動植物に壊滅的な被害をもたらすとされています。

市民大学総合コースの理念は、「ともに学び ともに考え 行動しよう」です。講座の受講者数には制約があり、個人の努力でできることにも限界がありますが、塵も積もれば山となる、の例えもあります。著名な講師陣による魅力的な講義が受講者一人ひとりの行動に繋がり、それが多くの市民に拡がればと願っています。

次は貴方も企画委員に成りませんか？

「今あらためて日本の民主主義とジャーナリズムを考える」

現代社会と政治コース 渡 辺 衛

三鷹に住んで早や15年、最初の10年は未だ現役で特にこれといって地元との接点も無く自然と市街が塩梅よく調和してとても住みやすい街で終の棲家は三鷹だと納得していた。

完全リタイア生活に入っても趣味は多い方なので時間を持って余す事は無いだろうと多寡を括っていた。数ヶ月そんな生活をしてみて或る日、自分が手にする情報が全て何らかのメディアを通した二次情報で生の情報を得る社会との接点を無くしているのに愕然とした。

そんな時に図書館で目にしたのが三鷹市民大学の募集記事だった。早速日本文化を学ぶコースに応募、入選以来21、22年の政治コースを受講した。計3年間のコースはどれも一流の講師陣による良く練られたカリキュラムで、それが無料で市民に提供されている事に感心した、と同時にこれを50年を超えて続けている三鷹市の姿勢と努力に敬意を覚えた。

又、各コースの基本テーマの企画や講師陣の選定、年間カリキュラムの作成が応募した市民による企画委員会で行われている事にも驚き、ここにも三鷹市の姿勢に共感した。そうなるを持ち前の野次馬精神がムラムラと生じ、令和4年度の企画委員に応募した。

当初、事務局から提示されたテーマは「現代社会と政治」と言う物だった。政治コースの企画委員は、私と同年の男性とやや年若の女性3名の5名から成り、この基本テーマを基に今年度のプログラムの議論が始まった。企画委員5名の年齢経験から、何か今日本を含め世界中で民主主義が劣化し権威主義が台頭している、又民主主義を成立させるジャーナリズムがSNSなどNetメディアの出現からその機能に危うさが有るとの共通認識に至り、それを今年度のカリキュラムにする事に合意するにはそんなに時間は掛かりませんでした。

さて、ここからが企画委員の面白みが始まる。委員各位の関心と問題意識で学びたいテーマと講師陣選定の侃侃諤諤の議論が白熱し、始めは何々先生と言っていた講師もその内敬称が付かなくなったりする。何とか年間のカリキュラムと講師陣の候補が決まると、そこから事務局の獅子奮迅の仕事となる。かなり低い講師料で各講師を説き伏せスケジュールを調整する。それが50年の歴史の重みと言うか三鷹市の力なのか、事務局は企画委員の思いを形にしてくれる素晴らしい存在だ。彼ら無くしては市民大学は成立しない。感謝、感謝！！

企画委員を初めて経験したが、とても楽しい仕事であった。市民大学を受講される方々は社会に関心を持ちそれなりに問題意識を持っていると思う。折角の学びの機会をもっと楽しく有意義にするにはどんどんその場に積極的に参加する事をお勧めする。ただ聴講するだけでなく年に10回予定されている自主学習にも参加活用し、その時間を無駄に過ごさない様にするのはご自身の意識です。その上に次の機会には是非企画委員に応募して下さい。

運営委員会より

1 令和4年度の学習生数

【環境と科学】	女 14名・男 14名	計 28名
【子育て・孫育て】	女 16名・男 1名	計 17名
【哲学・文化芸術】	女 18名・男 10名	計 28名
【経済】	女 4名・男 24名	計 28名
【現代社会と政治】	女 15名・男 13名	計 28名
合計	女 67名・男 62名	計 129名

2 運営委員会

開催日 5/27（金）、7/9（土）、9/16（金）、10/29（土）、12/9（金）、3/3（金）

午後1時5分～2時

構成 各コース4～5名の運営委員と生涯学習センターの担当職員

3 運営委員会の取り組み

（1）運営委員会ニュースの発行 NO.1～NO.6

毎月の運営委員会での話し合いの結果を翌週の学習日に配布

運営委員会の内容をすべての学習生が把握し、主体的に運営に関わることを目的としています。

（2）市民大学公開講座【10月14日（金）・15日（土）開催】

○10月14日（金）対面形式での開催 計110名（学習生75人／一般27人／その他8人）

『日本の安全保障』

講師 半田 滋さん（防衛ジャーナリスト）

○10月15日（土）対面形式での開催。計81名（学習生59人／一般16人／その他6人）

『パレスチナで働いて思うこと～基本的人権と尊厳と平和について考える～』

講師 坂元 律子さん（JICA 保健医療専門役）

市民大学公開講座は、総合コース学習生が一堂に会して学習する場を設けることで、相互の交流を深める目的で開催しています。企画委員会で講演内容・講師候補を検討、選定した上で事務局が講師へ出演交渉をしています。令和4年度は対面形式で開催し、一般にも公開しました。

（3）三鷹市生涯学習センター利用者懇談会への委員選出

運営委員会が推薦した2名の委員が生涯学習センター利用者懇談会※に参加し、総合コースを代表して、今後の事業のあり方や施設の運営などについて意見や要望を伝えました。

※生涯学習センターのより良い運営のために、市長が利用者の意見を聞く場として設置

（4）「あゆみ」の発行

各コースから編集委員を2名選出し、1年間の学習の記録として、「あゆみ」を発行しました。令和4年度は編集会議を1月20日（金）に開催し、原稿のとりまとめ、各コースページの作成や4月に2回の校正作業を行いました。

総合コースを振り返って(令和4年度 運営委員会より)

【各コースの感想】

<環境と科学>

運営委員が忙しく意思の疎通が難しかった。メインの室山先生には毎回、映像資料を見せていただいて議論することができた。テーマが脱炭素社会、地球市民など大きかったため、幅広い分野の講師に来ていただいた。机上の問題ではなく足元の問題として捉え、食料自給率、里山の問題など沢山の問題提起があった。

<子育て・孫育て>

自力では中々たどり着けない講師を招くことができた。20代から80代の幅広い世代の学習生から沢山の刺激を受けた。カリキュラムについて、メイン講師を前半に集中して行った方がよかった。

<哲学・文化芸術>

非常に幅広い分野で充実していた。

<経済>

アンケートで80%の方が満足と回答。メインの岩村先生が良かった。1学期にもアンケートをとり、先生に質問をお渡しして2学期の講義でお答えいただいた。最終講義でも、質問にお答えいただく形で行った。難解でしたが良いキャッチボールができた。

<政治>

積極的に参加してもらいまとまった良いコースだった。日程上、講師が後半に固まっていたため、フェスティバル開催までに受けた講義が少なく限界があった。カリキュラムについて、概論に行き過ぎていて現実で起きている政治問題についての講義が足りなかったのではないか。今後、講師の実務とアカデミックな講師とのバランスをとることが必要。

【自主学習について】

<環境と科学>

市内で太陽光発電をしている方たちに、明星学園の屋上を使った太陽光発電についてお話をいただいた。公開講座でもこのような活動をされている方のお話を聞くのもよいのではないか。クリーンセンターふじみを今後、有志で見学しに行く予定。

<教育・子育て>

まとめのイベントの準備が文化祭みたいで楽しかった。

<哲学・文化芸術>

授業の振り返り、哲学対話、ICU湯浅八郎記念館見学、学習生のジャズに関するプレゼンなど充実した内容で出席率が高かった。

<経済>

討議をしたいというアンケートがあり。杏林大学の先生に学生との交流を申し出たところ了承いただくことができ、実際に学校へ出向いて学生さんと交流を行った。今後も学校を訪れる機会があるとよい。

<現代社会と政治>

学習生から3人発表。現役ジャーナリスト、卒論で民主主義をテーマにした若い世代の人など。外部講師として市役所職員から、三鷹のまちづくりディスカッションについて講義を受けた。グループディスカッションも行い充実していた。

【公開講座について】

- ・今の時代に合ったテーマで良かった。
- ・講師選定の際には市民に聞いていただく必要があるテーマとして考えていくことが必要。
- ・経済という欧米中心の話になるが、欧米の資本主義経済以外にも取り上げてみるのもよい。
- ・質問の時間が欲しかった。

【コロナ対応（主としてオンライン対応）について】

＜環境と科学＞

オンラインで京都在住の講師にお願いすることができた。

＜子育て・孫育て＞

オンラインで受講出来たらよい。

＜哲学・文化芸術＞

全講座を対面授業で実施した。

＜経済＞

7回オンラインで実施。対面が一番重要だと思うが、講師によってオンラインならと受けていただけの方もいた。学習生にも体調不良の人が自宅から受講できる。オンラインにはメリットとデメリットがある。オンラインで市民の方にも幅広く聞いていただくことができたらよい。

＜政治＞

全講座を対面授業で実施した。

【生涯学習センターフェスティバルについて】

＜環境と科学＞

展示物を作るだけでなく、共有し深める時間が持てたことが良かった。

＜子育て・孫育て＞

コロナ禍で開催できてよかった。当日の多種多様な団体の展示発表を観ることができてよかった。

＜哲学・文化芸術＞

自主グループ「哲学するかい」と共催で哲学対話を実施したり、哲学書等の書籍を展示したりした。今後も続けていきたい。

＜経済＞

一般の方に理解していただけたかの反応を見るため、シールを用意して貼ってもらった、今年は学習室で展示できたので4人が交替で展示説明を行い、市民との交流を深めることができた。

＜政治＞

多世代が上手く協力でき積極的に参加した。

“脱炭素社会”に向けた大変革が始まる!

～地球市民として考える、脱炭素社会実現への行程～

講師：室山哲也
(日本科学技術ジャーナリスト会議会長)



小出五郎さんと三鷹市生涯学習センター

講師 室山 哲也

私がこの会にお世話になったいきさつは、小出五郎さんという、私が尊敬する先輩の存在が大きいかかわっています。

小出五郎さんは、NHK科学番組部の私の先輩で、「核戦争後の地球」という名作をつくった、世界的に有名なディレクター（イタリア賞グランプリ）です。

その小出さんが、この三鷹市生涯学習センターで講師をしていたわけですが、思いがけず、突然急逝され、私がピンチヒッターでお邪魔したのが始まりでした。

実は、小出さんは、私の人生に大きな影響を与えた恩人でもあります。

小出さんによって、3回人生の転機を迎えたからです。

1回目の転機は、私と小出さんが、日米共同制作の「ザ・ブレイン」という番組に関わっていたころ、私があまりにも忙しく、初任地にいる宮崎の恋人と会うことが出来ないのを知った小出さんが、1週間もの休暇を与えてくれ、晴れてプロポーズ、結婚することが出来たことです。我が家には「コイデサン」という名前のヤギのぬいぐるみ(少し似ている)が飾られていましたが、子供たちはそのコイデサンに見守られて育って来ました。2回目の転機は、小出さんに、解説委員になるように勧められ、解説委員の道を選んだこと。3回目の転機は、私がいま会長をしているJASTJ（日本科学技術ジャーナリスト会議）の入会を勧められ、入会したことです。

その小出さんが亡くなり、ピンチヒッターとしてこの会にお邪魔したことは、ある意味、4度目の不思議なご縁ともいえるのかもしれませんが。

思えばその後、長いお付き合いとなりました。

会では、環境についてお話することが多かったと思いますが、ロボットやIT、子育てのお話もさせていただいたこともありました。

この会に参加して驚いたのは、市民の皆さんの熱心な学習態度です。

日本には、環境問題をはじめ、経済、教育、政治、などもろもろの課題が横たわっていますが、それらを解決していく力は、なんといっても地域を支える市民の力だと思います。参加者の中には、当初からおられた方も多く、なんだか他人のような気がしません。今も、皆さんの熱心な学習の様子を思い出します。これからも、健康に留意され、充実した会でありますよう、お祈りしています。

メイン講師紹介

室山 哲也さん



昭和51年NHK入局。「ウルトラアイ」「クローズアップ現代」「NHKスペシャル」など科学番組プロデューサーを務め、解説主幹ののち定年。科学技術、生命・脳科学、環境、宇宙工学などを中心に論説を行い、子供向け科学番組「科学大好き土よう塾」（教育テレビ）の塾長として科学教育にも尽力。

モンテカルロ国際映像祭金獅子賞・放送文化基金賞・上海国際映像祭撮影賞・科学技術映像祭科学技術長官賞・橋田壽賀子賞ほか多数受賞。

日本科学技術ジャーナリスト会議会長。東京都市大学特別教授。元NHK解説主幹。

講座の様子



室山哲也先生



高田秀重先生



橘川武郎先生



藤原辰史先生（オンライン）

自主学習の様子



●カリキュラム

回	日付	講義名 学習内容	講師
1	5月13日	開講式・オリエンテーション	
		開講の挨拶。企画委員からの一言、講座運営についての説明、受講の目的をかねた学習生の自己紹介など。	
2	5月20日	持続可能な社会をどうつくるか①—気候変動の脅威	日本科学技術ジャーナリスト会議会長 室山哲也さん
		気候変動はもはや気候危機。水循環の狂いで生じる甚大な災害、生物界への影響。温暖化懐疑論に対する反論。危機対策として多様性の尊重、循環社会への見直し、事実を伝えることと教育の重要性などが討論された。	
3	5月27日	持続可能な社会をどうつくるか②—SDG s の処方箋	室山哲也さん
		人類は農耕革命を起しその結果生まれてしまった格差社会。気候変動下の先進国と途上国の格差、地球は大きな曲がり角に来ている。このまま進むと人類滅亡のシナリオに。持続可能な社会づくりとしてSDG s の提案。	
4	6月3日	気候危機の今、市民としての向き合い方	気候ネットワーク東京事務所長 桃井貴子さん
		持続可能な開発目標(SDG s)の内容と採択までの歴史、SDG s は自然資本を基礎にしたウエディングケーキ構造。気候危機の現状と取組みとしての気候変動枠組み条約、小手先の対応で遅れている日本の現状を指摘。	
5	6月10日	二酸化炭素増加・地球温暖化と海の変化	気象庁気象研究所 石井雅男さん
		大気中の二酸化炭素の増加と温暖化の仕組み、温暖化を教える海(水位の上昇)。温暖化の熱の大部分は海にたまる。海は二酸化炭素を吸収してくれるが、海水の酸性化が海洋生物の生態系に影響して食糧問題にも及ぶ。	
6	6月17日	自主学習	
		自主学習の初回にあたり、自主学習の意義や進め方について4グループに分かれて意見交換。地元三鷹に即した環境問題への取組みや館外学習(ごみ焼却場見学など)、12月のフェスティバルの展開について話し合われた。	
7	6月24日	マイクロプラスチック海洋汚染問題	東京農工大学農学部環境資源学科教授 高田秀重さん
		プラスチック(石油起源)ごみの中でもマイクロプラスチックが、海洋生物の体内に入り、食物連鎖網を通じて人体にまで取り込まれている。生活に溢れるプラスチックの消費と環境への負荷について再認識を迫られた。	
8	7月1日	パンデミックと環境破壊—グリーンリカバリーは可能か	共同通信社編集委員 井田徹治さん
		新型コロナの教訓。パンデミックは熱帯林の破壊から、野生動物と接触して広がったと考えられる。環境に配慮しているというアブラヤシの植林が熱帯林を破壊。熱帯林の破壊は私たちの日々の生活とつながっている。	
9	7月8日	自主学習：日本の森林と環境・炭酸ガス	近藤和廣さん(三鷹市市民)
		日本の森林についての現状をデータで紹介。温室効果ガスの二酸化炭素とはそもそも何か、どのように生まれてきたのか地球の歴史にさかのぼって調べる。温暖化について懐疑論もあるが、その論争についての紹介。	
10	7月15日	どうする？エネルギーのベストミックス	室山哲也さん
		エネルギーとは熱、光、動力の元であり、文明の源でもある。エネルギー政策は3つの「安」(安心、安全、安価)と関係。日本の現状は化石燃料、特に石炭(二酸化炭素を多く排出)へのこだわりと原発(危険)頼み。	
11	9月16日	再生可能エネルギーの可能性	室山哲也さん
		再生可能エネルギーとしての自然エネルギーのいろいろ。海に囲まれ、森林に恵まれ、火山の多い日本は自然エネルギーの宝庫。設備投資にコストがかかるが普及と工夫しだい。このほかに水素エネルギーも期待できる。	
12	9月30日	気候変動と水循環—地球の未来を流域から考える—	水ジャーナリスト 橋本淳司さん
		世界の水の在り方は気候変動の影響を受けている。生活への水の利用と水による災害例など。水田稲作は食と環境を守り、森林は保水や浄化能力をもつ。流域内で食料、森林、エネルギー、水を循環させる社会を目指す。	
13	10月7日	自主学習	
		12月3日(土)、4日(日)のフェスティバルの展示発表にあたり4グループに分かれて、それぞれ発表するテーマや内容について討議。	
14	10月14日	【公開講座(金曜日)】ロシアのウクライナ侵攻と日本の安全保障政策	防衛ジャーナリスト 半田 滋さん
	10月15日	【公開講座(土曜日)】パレスチナで働いて思うこと—基本的人権と尊厳と平和について考える—	JICA保健医療専門役 坂元律子さん
15	10月21日	脱原発・脱ダムの思想と地方からの発信	環境雑誌『奔流』編集人&映画プロデューサー 矢間秀次郎さん
		敗戦後に得た経済大国の冠とは裏腹に国土の荒廃、ダム開発による国土破壊は平和の代償。原発事故による被曝列島に未来はあるのか、市民運動を通じて実感する負の遺産を語る。	

回	日付	講義名	講師
学習内容			
16	10月28日	脱炭素時代の地域からのエネルギー大転換	特定非営利活動法人環境エネルギー政策研究所所長 飯田哲也さん
	直近の気候サミットの決定事項や成果、日本の対策。再生可能エネルギー対策では周回遅れの日本。技術革新により太陽光や風力、蓄電池の利用は低コスト化しているのだが。		
17	11月4日	生物多様性の危機	室山哲也さん
	1992年の地球環境サミットの二つの柱のひとつ、温暖化に関する国連気候変動枠組み条約に対する生物多様性条約。人類の繁栄に反して多数の生物種が急速に絶滅。生物との共存のヒントは日本の里山にある。		
18	11月11日	安全保障から見た地球環境問題	防衛研究所特別研究官 小野圭司さん
	温暖化で海水がとけて北極海周辺の軍事と安全保障に変化が。いっぽう海面上昇で日本のEEZにも危機が。温暖化に伴う異常気象災害に自衛隊の運用回数も増加している。		
19	11月18日	自主学习：フェスティバル準備	
	フェスティバルの開催日12月3日(土)、4日(日)に向けて各グループで決めたテーマに沿ったポスターの制作。		
20	11月25日	自主学习：フェスティバル準備	
	各グループ、ポスターの仕上げに専念。		
21	12月9日	カーボンニュートラルと原子力・石炭火力～リアルでポジティブなたたみ方～	国際大学副学長 橘川武郎さん
	ウクライナ危機であらわになった日本のエネルギー事情。究極の国産エネルギーは再生可能エネルギー。原発の再稼働に舵切った岸田政権だが、本当に可能か？日本の原発の現状について。原発からの脱却は発電コストにかかっている。		
22	1月13日	テクノロジー文明の光と影	室山哲也さん
	人類の脳が文明を作り、文明は道具(機械)の発明とそれを使うテクノロジーとともに進歩してきた。究極の機械はAI。人類はAIに支配される日が来るのか？AIの得意不得意は？		
23	1月20日	脱炭素社会は持続不可能；ではどうすれば持続可能文明ができるのか？	東京工業大学名誉教授 丸山茂徳さん
	脱炭素社会が不可能なのはなぜか？現在のクリーンと言われるエネルギーは膨大な化石エネルギーで成り立っている。それに代わるものとしての水素。水素製造の現状と将来性。		
24	1月27日	自主学习：ゼロエミッション東京の実現に向けた東京都の取組について	東京都環境局環境政策課長 神山 一さん
	都が直面する環境課題に対する認識と目指す目標および戦略。エネルギーの脱炭素化と持続可能な資源利用。太陽光発電設備の導入とその利用などについて。		
25	2月3日	食を根拠に世界を改造する一食の問題の歴史と現在【オンライン】	京都大学人文科学研究所准教授 藤原辰史さん
	地球上における食物連鎖と生態系の中で人間は通り道。食べることは社会の問題であり、ナチズムは権力が「食」を用いて社会をコントロールした例。現代もバナナプランテーションのように権力(多国籍企業)による食の支配がある。		
26	2月10日	食べ物が劣化する日本～食卓の危機、種子が危ない～	食政策センター・ビジョン21主宰 安田節子さん
	農業大国米国による日本の食卓支配。日本の食料自給率を減らしながら米国産の食料を輸入している現状。輸入食料のポストハーベスト(農薬)やゲノム編集食品の問題。有機農業復活と地産地消が安全な食を取り戻す。		
27	2月17日	自主学习：最終回の講師を囲んでの討論に向けた準備	
	フェスティバルのポスターでまとめた内容について各グループの説明とフェスティバルでの反応の報告。このあとこれまでの講義を振り返り自由討議、メイン講師の室山先生への質問などをまとめる。		
28	2月24日	里山の環境保全と地域創生	株式会社日本総合研究所主席研究員 藻谷浩介さん
	ゲーグルアースで里山を探る。人の手が入り管理された土地が里山。江戸100万人都市を支えたのが近郊の里山。現在の東京は遠方から運ばれてくる物資やエネルギーで成り立っている。それが無くなれば消滅するのみ。300年後、大都市と地方の町や村ではどちらが残っているか？食と水が得られる地域が残る。		
29	3月3日	自主学习：みたか発電紹介～この辺の電気はこの辺でつくろう～	NPO法人みたか市民共同発電 大谷内千秋さん、藤田恵美さん
	福島原発事故を教訓に将来世代につけを回さないために、地元で太陽光発電のNPO法人を立ち上げた経過。太陽光パネルの設置には学校が協力、エネルギー転換を支持する三鷹市民を増やし、市民が行政を動かす。		
30	3月10日	先生を交えたグループ討論	室山哲也さん
	室山先生に対して、食と農の問題、温室効果ガス削減の問題点や原発稼働、丸山茂徳先生の考え方、太陽光発電をはじめとする再生可能エネルギーの方向性や水素蓄電池への期待性についてなどの質問が出た。		

知ること、考えること、行動につなげることの大切さ

石黒紀子

格差社会が拡大する中、日常生活の中で地球環境の急速な変化を実感する日々。異常気象、自然災害の多発、CO₂に起因するといわれる地球温暖化など漠然とした不安。その正体を学習を通して明確にしたい。次世代へつなぐためにできることは何？企画委員としてカリキュラム作成からの参加。

メイン講師の室山哲也さんは科学ジャーナリストであり、元NHKプロデューサー。

数多くの貴重な映像を軸に持続可能な社会の方向性を刺激的に伝えていただいた。

ゲスト講師は、研究理論をベースに具体的実践につなげている講師たちが多く登場。半世紀の歴史ある三鷹市民大学だからこそ実現できた多彩で贅沢な陣容だった。

テーマ「マイクロプラスチック海洋汚染問題」の高田秀重さんの講義を少し記してみたい。石油から生成される全てのプラはいずれ5mm以下のマイクロプラに。このままでは2050年には魚と同量のプラが海中に。近くの野川や多摩川河口の調査でもマイクロプラの汚染が解明。食物連鎖を通して汚染は生態系全体に広がっている。プラには化学物質の添加剤が使用され環境ホルモンの影響がみられる。日本ではプラゴミの70%が焼却され温室効果ガスが発生し温暖化が進む。パリ協定では2050年以降は石油プラスチックは焼却できなくなり、大量消費、大量焼却からの転換が必要になる。プラスチックを使用しない暮らし、バイオマス（紙・木・布）使用する暮らし、社会への転換が必然とされる。

受講生の中には、すでにアクションを起こしている方が参加、講座の中で貴重なお話をうかがう。①エネルギーの地産地消をめざして、私立小学校の屋根に太陽光パネルを設置、発電事業をしている。②プラスチック容器を廃止、量り売りのお店を開いている。想いを形にした行動力にパワーをいただきました。

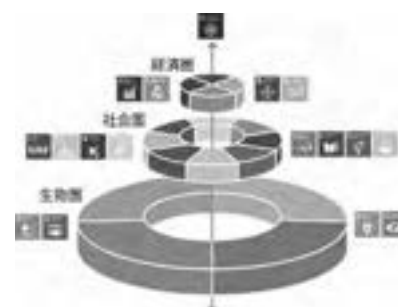
環境講座を通して、多くのことを学び少し希望が持てました。担当者のMさんはじめ、運営委員の皆さま、大変お世話になりました。

地球1個分の生活をするには

大谷内 千秋

異常気象による干ばつや洪水が世界中で起きて甚大な被害をもたらしている。日本でも豪雨、大雪、猛暑日が増えている。国際機関 IPCC は「人間活動による温暖化を疑う余地はない」と断言。地球温暖化の最大の原因は二酸化炭素など温室効果ガスだ。日本を含めた先進国は豊かな生活を送ってたくさんの二酸化炭素を排出しているが、今の日本の生活を維持するためには2.8個の地球が必要になるという。大量生産、大量消費、大量廃棄の生活は温暖化を進め、1個しかない地球は限界に近づいている。では持続可能な地球にしていくにはどうすればいいのだろうか。SDGsの「ウェディングケーキモデル」によると、「生物圏」「自然環境」が地球を支え、その上で私たちの「社会」や「経済」は成り立っている。海や陸の生態系を守ることが何よりも重要だ。

私たちの暮らしを地球1個分にしていく解決策として食とエネルギーの改革があげられる。日本は食料自給率、飼料自給率、エネルギーの自給率がとても低い。多くを輸入に頼っている現状を地域循環型の食やエネルギーの地産地消に変えれば、地域経済も回り、遠くからエネルギーを使って運ぶこともないので二酸化炭素削減にもなる。地域循環型の有機農業や再生可能エネルギーの普及が三鷹市の温暖化対策の鍵になると思う。またフードロスやごみ問題は、マイバッグやマイボトルが定着してきたように一人一人の意識で変えることができる。どこでどのように製品が作られたものかを見える化すれば消費者が選ぶ基準になり、廃棄は減りリサイクル率は高くなるのではないだろうか。講義から学んだことやアイデアを活かして地球1個分の生活をしていきたいと思う。



昨年度は経済コースにおいて「経済」面からのSDGsの講座を受講したので、今年度においては「環境や科学」面からのSDGsを考えるためこの講座を受講した。

メイン講師の室山哲也講師の「持続可能な社会をどうつくるか」をテーマに気候変動問題、地球温暖化、エネルギー問題、再生可能エネルギーなど多岐にわたる問題提起等があった。

さらに、そのほかの講師による、海の温暖化による海洋酸性化、マイクロプラスチックによる海洋汚染、環境破壊による感染症拡大、地球環境の変化に伴う安全保障問題、食の問題等、地球温暖化にともなう地球環境の変化による様々な問題提起等があった。

一方、ウクライナ侵攻等の社会情勢の変化により、電力料金、ガス料金、ガソリン価格の高騰等で石炭火力発電の容認や原子力発電に対する意識の変化（稼働期間の延長や再稼働）が起こるなど市民の意識に変化が見られた。

いずれの問題も課題が多く2050年「カーボンニュートラル」の達成のためには、太陽光、風力、地熱、バイオマス発電等の再生可能エネルギーの活用、カーボンフリー火力（水素・アンモニアの活用、CCUS）等について、国・公共団体及び企業がコスト削減や実用化に向けての技術開発が必要であり、市民の意識改革も重要であるとの指摘を受けた講座であった。

人類はレミングを超えられるのか

地球温暖化やエネルギー問題から、生物多様性や食糧問題まで、日ごろ新聞で読み流すことはあっても、必ずしも深く考えてこなかった地球の環境課題について様々な知見に触れ、充実した学習機会となりました。メイン講師室山先生の講義では、こうした問題を幅広く俯瞰した上で、問題の根源に人口問題があるのご指摘、非常に腑に落ちました。

子供の頃、動物図鑑で“レミングの大打進”の話を読みました。レミング（ネズミの一種）は大繁殖して一定数を超えると、自ら川や海に飛び込み集団自殺するとのこと、種の絶滅を回避する自然の摂理の冷厳さに、子供ながら震撼した覚えがあります。

人類もその誕生以来、認知革命や農業革命、更に科学革命等々により、様々な困難を乗り越え、80億人まで人口を増加させてきたわけですが、地球一個分の自然環境が養える臨界に達した観があります。世界終末時計はもはや90秒前、温暖化なのか、核/AI戦争や感染症なのか、あるいはその複合なのか、個体数を大幅に減らす自然の摂理に従って、一直線に動いています。この先は、そうならないことを祈りますが、利己心を克服する精神革命でもなければ、人類文明は衰退してしまいます。他の講師の方々も示唆してましたが、それはそれで、人類も自然の一員で、レミングを超えられなかったと理解すべきなのだと思わずに達観しました。

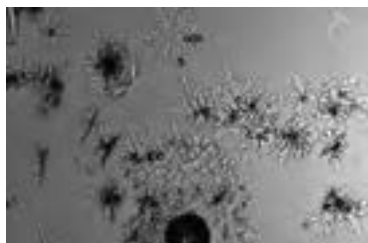
講義全体の中で、他に印象に残った学びは：

- ①現時点のテクノロジーでも、既に太陽光や風力発電が最も安い電力だが、日本はFITの条件設定を誤って、これら電源を普及させられなかった。
- ②丸山先生の講義は極端な面もあったが、IPCCや環境運動の主張にも誇張や取って語らない部分がある。（ユダヤ人の教え“十人目の男”を彷彿。）
- ③アグリビジネス寄りの農業・食糧政策の結果、日本の食が近年非常に汚染されている。

最後に、室山先生他講師陣の方々が無言に受講生に向き合ってくくださったこと、また、企画/運営委員の方々、自主学習の機会を有意義なものにしようと様々な工夫をされたこと、改めて感謝申し上げます。

温暖化を言うまでもなく今年の夏は暑かった。そんな最中、知人から親子向けの「雪と氷の観察・実験」を某博物館で行うのでと誘いを受けた。前半は低温冷蔵庫を利用して雪の赤ちゃんであるごく小さな氷の結晶作りの実験だ。暗い冷蔵庫内をペンライトで照らすとキラキラと輝く氷の霧が見えた。いわゆるダイヤモンドダストといわれる現象と同じである。次に少し大きな雪の結晶の観察だが、さすが相応の装置がないと結晶作りは難しい。そこで知人が冬の北海道で雪の結晶をレプリカ法というやり方で標本にしたものを持参、スマホに接写レンズ（100円ショップで手に入る）をつけて拡大しながら眺めた。

後半は冬の間に採取し、冷凍庫で保存しておいた天然氷に強力なライトの光（太陽光線も可）を当てて融かす実験。光を当てるとやがて氷の内部に雪の結晶そっくりな六角形の花びら模様が現れた。この現象を19世紀に発見したイギリスの物理学者チンダル（1820～1893）の名をとってチンダル像と呼ぶ。チンダルは第5回目の講義で石井雅男さんが、「二酸化炭素の温室効果の発見者」として紹介された。彼は物理学者であるとともに氷河学者でもあった。氷河学者が温暖化と関係ある二酸化炭素にも言及しているのが面白い。



氷の中に現れたチンダル像

科学現象はいろいろな分野にまたがって繋がり、それらの研究の積み重ねである真理に到達する。丹念な基礎的な研究があってこそだ。しかし現在の日本の研究は早急に結果ばかりが求められているようで不安を感じる。ただ、救いはワークショップに集まった子供たちの目が雪の結晶や氷よりもキラキラと輝いていたことだ。この中から一人でも気象や温暖化のことに真剣に取り組んでくれる子が出てくることを願わずにはいられない。

受講した講義についての所感

A.O.

印象深かった講師（講義）について所感を述べます。

【室山哲也さん】広範な知識はさすが。写真・イラスト・動画を多用した講義は分かりやすいが、講義資料は文章が少ないので、後から見返すと内容の詳細が思い出せない。

【石井雅男さん】「地球温暖化の猶予は10年ほどしかない。海の温暖化は、海面上昇だけでなく、生態系や食料供給にも影響を与える。」という指摘は重要。

【飯田哲也さん】「2050年までに再エネ100%は可能という見解が世界の科学者の主流」と述べるが、逆にそれまでの間は、火力・原子力が必要ということになる。

【橘川武郎さん】文字ばかりの講義資料にも関わらず説明が分かりやすく、飽きさせない。自分は政府寄りでも反政府でもなく現実主義者、と述べるが、「原発・石炭火力依存度を徐々に減らしていき、ゼロカーボンを目指すべき」という主張は説得力がある。

【丸山茂徳さん】今では数少ない地球温暖化懐疑論者であり、なぜそう考えるのかという説明を期待したが、ご自身が考案し特許出願中という水素製造システムのPRや、抽象的で難解な主張が多く、示したグラフやデータの説明もない。欲求不満が溜まった。

【藻谷浩介さん】「東大卒は実力がない。トヨタ、ソニーの新社長は早大卒。」などテーマの里山と関係ない話もあり、論理にも飛躍がある。期待にしていただけに残念。

私の独断的な評価に対して、講師に失礼ではないかと感じる方もおられると思いますが、昨今は大学の講義でも、教員が学生の評価を受けるのが一般的です。他の受講生の方には、私とまったく異なる感想を持たれた方もいるかと思いますが。上記以外の講義も大変有意義なものでした。

「もはや気候変動ではなく“気候危機”である」(2019年/グテーレス国連事務局長)「気候危機の原因は人間活動であり、もはや疑う余地はない」(IPCC 6次報告書、2021年)

衝撃的な言葉で始まった本講座。エネルギー問題、地球温暖化、マイクロプラスチック海洋汚染問題、生物多様性、食問題等々、様々な事項を学び、気付きを与えて頂いた。産業革命以降の人々の欲望が、環境に大きな影響を与え続けている事を改めて思う。地球をこれだけ傷つけている生物は、人間だけではないか。地球にとって人間は、とんでもない生き物なのではないか。そんな自虐的な思いも沸いて来る。

自分達にとっての便利さや物質的な豊かさを求め、享受する人々。金儲けの為に欲望を煽り続ける人々。その陰で生存を脅やかされる人々、そして多様な生き物たち……。

環境問題は倫理問題でもあるという。物が溢れる社会の中であって、自分にとっての`幸せ、とは何か、`豊かさ、とはどういうものか——。一人一人に投げかけられた問いだ。

私にとっての答えは既に出ている。

さあ、足るを知り、身の丈に合った生活をしよう。`勿体無い、を大事にしよう。そして孫と一緒に四季折々の故郷へ出かけ、自然の中に身を置こう。故郷にはまだまだ豊かな自然が溢れている。今年は山へ連れて行って、カブト虫の匂いを教えてあげよう。「バーサン、あのね、こうやって(お日さまに向かって目を閉じて)深呼吸するとね、お日さまがコッチャンの中に入って来るんだよ。」去年の夏、ゴーヤの実を採りながら話してくれた言葉だ。今年は何を感じてくれるだろう。バーサンは楽しみにしている。

地球環境をめぐる課題解決の困難さを改めて実感

市民大学講座への参加は今年度が初めてでした。その参加のきっかけとなったのは、新型コロナワクチン接種で三鷹中央防災公園・元気創造プラザを訪れた時のこと。1階の接種会場向かいにある休憩室のガラス壁に掲示されていた昨年度開催の各講座による成果発表の掲示物が目にとまり、その一つ一つにとっても興味をそそられました。その後、早速“三鷹市民大学”をネット検索してそのまま参加申し込み。幸いにも希望したテーマ講座への参加が叶いました。まずは室山哲也氏がメイン講師であることに感動し、とうとう最終回まで一度の欠席もなく様々な分野の専門家による講義を興味深く拝聴させて戴くことができました。目下、地球環境改善のためのシナリオは気候変動枠組条約締結国会議(COP)が掲げる様々な提言で示されていますが、今回ご登壇戴いた専門家の中には必ずしもそれらを肯定するばかりではない方もおられ、ある意味新鮮且つ多様な立場や考え方に触れることができたことも大きな収穫でした。

本講座を通じて感じたことは、兎にも角にも現在の地球環境を改善することが如何に困難であろうかということ。今、我々の衣食住を取り巻く何から何までが化石燃料由来の物ばかり。特に目を引くのはプラスチックです。便利であるが故にありとあらゆる物がプラスチック製品として人の生活に浸透しています。そして、これらは最終的にマイクロプラスチックとなって広く海洋へと流出し、多くの生物に悪影響を及ぼした後、食物連鎖によって我々の体内に戻ってくるという皮肉…直ちには解決し難い事実です。

最後に、本講座を企画戴いた企画委員、そして円滑な運営を支えて下さった事務局の方々に深く感謝申し上げます。

タイトルのように私は団塊の世代である。HALF CENTURY 前は、世の中全てが「早い安い旨い」の吉野屋の文句ではないが、当時は QCD (Q = QUALITY、C = COST、D = DELIVERY) が最優先で求められ、トヨタカンバン方式や日本能率協会等により、QCD が最大の THEME であり、私の働いた会社では求められたものは、某政治家の発した「2 番では駄目なんですか？」なのは論外で常に常勝であり、世界 No.1 を求められて切磋琢磨してきたものです。その為世の中は大変便利になり生活 LEVEL が格段に向上し良い生活が送れるようになりました。しかしその半面我々は大切な事を忘れ見失ってしまい、そして 50 年後の今、そのしっぺ返しを喰らっていると思っています。現在に至る PROCESS の途中では、工業製品に対し 3 R (REUSE、RECYCLE、REDUCE) が求められその道に走ろうとした企業もあったのですが、これを行なう事は生産よりも多大な COST を要する為、自然消滅し、どの企業も利益優先主義に走り、現在このようなことになってしまった。MOLD 無成型品には REUSE 出来るように製品に材料記号が刻印されているのですが、今はそれもむなしく全てが丈夫なゴミの塊となって処分されてゴミ廃棄場にも窮する事につながっています。今ここでもう一度原点に立ち返りかけがないこの ONLY ONE EARTH を次世代に上手く引継いでいく為にも、今が大事!! BACK TO ORIGINAL FOR ONLY ONE EARTH の道に向かって地球全員の力を和して一つにして立ち向かっていきましょう!!

市民大学の受講を終えての感想

神 孝 之

『脱炭素社会に向けた大変革が始まる』講座を受けての感想を記述します。このテーマで頭に浮かんだのはカーボンニュートラルの 2050 年、2030 年のそれぞれの目標は厳しい目標であることには間違いはなく、それ以上に達成に向けた手段や方法が十分に検討した様子が伺えない。脱炭素社会に向けたエネルギー問題は国の根幹をなす問題です。国の総電力量が 3.11 東日本大震災までは発電総量が年々伸びていた。しかし大震災を契機に原発が止まり大きな被害が発生し、節電や停電で大変な苦勞をしたことを我々は忘れずにいる。その後の年間発電総量は省エネや景気の動向がそれ程に伸びず国は電力総量の問題を重大事項として検討してこなかったのが現実である。しかし当時の政権が十分な認識や課題を検討せずに 2050 年カーボンニュートラルを提言した。しかし昨年より電力総量が不足すること、ウクライナ問題が起きたこと考えに入れたにせよ電気料金の値上をしなければならなく、原発を稼働へ向け舵を切ろうとしていることです。

しかし東日本大震災以降に経済が発展することが考えられたのだが、経済は伸びることなく経過し、全くエネルギーの問題を重点問題として施策をしてこなかった。

この間世界は再生可能エネルギーの太陽光や風力に力を入れてきた。日本の風力の電力総量の 0.7% であるが、日本と同じ島国である英国は 20% である。日本は再生可能エネルギーの占率は約 18% で、先進国の中でも低位ランクにある。経済同友会は太陽光・風力の再生可能エネルギーの目標を修正すべきとして政府が考えている計画の約 2 倍の 40% へのアップを提言している。このことは如何に政府の考えが低いかである。脱炭素のエネルギーについて我々国民の考え、行動も変わらなければならないと思います。

カーボンニュートラルを常に考えて取組むことが、産業構造や経済社会の変革をもたらし、大きな成長につながるという具体的な発想で、日本全体で取り組んでいくべきだと思います。

室山先生の講義は、4年前の「現代社会を考える～哲学的視点に立って」に続き、2度目の受講でした。先生は、現代の抱える難しい事象や問題を、軽快なトークで飽きさせずに、子育て真っしぐらでニュースもろくに見ていない私にも分かりやすく解説してくださるので、今回も迷わず受講を決めました。

また実は今回の受講前、たまたま講座担当者の方に、この市民講座はどうして普段絶対会えないような多彩で著名な講師陣で編成できているのかお尋ねする機会がありました。それがなんとネットや書籍のあとがきから連絡先をピックアップして、片っ端から電話やメールで何度も口説いてお願いして下さったとのこと！そのあり得ないご苦勞とそんな貴重な講座を無料で受けられる三鷹市の素晴らしさに非常に感動し、とくにありがたみを感じながらの受講となりました。

そのような貴重な機会の中でも、特に印象に残っている講義のひとつめは、水ジャーナリストの橋本淳司先生による「気候変動と水循環」です。飲み水以外でも、例えば外国の工場で作られる衣服の生産過程で大量の水が使われ、化学物質とともに河川に流されて地元の水質汚染の原因になっている、という事実はまさに、寝耳に水、でした。安いから使い捨てという感覚でファストファッションを購入しがちでしたが、意識していなかった地域の方々の健康被害にもなっていることを知り、今後は本当に必要なものだけを買おうと決めました。

ふたつめの講義は、農工大の高田教授による「マイクロプラスチック海洋汚染問題」です。海洋に浮遊しているもの以外でも、実はプラゴミから滲み出て河川に流れていたり、街中に吹き溜まっていたり、水を飲んでいる私たちの血液内にもマイクロプラスチックは存在しているというのです。またペットボトル飲料では、ボトル内にも溶け出しているとのこと。受講後、健康とプラゴミを減らすため、ペットボトルの炭酸飲料の定期購入をやめました。

他にも衝撃的で目からウロコの講義はたくさんありましたが、驚愕と忘却を繰り返してしまうので、できるだけ帰宅後こどもに講義内容を話したり、一講義一実践というつもりで、小さなことでも家庭内で何かアクションを起こすことを心がけました。ほかの電力会社をさがしたり、ハザードマップの見方を少し変えてみたり…。1年間の受講を通して、単なる刺激ということ以上に日常の発見や反省、丁寧に生活しようという気持ちが強くなりました。講師の先生方を始め、コーディネートしてくださった担当者や委員の方々に深く感謝申し上げます。

今回三回目となる市民大学総合コースは改めて貴重な学びの場であり時間でした。

企画運営に関わられた方々と時間を割いてご参加された学習者の方々に感謝です。

しかし今回も充実感と同時に疑問や改善すべき課題も多く感じましたので、個人的な考えで恐縮ですが幾つかのご提案を以下に挙げさせていただきます。

- ◎多様な情報発信で多くの市民に活動内容を届ける（デジタルツールやメディアの活用と支援）
- ◎柔軟にだれもが参加できる場にする（各委員の固定化を無くし新たな参加者を支援する体制づくり）
- ◎市民が主体として取り組むワークショップスタイルへの移行（受け身の受講スタイルからの脱却）

現在の市民大学が長年の歴史と市民の取り組みでつくられたものであることは理解していますが、だからこそ現状に満足せず今後もこの素晴らしい学びの場を活用し実践することが大切だと感じました。

まず、本コースの企画運営に携わられた関係各位、講師の皆様にご心より感謝致します。多方面に渡る講義内容で、とても有意義なコースでした。

思い返せば50年程前、高校生であった私は、『成長の限界』を読んで強い衝撃を受けました。それから丁度半世紀、そのシナリオに沿って世界は動いていることに改めて衝撃を受けていました。このような背景の中で本コースの開設を知り、参加を希望致しました。

コースを通し、私にとってのキーワードは『地球一個分の暮らし』です。世界人口の急増、消費拡大と共に環境破壊、資源枯渇、紛争激化等の危機は増しているようにも感じます。環境関連問題の中では、気候変動・温暖化の影響は世界中で人類が体感しており、危機意識も高まっていると思います。

対策としての脱炭素社会実現には、世界に広がる格差を縮めながら、いかに地球が許容出来る範囲の消費に近づけるかという難課題への対応が必要。克服には、主要排出国のリーダーシップと共に、『一度手にしたものは手放さないという人類の性』の中、技術革新やイノベーションなしには実現不可能だと思いますが、各個人の意識改革・行動も問われており、次世代のため今出来る行動を起こすことが重要だと考えます。

最近、破壊されたオゾン層回復の可能性が報じられました。フロンによるオゾン層破壊報告から約半世紀、各国協調した規制の結果、もう半世紀先には南極上空でも回復見込みとのこと。喜ばしい報道ではありますが、破壊スピードに比べ、回復にはその何倍もの時間が必要なことを忘れてはなりません。

同様に脱酸素社会実現も可能だと信じていますが、手遅れにならないように働きかけ、行動することが大切だとも思います。

受講を終えて

今や人類の最大課題となった地球温暖化を如何に食い止めるかを科学的見地にもとづき環境問題を探り、環境活動について学んだところです。メイン講師の室山哲也先生からは「脱炭素にむけた大変革が始まる！地球市民として考える脱炭素社会実現への道」と題して、以下の様な講義でした。①持続可能な社会をどうつくるか②どうする？エネルギーのベストミックス③再生可能エネルギーの可能性④生物多様性の危機⑤テクノロジーの光と影⑥先生を交えたグループ討論。印象に残った②の講義について学んだ事、考えた事について記します。

1. エネルギーは文明の源であり人類の生存そのものである。2. 地球エネルギーは化石エネルギーと非化石エネルギーであり、その大部分は化石エネルギーである。3. エネルギーのベストミックスのために3つのポイント（安全・安心、安定、安価）からエネルギーの比較検討と問題点が示された。（化石燃料～原子力～再生可能エネルギー）4. 今後のエネルギー政策として3つの「安」、原発の位置づけと化石燃料をどう利用するか、そして脱炭素技術の開発である。以上、どうする？家康ならぬエネルギーのベストミックスについての講義でした。所感として今のコロナ、ウクライナ、そしてトルコと大災害などで、あらためてエネルギーの大切さ！大事さ！を勉強できました。地球市民、資源のない国の日本市民として、原子力（エネルギー）の開発、推進する事が第一と思いました。又再生可能エネルギーの技術開発と教育、研究にも大きく予算を投資することが重要と考えます。

一年間の講義を終えて

J.N.

今年度、初めて市民大学という取り組みを知り総合コースを受講させていただきました。

折しもロシアがウクライナに侵攻を始め暗澹たる思いでいた時期に、副題の「地球市民として考える」という文言に惹かれ、何らかの解答が欲しいような思いでした。

最初の講義で「あなたのSDGsの入り口はどこですか？」との問いを受け、漠然と受け身で講義に臨むのではなく、自分の事として能動的に学ぶ姿勢でいなければならないと気持ちが引き締まる思いがしました。

毎回の講義は多岐に渡り、一つの側面からだけでなく別の側面からの講義が聞けたのもよい機会でした。講師の方々の熱のこもった講義は壮大で次々と出てくる化学式・年号・人名・書物名…、我々だけが聞くのは勿体ない講義でした。

- ・環境問題は今までの歴史に起因し経済と密接に関係してくる事。
- ・既に海・食・生物の多様性にも影響を及ぼし、化石燃料に頼らず持続可能な社会を実現することは急務であると学ばせていただきました。

「未来の地球市民の為に今を生きる我々の倫理観が問われている」との室山先生の言葉に自分はどうか答えていくのか…。

今回の受講は「知る」第一歩になりました。今後は学びを深め・継続し・実践に移すことが大事だと感じた一年間でした。既に行動に移して先に進んでいる方々にもたくさんの刺激をもらいました。貴重な学びをありがとうございました。

次世代の人たちが幸せであるように

Y.M.

昨年、当施設1階の壁に受講生による成果発表が展示されており、市民大学に関心を持った。学ぶなら環境問題だと思った。自然が大好きな小学生の娘が「これまでの人たちが大量消費や環境破壊を繰り返した結果なのに、なぜ私たち以降の世代が代償を払わされるんだろう」と言っていたからだ。私は少なからずショックで、どのように答えるか悩んだ。誠実に答えるにはもっと知ることが必要だと思った。その上で私自身の核となる考えを持ちたいと思った。

講座に関しては、幅広い世代の方々に参加されており、毎時間の質疑応答では活発な意見交換が行われ、その雰囲気には最初は圧倒された。環境問題に関連した団体を立ち上げている方、活動に参加されている方も多く刺激を受けた。一歩踏み出して行動を起こす。自分のできることから取り組んでみようと思う。

授業や成果発表を通して感じたことは「環境問題はとても複雑である」ということだ。再生可能エネルギーを例にとっても日本は日本の事情があり、世界の流れから遅れていることを一概に批判できないということだ。

一方、国内でもCO₂削減や省エネの技術が日々開発されていることも学び、前向きな気持ちになった。洋上風力と漁業の協調や、営農型太陽光発電など調べるとたくさん出てくる。

まだまだ日本は“落ち目”ではないはずだ。

授業の日は、娘と晩御飯の時に学んだことや感じたことを伝え、話し合うこともあった。環境問題に関して、娘の捉え方は以前と少し変わったように思う。

メイン講師である室山先生の言葉が印象に残った。

「環境問題に対して我慢して取り組むのではない、楽しく取り組む（ライフスタイルを変えていく）こと」「地球温暖化は、生きていることの仕組み、その感動を知る絶好のチャンスと捉えよう。」

環境問題について、本を読んだり、ネットで検索したりして自主学习をしていましたがもっと広く深く学びたいと思っていたところ、友人からの紹介で受講しました。

さまざまなデータや世界各地での環境対策について知りたいと思っていたので、それぞれの専門分野の講師から講義を受けることができ知識をより深めることができたことをとても嬉しく思っています。

それだけで満足せず、では自分自身が何をできるか？を考えながら動き続けたいと感じました。

せっかく環境問題に興味がある人が集まっていたのに、「学んだことを受けて次にどうするのか？」と一緒に引き続き考えたり、動いたりできないのが残念です。

次のステップにつなげられるしくみ作りができるのもっといいと思うので、今後の市民大学にはそれを期待しています。

環境問題を複眼的に理解しつつ、真実を探求し、伝える！

森井紀明

7年前の科学コースでお世話になった室山哲也先生が再びメイン講師となり、テーマの「環境と科学」に惹かれて参加しました。先生の講義は、最終回も含めて計7回、懐かしい語り口にて、NHK番組の動画も参照しつつ、持続可能な社会のあり方、エネルギーのベストミックス、再生可能エネルギーを軸に、生物多様性等にも話が及び、リラックスしながらも、本質的な問題を正面から取り上げており、学ぶ中で頭の整理ができました。

個別テーマでご登壇された先生方の講義では、地球温暖化と海の変化（石井先生）、マイクロプラスチック海洋汚染（高田先生）、パンデミックと環境破壊（井田先生）、安全保障から見た地球環境問題（小野先生）は、あまり深く知らなかったテーマで、具体的内容を伺って強いインパクトを受けました。脱炭素全般では、気候変動への市民の向き合い方（桃井先生）、エネルギー大転換（飯田先生）、カーボンニュートラルと原子力・石炭火力（橘川先生）は、独自の視点に立脚した講義であり、発見や気づきも多く有意義でした。一方、脱原発・脱ダムの思想（矢間先生）、脱炭素社会は持続不可能（丸山先生）は、興味深い部分はありつつ、率直なところ、消化しきれず、疑問が残りました。それも含め、自分では探知しないと思われる講師やテーマが多く、大いに刺激を受け、考えさせられました。先日、知人から、何故、市民大学総合コースを受けるのか、質問された際、今のネット・SNS時代、自己の関心・周囲の情報に無意識に偏向しがちな世の中で、企画委員の問題意識に基づき、生涯学習課の方のご尽力で実現した講義と向き合う機会を得て、自分として納得いくか否かを問わず、異なる視座や理解の話を伺う貴重な機会と体験を得られるからだ、と返答しましたが、今回は、そこに大きな参加意義を見出した次第です。

自主学习では、他の学習生との意見交換の場を得て交流し、特にフェスティバル展示物作成において、今回は、市民大学の本義も踏まえて、講義内容から市民一般に伝えたいことを洗い出し、グループ協議の上で3つに絞り込み、『地球環境問題…知られざる真実 ～キーワードは「海」～』と称してまとめました。伝えたい真実を探求するため、学んだ知識や事実を点検・記述する中、本質的に重要なことを改めて確認し、自己の言葉で語れるところまで突き詰めたことで、体得の手応えを感じることができました。

メインテーマの気候変動問題や脱炭素社会に関しては、様々な観点から深掘りした講義を連続して聴くことで、複眼的な理解や思考を持てたことが有意義であり、冬には追加で、最近関心が高まった食の問題にて2講（藤原先生・安田先生）聴けたのも有難かったです。昨年のSDGsに続いて、今回も、仕事にも関係するテーマで見識を深めると共に、学びから行動への展開に取り組み、自己の未来に繋がる講座とすることができました。関係者の方々に深く感謝申し上げます。

地球温暖化による気候変動。日本でも、最近では毎年のように大雨や強風による災害が発生しています。このままでは、人間が地球で暮らしていけなくなってしまいます。そのような状況を少しでも遅らせるために、私たちは次世代のために何が出来るのかを考えるために学習してきました。

地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出量を減らすために、エネルギーを化石由来から再生可能エネルギーにかえていく必要があります。自治体レベルで学校やコミセンのような公共施設、福祉施設などへの太陽光パネル・蓄電池の設置は、防災対策にも役立ちます。また、私たちの便利で楽な生活、大量生産、大量消費、大量廃棄の生活も見直す必要があります。誰がどこでどの様にもものを作っているのか、そしてどの様に廃棄されるのかが見えづらい状況にあります。私たちは、物と人、人と人などのつながりを取り戻していく必要があります。

自治体レベルで、地方との関係を築き、水源となっている山や川、食物を生産している農地を一緒に守っていく、関わっていくことが必要です。

個人レベルでは、コンポストを行い、たい肥を自宅のベランダの鉢植えに使っています。しかし、まだまだ出来ることはありそうです。1人でコツコツ行うのは大変です。三鷹駅近くに、仲間と日常使いの調味料などを必要な量だけ持参した容器で購入していただける量り売りの店「野の」を開店しました。環境に対する取り組みを発信するとともに、生産者さんと消費者をつなげる出会いの場、語り合い、つながる場になればと思います。ゴミやプラスチック、食品など私たちの暮らしについてもっと気軽に話す場、話すことが必要だと思いました。

自然豊かな環境と地球になるべく負荷をかけない生活の為に自分の出来る事 E.M.

三鷹市に在住し堆肥作りを20年余り継続して行っています。自宅周辺の畑も次々と宅地が変わって行きました。自分に出来る事、自分が求めている事はどう言った事なのかを考えて始めた家庭内の生ゴミの堆肥化。3年経過後落ち葉を含む有機質に富んだ土質に変わりミミズが増えカブトムシも樹液を求めてやってきました。種から育った紅葉の木に取り付けた巣箱にはシジュウカラが子育てをし、幾度も巣立って行きました。自然豊かな環境と地球になるべく負荷をかけない生活を求めて自分の出来る事。

地球温暖化、ゴミ問題、自然災害、エネルギー問題等様々な地球規模の課題をどう考え、どのような対策をすれば良いのか、室山先生を始め各分野で研究、調査を行われている先生方をお迎えしての講義は毎回新しい気付きと、物事の多角的捉え方、長中短期で分けてビジョンを考える必要がある事を学ばせて頂きました。自分の視野や思考がいかにか狭かったのかを感じる瞬間でも有りました。異なる経験や考えを持つ受講生同士のグループワークやフェスティバルでの発表においては、学習内容をより深める事が出来ました。どのグループのポスターセッションも如何に分かりやすく内容を伝えられるかの工夫がされており、各々がしっかりと講義内容を受け止め解釈し発信していると深く感じました。

SDGsはとても大きな課題ですが一人一人が出来る事は必ず有ります。多くの出会いと学びの中で現状を知り自分の出来る事から始め情報共有をして世代間を越えて繋がり取り組む必要を学ばせて頂きました。

生涯学習の意味と意義を改めて感じた1年であり、とても素敵な機会を頂いたメイン講師室山哲也先生、生涯学習センター担当の職員さん、受講生の皆様に心より感謝申し上げます。

市民大学5コースのうち“科学的見地に基づき環境問題を探る”という現代的課題を学びたいという気持ちで応募しました。脱炭素社会がなぜ必要で、持続可能な社会の実現をするためのSDGsの実現を世界の動き、日本の取り組みなど幅広い角度からわかりやすい講義で学びました。消費者として電力会社を自然エネルギー重視の会社に切り替える、生活者として自宅に太陽光パネルをつける、省エネ型の改築などが大事というお話もありました。

地球温暖化や人口問題の根本的現象についてわかりやすく学びましたが、マイクロプラスチック海洋汚染問題や食の問題も初めて聞いて驚くことがいくつもありました。また、東京都の取り組み「ゼロエミッション東京の実現」やカーボンハーフ実現に向けた条例改正について、三鷹市内公共施設の太陽光パネル設置状況など身近な取り組みは特に興味深く聞けました。

自主学习では受講生一人一人が積極的に関わっている姿勢に刺激を受け、講義を聴くだけではない学びの大切さを実感しました。

情報を得ることは常に必要と思うので、今後も機会を見つけて参加していきたいと思っています。

子育ての輪でつながる～! みんなで子育て・孫育て

講師：松田 妙子
(一般社団法人ジェイス理事)



学びをとめないで実践との行ったり来たりを楽しもう

講師 松田 妙子

今回、三鷹の皆さんと、一年間の中で何回かお会いできるお役目をいただき、折々に語り合い、みなさんの想いをきかせていただきました。

まず嬉しく感謝しておりますのは、いつ伺っても皆さんがあたたかく、ご機嫌なオトナとしていてくださったことです。一年間の学びの場が、ご機嫌良く、外からの人をふんわり受け止めることができるチームであることはとても素晴らしいと思いました。

もちろんそこには大人の社交として、その場を大切に、あまり踏み込まず、うまくやる、ということも含まれていたかもしれません。

でも初めてで戸惑っていたり、私なんて場違いなんじゃないかと思ったり(それは私だってそうなんです、私なんかでよいのかなあって)そういう人にとってはありがたい出迎えであること。きっと、この方々となら、春に「場」を一緒にやれると思っていたことが確信に変わりました。

最後の2回に「地域に場をひらく」にチャレンジしました。皆さん最初は面食らっているようでした。やりたいことは特にないって。ホントかな？

気になる新聞記事をばーんとぶつけて、モヤモヤを残しつつ私が去った後が素晴らしかったのです。

お祭りに出展して学びの経過報告をしたり、アンケートをしてみたり。地域に出て対話したことで掘めたこともたくさんあったことでしょう。

そして、その場がどうありたいか？というところで、自分の子は自分で見てください、ではなくみんなで関わりながらその間にいろいろ体験したりゆっくりしてもらいたい、というテーマが皆さんの中で固まりました。すごいことです。町じゅうがそうなったらいいな。という願いを、まずは、この二日間の時間内だけでも実感してもらいたい。パパママが私たちを、信頼してくれて、少しでもお子さんを誰かに委ねることができたなら。子どもたちが地域の大人に心をゆるして、いつもの家族と別の時間をその子なりに過ごすことも大切な経験です。

「やること」でなくて、「どうありたいか」を考え抜いてくださった皆さんには脱帽です。いろんな制限もありつつも、ゆるやかにしなやかに(ここが三鷹らしいと私は思います)、そして地域のグループにまで声をかけて、場が実現しました。

当日はいろんな声かけで知ってくださっていたり、チラシを持ってナンパにいったり、その場でもどんどんコミュニティワークが実践されていきました。親子だけでなく、いろんな方が入れ替わり立ち替わり見に来てくださっていましたね。その方たちとはこれから何が一緒にできそうでしょうか？楽しみですね。どんどん仕掛けていってくださいね。

実感したのは、やはり、学びは学びっぱなしではダメということです。学びはその後が大事だからです。実践するには？誰かに伝えるには？表現するには？繋いでいくには？学んだら、知ったら、気づいたら、その分、問いが生まれてきます。

このコースの良さは、そこに仲間がいることです。(毎回終わった後の自販機前も楽しそうだったなあー子どもたちもかわかったー！)次のステップを仲間と体験するところまで今回やりました。しかも途中で仲間に新しい家族が生まれるなんて喜びもありましたね！おめでとうございます！

また、実践を深めたら、集まって報告したりできるとよいですね。あのプログラムも、新たに実施すると違う景色を見ることができるともかもしれません。行ったり来たりが大事なんではないかと思っています。進化、深化していくと思います。

これからの三鷹がますます優しさに溢れたまちになりますように。皆様のご活躍を楽しみにしております！！！！ありがとうございました。

子育てしながら街に出よう！

メイン講師紹介

まつだ たえこ
松田 妙子さん



一般社団法人ジェイス理事。

東京都渋谷区出身。大工の祖父の仕事の傍らで鉋屑で遊んで育つ。大学卒業後、国立総合児童センターこどもの城に勤務。夫の転勤先の三重県で育児スタートし、同時に当事者同士であつまる赤ちゃんサロンをはじめ、手書きの情報紙を発行。

東京に戻ってからは、子育て支援グループamigoを立ち上げて、産後の家事援助訪問活動と常設の居場所を保育園の2階で開始。現在はせたがや子育てネットや子育てひろば全国連絡協議会の理事として、地域を基盤とした子育て支援活動をつづけている。



●カリキュラム

回	日付	講義名 学習内容	講師
1	5月13日	開講式・オリエンテーション	自主学習
		学習生の自己紹介、運営委員の選出	
2	5月20日	地域(社会)で子育てとは/聴いてもらう体験	一般社団法人ジェイス理事 松田妙子さん
		自助/公助とは異なる共助としての地域子育ての必要性	
3	5月27日	子育てをする仲間や地域の方との出会いの場をどうつくるか/ 私をかたちづくるもの	一般社団法人ジェイス理事 松田妙子さん
		地域子育て活動の経験、実践例から考える子育てを通じた場づくり	
4	6月3日	メディアと子どもの発達	一般社団法人ジェイス理事/株式会社喜楽学舎代表取締役 古野陽一さん
		急速に発達しているデジタルメディアが子どもの成長と発達に与える影響について	
5	6月10日	自主学習	自主学習
		今後の自主学習の内容について検討	
6	6月17日	子どもの「遊ぶ」が繋げるまちづくりとは	一般社団法人ジェイス理事/一般社団法人プレーワーカーズ理事 神林俊一さん
		子どもの遊びの場を通じた地域との繋がり	
7	6月24日	自主学習	自主学習
		市民活動団体「みんなのみたか」の方々と地域活動について意見交換	
8	7月1日	脳の仕組みを知ってコーチングを子育てに活かそう	神親ナビゲーター やまだともこさん
		子育てに活かせる様々なコミュニケーション方法	
9	7月8日	AI時代を幸せに生きる子を育てるためのコーチング	神親ナビゲーター やまだともこさん
		コーチングの観点から考える子どもとの実践的なコミュニケーション	
10	7月15日	自主学習	自主学習
		子育て中の課題を考える	
11	9月16日	企画を持ち寄ろう/プレゼン&ブラッシュアップ	一般社団法人ジェイス理事 松田妙子さん
		各自が地域でやってみたい企画を発表	
12	9月30日	ライフバランス ～人生100年時代の今&未来の充実レシピ～	人材育成コンサルタント 三好良子さん
		今、そしてこれからの幸せに生きていくために自分の大切にしたいこと、やりたいことを棚卸し	
13	10月7日	これからの時代を生きていく子どもたちに必要な教育と大人の 関わり方【オンライン】	株式会社ZEN / 株式会社グランドクロス代表取締役 森田昭仁さん
		「教える」から子どもが自分で「考える」ための大人の関わり方	
14	10月14日	【公開講座(金曜日)】ロシアのウクライナ侵攻と日本の安全保障政策	防衛ジャーナリスト 半田 滋さん
	10月15日	【公開講座(土曜日)】パレスチナで働いて思うこと —基本的人権と尊厳と平和について考える—	
15	10月21日	自主学習	自主学習
		生涯学習フェスティバル(12月3日、4日)に向けた自主学習。講座での学びと現在抱えている子育てに関する課題をまとめる	
16	10月28日	生きる力を育てる 遠野のわらべうた ～赤ちゃんへの語りかけ・あやしかた～	臨床検査技師・保育士 木津陽子さん
		遊びや生活の中で伝えたい想いを口伝えに唄い継いできた「わらべうた」の持つ力について。『子育てとはたくさん遊んで身について、体験の中で「なんでだろう?」と思った時に教えること』	

回	日付	講義名	講師
	学習内容		
17	11月4日	ゆるっとアウトドア防災で日々の暮らしと子育てをそのまま防災に	アウトドア防災ガイド あんどうりすさん
		防災グッズに拘らず普段使いの子育て用品を防災グッズに利用するという考え。最新の防災情報をチェックして備えること、常に空気、水、風を感じて生きることの大切さについて	
18	11月11日	もっと子育てが楽しくなる！ ～コミュニケーションのコツ～子育てで一番大切なこと？	「おやこみゅ」NPO法人親子コミュニケーションラボ代表理事 天野ひかりさん
		親や周りの日々の言葉かけで大切な自己肯定感を育む。認める→親がやって見せる→ルールの説明の繰り返しで親子の信頼関係を築く。本人と他人の命に関わらなければ否定せず「ダメ」を「いいよ」「一緒に」へ変換する。	
19	11月18日	家族で地域で、子育て、孫育て、たまご(他孫)育て	NPO法人孫育てニッポン理事長 棒田明子さん
		「まち保育」という考え。お年寄りと子どもを引き離してはいけない、過去と未来を断つことと同じだから。親と祖父母は立ち位置が違う。親は子育ての決定者、祖父母は見守る。『孫育て10カ条』	
20	11月25日	自主学習	自主学習
		生涯学習フェスティバルでの展示物を作成。	
21	12月9日	かがく絵本でひろがる世界	株式会社福音館書店月刊誌編集部長 石倉知直さん
		科学絵本とは今生きている世界について知る手段、生きるに値する世界と感ずる手段。「知ることは感ずることほど重要ではない(RACHEL CARSON)」科学絵本ができるまで、作者とのやりとりや絵本作りで重視していること	
22	1月13日	企画を組み立てる/誰を巻き込む？	一般社団法人ジェイス理事 松田妙子さん
		前半：市民、地域が子育てに参画していく仕組み作りが大切。 後半：「地域に場をひらこう」の実践に向けての準備、話し合い。	
23	1月20日	自主学習	自主学習
		「地域に場をひらこう」の実践に向けての準備、話し合い。	
24	1月27日	人生を豊かにする すてきな絵本100	(一社)チャイルドロアクリエイティブ代表理事/ (株)フレーベル館顧問 木村美幸さん
		子どもの読み方と大人の読み方は違う。絵本は生きてきた経験値で読む、自分の中の発達を読む再認行為である。絵本の読み方についてのアドバイス。お勧めしたい絵本について 『絵本カタリスト』について	
25	2月3日	自主学習	自主学習
		「地域に場をひらこう」の実践に向けての準備、話し合い	
26	2月10日	自主学習	自主学習
		「地域に場をひらこう」の実践に向けての準備、話し合い	
27	2月17日	デジタル時代の子育て・孫育てで大切なポイントを一緒に考えてみませんか？【オンライン】	愛知淑徳大学人間情報学部教授 佐藤朝美さん
		ネット依存にならないようにルールを作って大人が見本を示す。デジタルとアナログは対立するものではなくうまくバランスをとり両者共利用する。デジタル絵本等良質なコンテンツで創造的な活動を子ども達に体験してほしい	
28	2月24日	まち全体を子育て支援拠点に	一般社団法人ジェイス代表理事 武田信子さん
		生後1か月の乳児の肩こりや骨盤の変形で自然分娩ができなくなっている現状。子どもの変化は子どもが育つ場の変化による。核家族でも地域内では3世代。子どもではなく子どもを取り巻く環境を変えようことの重要性について	
29	3月3日	地域に場をひらこう (実践1回目)	一般社団法人ジェイス理事 松田妙子さん
		「地域に遊び場ひらいてみました」の実施。参加者を広報みたか等で募り学習生がホールで段ボールトンネル、新聞紙プール、手作り遊び、読みきかせ、アロマ体験コーナーを用意して参加者に自由に遊んでもらう場を提供。	
30	3月10日	地域に場をひらこう (実践2回目)	一般社団法人ジェイス理事 松田妙子さん
		「地域に遊び場ひらいてみました」の実施。参加者を広報みたか等で募り学習生がホールで段ボールトンネル、新聞紙プール、手作り遊び、読みきかせ、アロマ体験コーナーを用意して参加者に自由に遊んでもらう場を提供。	

1年間の講座を終えて

A.I.

1年前、三鷹市に引っ越してきて間もない頃、この講座を見つけました。育休中に新しい環境に慣れ、近所に知り合いをつくりたいと思い、申し込みました。

コロナ禍での出産・育児で、人と知り合うこと、人と集うことがなかなか難しい中、このような講座に参加できたことはありがたかったです。また、託児付きだったため、自分ひとりでゆっくり勉強できる時間があるということも、未就学児2人の母である私にとってはとてもありがたかったです。

「子育て・孫育て」コースということもあり、とても幅広い年代（20～80代）の方々となることができました。講師の先生方には、子育てを軸に、実に多岐に渡る内容の貴重な授業をしていただきました。自主学習の時間には、地域の人となつなりたいと思って参加している人、そして地域の人々をつなげたいと思って活動しながら参加している人が両方向から話し合い、地域で子育て、孫育てしていくことについて考えました。

この講座を通して得た学びと経験を、自分の子育てにそして自分自身の人生に活かしていきたいと思えます。

1年間本当にありがとうございました。関係各位に感謝申し上げます。

当講座を受けての学び

K.I.

私は当講座で4つの学びがありました。①社会で今何が起きているのかという客観的な視点 ②絵本や遊びという切り口から始まる視野を広げる経験 ③子供に優しくする為にはまず自分に優しくする事から始めること ④地域の皆様と触れ合うことで人の温かさや絆を感じられたこと。

講座が始まった当初は「自分がここにいる良いのか？場違いなのではないか？」と思い、講座に来るのが億劫でした。それは私自身が地方出身者で、子どもはこの地で育てているものの、私自身がこの地で育っていないため、この地に馴染みたいとは思っているものの、勝手に疎外感を感じていたのだと思います。そのため、地域で精力的に活動されている皆さんをみて、自分がここにいるのかと自分の存在に申し訳なさを覚えてしまっていたのだと思います。さらに、現在5歳児2歳児の子育て中で、お恥ずかしい事に自分に余裕もないことを理由にして、地域の中で誰かのためにと動けるほどの余裕が無い自分を情けなく、責めていた面もありました。

そのような中、地域のためにと熱い思いで行動されている諸先輩方と触れ合うことで、他所者だから育児も含めて1人で頑張らなければならないという私の勝手な考えは単なる思い込みであることに気づきました。最後の最後でやっと講座参加日を恐れなくなったのですが、この貴重な場が終わってしまうのは悲しいです。今後も皆様とのご縁が続くことを切に願います。

「子育て孫育て」とても温かい講座をありがとうございました。

地域で15年以上、主に小・中学生相手に職業教育支援や、昔あそびの指導などのボランティア活動を行ってきました。その中で、子ども達を取り巻く環境が、近年ますます厳しくなっており、このままでよいのかと不安を抱いていました。

今回の学習で、子育てで孤立している状況や、それを何とかしようと頑張っている多くの人のお話を聞くことができました。例えば、子どもには「かかわってもらうこと」「自由に過ごすこと」の両方が必要で、デジタルネイティブの子育ては、オンライン社会に埋没せず「リアルな直接体験で体と脳を育てよう」「リアルな遊びは子どもが生きる世界を知るための扉」など、我が意を得たりの言葉もいただきました。

地域では、子どもに「多様な人達と関われる場と、安心な場所の提供」、困ってからつながるのではなく「日常でつながる」、「身近な所に子育て支援が必要」で、利用者は「仲間をうまく作れるか」他の人に「自分の子どもが受け入れられるか」等の不安があり、地域の人は無理しないで「やれるレベルで、やれる範囲で」行動する等の言葉が印象に残っています。

また、学んだことを実践する場として、子育て中の方に向けたイベント「地域に遊び場 ひらいてみました」の企画から開催まで、学習生が一丸となって体験する素敵な経験をさせていただきました。

これら学んだことをバネに、地域のつながりを作り、子供たちの成長に寄り添う活動をつづけるエネルギーをいただきました。

これも、講師や学習生の皆様、ご尽力いただいた企画委員、運営委員、職員の皆様のお陰です。本当にありがとうございました。

講座を受講して

H.S.

友達に誘って頂き、初めて企画委員から参加しました。今振り返ってみると、コロナ禍での出産、子供との時間は苦しくて、大変混乱していました。毎日があっという間で何に迷い、何に困っているのか？さえもわからなくなっていました。

講師の方に、「コロナの中で、よくここまで子育てがんばってきましたね。自分に拍手しましょう。」というお言葉を頂き、心が温かくなりました。世の中の変化に気持ちがなかなかついていけず、不安だったのだと思います。保育付きでしたので、講師の方々の話を落ち着いてじっくり聞くことが出来、皆様と意見を交わすことで自分の気持ちが少しまとまってきました。又、毎週同じ志を持つ仲間に出会えることがとてもうれしかったです。安心しました。

これからも親としての役割、心と体の整え方、子どもの向き合い方、デジタルとの付き合い方、人権についてなどを、人と温かくつながりながら、ワイワイ語り合いながら、学び続けたいです。

保育を利用させて頂きました。笑顔で楽しみに通う姿を見て、親子共々素適な時間を過ごすことが出来たことに感謝し、ゆっくりでもこの歩みを続けていきたいです。

講座の最後に、実践するところまで導いて頂くことで「地域に場をひらく」経験をさせていただきました。今後の活動に活かしていけたらと思っています。

講習会に参加させていただいて、特に印象に残っていることは「自己肯定感の重要性」と「子どもとの向き合い方」でした。

子どもとの向き合い方においては、まずは子どもの行動や気持ちを認めること、子どもの見本になること、押し付けや説得させたり叱るのではなくルールを説明するということを学び、その時の状況にもよりますが日々意識して子どもと向き合うようになりました。

教えていただいたことは、自分の引き出しが増えただけでなく、夫と共有することで、子育てについて話し合うきっかけとなったこともよかったです。

また、企画に向けて話し合いを重ね、みんなで一つの目標に向かうという経験は学生時代以来のことで、また経験できると思っていなかったので楽しかったです。

諸事情により最後は不参加となってしまいましたが、広報に掲載され地域の街づくりにつながる過程を経験できたことは貴重な時間でした。

一時保育利用にあたり、最初は泣いていた息子が、徐々に自ら先生のところに向かう姿を見て成長を感じることができ、この講習会での期間は今後の子育てにとっても有意義な時間であり、私と子どもにとって互いにいい経験となりました。

ありがとうございました。

講座を受講して感じたこと

『子育て、孫育て』を学習する、という事がどういう事なのか？と思いながら受講しました。毎週色々な分野の講師のお話を聞く事で、より多くの知識や情報を持って子育てができると、心に少し余裕が持てるような気がしました。

自分では気が付かない視点や、聞いて初めて知る事がたくさんありました。

受講の最終目標として、地域に場（イベント）を開く、という意味が最初はよくわかっておらず不安でしたが、日々受講生の皆さんと準備していく中で、これがすでに、地域で子育て孫育てしているという事なのかと思うようになり、松田先生の真意が伝わってきました。

イベント当日、実際に自分が他のお子さんに関わっている時に、自分の子を相手してる時とはまた違う自分があるのに気づき、同時に、色々な方が子どもと接している姿を見ながら、子どもは色々な人と関わって成長していくことが大事だと実感しました。地域で子育て孫育てとはそういうものなのかなと肌で感じる事ができました。

イベントや児童館、公園がたくさんあるのもいいけど、道端で声をかけてくれたり、微笑みかけてくれる人がいてくれるのが、本当に子育てしやすい町なんだろうなと思いました。

そして、少しだけ勇気を出して外に出たら、三鷹は案外、優しくてあったかい人が多いし、子育ての環境は悪くないなと感じる事もできるなとも思いました。

今回、この講座に思い切って参加してみて本当に良かったと思っています。

運営委員の方々とはとくに大変だったかと思いますが、こういう機会を企画運営してくださってありがとうございました。

教員生活を卒業し、子育て支援に関わりたいと考えていたときに見つけた市民大学の子育て講座。

まだワンオペなんていう言葉もないくらいにワンオペが当たり前だった1人目の子育て時に、同じ状況のママたちと公民館で育児サークルを立ち上げてみんなでつながり子育てしてみたら、子どもも親も楽しい毎日だった。そこに多世代をプラスした、ななめのつながりをたくさん作りたくて。

昨年から企画してくださった方たちの年間プログラムも見事で、メイン講師の松田さんに出会えて行動する勇気をわけていただいたことは本当にありがたかった。また多岐にわたる分野の先生方のお話は、どれも興味深く、大人になってからの学びの楽しさを実感できた。

毎週金曜日の午前中、通うのが楽しみになったのは、多世代のクラスメイトの存在も大きい。居てくれるだけでほっとする80代の元気な総監督、ご自分が積み重ねてこられた手作りおもちゃを惜しみなくシェアしてくださる方、市民活動ですでに色々活躍されつながりもある方たち、そして何より現役子育て世代。

自主学習で話し合ったり、発表準備をしたり、最後のイベント準備をしたり。

たくさんの気づきや勇気をもらえたとし、同じことに興味をもち、何かしてみたいと思っているメンバーと動くのは、何より楽しかった。

たくさんの調整や目に見えないサポートに尽力してくださった運営委員の皆様、生涯学習センターの担当者には、感謝の気持ちでいっぱいである。

講座は終わりだけど、ここからが始まり。地域に飛び出して、小さな居場所つくりの実現をクラスメイトたちともつながりながら形にできるといいなと思っている。

子育て、孫育て、そしてたまご育て

本コースで出会った「たまご育て」という言葉。たまごは「他孫」で他人の孫、つまり地域の子どもたちのことだ。地域には様々な形で子どもたちや子育て世代を見守り、サポートして下さっている方々が大勢いる。とかくワンオペになりやすい育児を一人で抱え込まなくて大丈夫だともっと多くの方に知っていただきたいと思う。

私自身、周りに助けを求めるのが下手だったが、助けてもらった。電車の中で娘が泣き止まず途方にくれていたらスーツ姿の男性がずっと近寄りあやしてくれた。駅のホームの階段で外国人の男性が「OKOK」と言いながらベビーカーを階段の上まで運んでくれたこともある。ちょっとした声掛けや手助けでも子育てに前向きになれる。「ベビーカー邪魔」と言い放つ人は相変わらずいるけれど、子育て中の方が変な遠慮をせずに過ごせたらよいな。個人の善意にとどまらず、子育てに前向きになれるサポート体制が望ましい。助けてもらったという思いがあるからこそ、次は助ける番という意識が生まれる。支援する側と支援される側の循環が続くこと。これは子育てに限ったことではなく、介護や障がい者等あらゆる分野の弱者に対して必要だ。

「地域で子育て」をテーマとした本コースは、子育て中の企画委員の発案で実現した。最後の講義は「地域に場をひらく」で一年間学んだことの実践の場となった。企画に関心を寄せて受講して下さった学習生は20代～80代まで。子育て・孫育て中、他孫育てをしてくださっている皆様と出会えたこと、次につながる新たな試みができたこと、前向きになれるパワーをもらったこと、そして、事務局の皆様、仙波さん、小暮さんの多大なるご尽力に感謝致します。春からの新たな生活でも「子育ての輪でつながる～！」

1年を振り返って

R.N.

今年のテーマは「子育ての輪でつながろう」でした。1年の講座の最後には「地域に場をひらこう」という実習が予定されていて、実は全然想像がつかない状態でしたが、前年度の講座が楽しく興味深いものだったので、その延長で受講の申し込みをしました。

軸となるテーマとそのほかにもさまざまな講義があり、今年も学びの多い1年でした。

軸となるテーマでは、最後の実習に向けて計画を立て、話し合いを重ねて実現をするという過程を学ぶことができました。このクラスの学習生はアイデア豊富な方が多くて積極的な意見交換が常にあり、本当に勉強になることばかりでした。三鷹市の広報誌などにも色々なイベントが掲載されていますが、このように思い入れを持って作られているのかと思うと、とても有難いなと思いました。また三鷹市には様々な団体があり、困ったときに頼れる場所が存在していることが分かって良かったです。

個人の「やりたい」や「必要」などがきっかけで場が生まれ人が集まり、そしてそれが誰かに役立つかもしれない、また自分にも何かできることがあるのかもしれない、と実感ができた1年間でした。今後もその視点を忘れず、何かに役立てる時が来れば良いと思います。

コースを終えて

N.H.

コロナ禍で子育てに閉塞感があり、地域で、もっと楽しく子育てをしたいと、企画から関わらせていただきました。本を読んだり、ネットを検索したりして、学びたい内容・講師を考え、依頼文を作成したり、子育てをしながらはとても大変でしたが、他の企画委員の方々や、担当の方のサポートにより、充実した半年となりました。

メイン講師の松田先生から、最終的に地域に場を開く実践をしてみようと思った時は、素人の私にできるだろうか少し不安に思いました。

しかし、松田先生や、他の講師の方々の講義を受けたり、自主学習の時間に学習生と話し合ううちに、だんだん不安は薄れていきました。

2学期の初めに、企画をプレゼンするという回がありました。発表した方々は皆さん経験を生かして上手にプレゼンされていて、とても圧倒されました。私はプレゼンは未経験だったのでとても緊張しましたが、勇気を出して発表してみました。あまり上手にはできませんでしたが、先生や学習生からアドバイスをいただけて、勇気を出してやってみて良かったなと思いました。

3学期になると、自主学習の時間に、実践へ向けての話し合いが何度も持たれ、素晴らしいアイデアがたくさん出て、どんどん良いものになっていきました。

実際に場を開いてみると、リアルに反応があり、どうしたらもっと楽しい場所になるかアイデアがたくさん浮かんできました。それを即実践し喜んでくれるのを見て、とても充実感を得られました。学習生それぞれ自分の得意分野を生かしてキラキラと活躍していました。

この1年半の経験を通して、地域の方々と力を合わせればいろいろなことができるのだと学びました。20代から80代までの学習生と共に学び、意見交換するのは、刺激になり、とても楽しかったです。これからもゆるやかにつながって、このコースでの学びを、共に活かしていけたら良いなと考えています。とても充実した時間を、ありがとうございました。

子育て・孫育てコースを受講して

A.H.

「子どもを育てる」という一つのテーマに基づいて、様々な講師の方にお話しいただき、学習生の仲間と学び合ってきました。

子育ては本当に大変です。自分の時間はなくなるし、感情は振り回されるし、計画的なんて言葉は存在するのかなと思うことばかりだし。

けれども、子育てにはこの大変さと比して余りある喜びがあります。

感情を共有したり、成長に驚かされたり、愛おしいと自然と湧き出る思いに癒されたり。

昨今、「子育て罰」という言葉をよく耳にします。子育て世帯に厳しい今の政治や社会で子育てをしていることが「罰」であるかのように感じることから生まれた言葉です。

これを聞いた若い世代の人たちは、当然子どもを生み育てていくことに前向きにはなれないでしょう。

子どもを育てる、子どもと一緒に育んでいく喜びに包まれた幸福感を多くの人と共有することが出来れば、社会は変わっていくのではないのでしょうか。

地域で子育ての大変さを分かち合うと共に喜びや楽しさを共有し、「子ども」という存在を尊重し、応援していきたい、そんなことを考えさせてくれる講座でした。

このような学びの機会をいただけたことに心から感謝いたします。

子育ての輪が出来ました！

H.Y.

一年間あっという間で最初は長いなあと少し思いましたが、もう一年学びたいです！毎回すごく勉強になる事ばかりで、生徒の皆さんが本当に優しくて善い人達で楽しかったです。息子も保育で良い刺激を貰えたみたいで、成長を感じています。一日中子どもと一緒にでしたが、市民大学に参加する事で、子育て以外の時間が持てて、学ぶ機会が持てました。一生忘れません。ありがとうございました。

ともに学び ともに考え ともに行動しよう

H.W.

「えっ！最後に実践2回！何それ？」これが日程表を見た時の正直な感想です。座学中心の学びの場と思っていたので、イベントを企画し実践するという講座の最終ゴールには、とても戸惑いました。

しかしながら「子育ての輪でつながろ～！～みんなで子育て・孫育て～」というテーマには、ワンオペ育児の負担感だけでなく、不安や悩みを話す相手がいない孤独感を軽減することも大切という意味も含まれているのではないかと考えました。

子育ての孤独を感じる時期は夫婦、家族、保育施設、地域の子育て支援施設、ママ友など「誰かとのつながり」が必要な時期でもあります。けれども、その一方でつながりを望みながらも、こぼれ落ちてしまっている場合もあります。だからこそ家庭の外から広く門を開く様々な取り組みが必要なのではないのでしょうか？

本コースの取り組みは「ともに学び ともに考え ともに行動しよう」という市民大学総合コースの理念を全30回で実践したといえるでしょう。

惜しむべきは、実践の振り返りができなかったことです。イベント当日の振り返りのみならず、準備期間、メイン講師の講義回数、日程配置なども含めた総括を行う必要性を強く感じます。

今回初めて市民大学講座に参加させていただき「今日行く所、今日用がある私」に近づきました。今後も「きょういく（教育）」と「きょうよう（教養）」を大切に健康で好奇心がある限り市民大学講座に参加したいです。ありがとうございました。

暮らしの中の哲学・文化芸術

講師：池田 喬
(明治大学文学部教授)



暮らしの中の哲学・文化芸術

講師 池田 喬

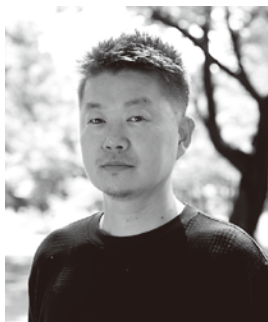
「暮らしの中の哲学・文化芸術」という今回のコース名を聞いた時、企画にあたった方々のセンスが光っていると思いました。このコース名には重要な含意があると思ったからです。「哲学」や「文化芸術」は暮らしの外部に、どこか、高尚な営みとしてあるというのではなく、朝起きて夜は寝床につくような暮らしの「中」にある、という含意です。

思えば、「哲学」とは人間が生きること（つまり、生活すること、暮らすこと）への省察であり、生活には「文化」が刻み込まれ、その生活において使い込まれた道具もまた「芸術」としての価値を持ちえます。「暮らしの中の哲学・文化芸術」を学ぶことは、自分自身の暮らし、生活、つまり生きることでもありましょう。単に生きるのではなく、生きながら生きるとは何かを考えてしまう。これこそ人間の人間たる所以でなくて何でしょうか。そうであれば、徹底して考えたいものです。

一年間のコースの中にはそういう思考の機会が何度もあったと思います。私の講義でも、ハイデガー、ボルノー、和辻のテキストを実際に読み、一体何を言っているのか、共に考えました。そして、毎日何気なく開けている玄関の扉や窓、あるいは天気についての簡単な挨拶にも、この世界に生きる人間存在の根源的な構造が隠されていることがわかりました。ともすれば、そういう思考の機会においては、かえってモヤモヤとして、わからないことが増えたということもあるでしょう。しかし、まさしく、日々の暮らしの中にはそういうまだまだ本当はわかっていないこと、不思議で探究に値することがたくさんあることが発見されたのなら、そして、今後も折に触れて考えたいような言葉や作品が心の中に残ったのなら、今回のコースでの学びは今後の暮らしに生きるに違いありません。発見したこと、心の中に残ったものを大切にして、一人一人がまた生きていく、暮らしていく。そして、考えたことを話し合うなら、また発見の喜びがある。このコースでの学びがそういう風が続いて行って欲しいと思います。

メイン講師紹介

池田 喬さん



明治大学文学部(哲学専攻)教授。1977年、東京都生まれ。東京大学文学部卒、同大大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。ハイデガー『存在と時間』の読解を出発点に、「知覚」「行為」「自己」などの観点から、現象学を中心とした現代哲学・倫理学を研究する。

[単著]

『ハイデガー 『存在と時間』を読み解く』NHK出版、2021年

『ハイデガー 存在と行為：『存在と時間』の解釈と展開』創文社(→講談社)、2011年

[共編著]

『映画で考える生命環境倫理学』勁草書房、2019年

『始まりのハイデガー』晃洋書房、2015年

『生きることに責任はあるのか：現象学的倫理学への試み』弘前大学出版会、2012年

[共著]

『差別の哲学入門(シリーズ・思考の道先案内1)』アルパカ、2021年

『フェミニスト現象学入門：経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版、2020年、ほか



池田 喬先生の講義



西 研先生 しあわせの哲学



池田 喬先生の講義



自主学习 国際基督教大学湯浅八郎記念館見学



中川賢一さん 演奏を哲学する



自主学习 講義の振り返り



鞍田 崇先生 いまなぜ民藝か



自主学习 哲学対話

●カリキュラム

回	日付	講義名	講師
	学習内容		
1	5月13日	開講式・オリエンテーション	自主学習
	学習生の自己紹介、運営委員の選出		
2	5月20日	「美的なもの」における情念(passion)と感情(sentiment)(1)	東京女子大学現代教養学部教授 馬場 朗さん
	キリスト教美術における「情念」アリストテレス デカルトの情念論		
3	5月27日	「美的なもの」における情念(passion)と感情(sentiment)(2)	馬場 朗さん
	美術史の地殻変動「後ろ向きの人物達」「感情の論学」美術の見方		
4	6月3日	演奏を哲学する	ピアニスト 中川賢一さん
	演奏を哲学する 生ピアノの音とすてきな学習		
5	6月10日	講義の振り返りと今後の講義の進め方に関して議論	自主学習
6	6月17日	いまなぜ民藝かーいとおしさをデザインする	明治大学理工学部准教授 鞍田 崇さん
	民芸とは何かそのイメージは 単なる民芸から意味のある民芸へ		
7	6月24日	暮らしの中の言葉を哲学する	東京大学大学院(倫理学)准教授 古田徹也さん
	暮らしの内に流れる言葉がもつ多様性一言葉とは多面性を示す哲学		
8	7月1日	国際基督教大学湯浅八郎記念館見学	自主学習
	こんなに近くに素晴らしい場所があった 興味深い見学ができました		
9	7月8日	意見交換(9月からの講義にむけて)	自主学習
	哲学の変遷と哲学書の紹介令和3年度市民大学講義より(発表:渡邊伸廣さん)		
10	7月15日	中世文学に学ぶ生き方	成蹊大学名誉教授 浅見和彦さん
	吉田兼好法師の「徒然草」を題材として人の趣き深き無常感 この一瞬の大切さ		
11	9月16日	ハイデガー・ボルノー・和辻 ——暮らしの哲学への序説	明治大学文学部教授 池田 喬さん
	哲学と人間が生きることー生活することー暮らす事への考察でありあらゆる道具も価値を生む		
12	9月30日	ハイデガー=住むことの存在論(1)「道具」から見る世界	池田 喬さん
	受講生に輪読させ疑問注目点を指摘させ討議説明意見交換 面白し		
13	10月7日	ハイデガー=住むことの存在論(2)「手」から考える人間	池田 喬さん
	ハイデガーの難しい言葉や世界の見方を学ぶ ハイデガーの空間論		
14	10月14日	【公開講座(金曜日)】ロシアのウクライナ侵攻と日本の安全保障政策	防衛ジャーナリスト 半田 滋さん
	10月15日	【公開講座(土曜日)】パレスチナで働いて思うことー基本的人権と尊厳と平和について考えるー	
15	10月21日	本居宣長の『古事記伝』について	東海大学名誉教授 田尻祐一郎さん
	日本人としての思想 口承で伝えられることを大事にする文化 日本の言葉が伝えられてきたもの		

回	日付	講義名	講師
		学習内容	
16	10月28日	しあわせの哲学	東京医科大学医学科人文科学領域・ 哲学教室 教授 西 研さん
	どうしたらしあわせ幸福になれるか 人とはどんな存在なのか		
17	11月4日	芸術論「音楽は何のために」	慶応義塾大学法学部教授 片山杜秀さん
	音楽の役割について 喋りだけでなく人間の感情を支配するものと知った		
18	11月11日	100分de名著よりハイデガー前半／哲学対話とは？	自主学習
	NHKEテレの録画を見て考える		
19	11月18日	100分de名著よりハイデガー後半／哲学対話の問い決め	自主学習
	NHKEテレの録画を見て考える 哲学対話に向けて話し合い		
20	11月25日	哲学対話の実践「問い：老化とは何か？」	自主学習
	「問い」「ディスカッション」「問いの追加」何か方向付けを求めたが今一つだった		
21	12月9日	文化の融合としてのJAZZの誕生(発表：渡邊伸廣さん)	自主学習
	ジャズの変遷		
22	1月13日	ボルノー＝暮らしの空間論(1)戸と窓とは何だろうか	池田 喬さん
	戸と窓 外内の結合節であり 住まいの独立性を獲得している		
23	1月20日	ボルノー＝暮らしの空間論(2)寝床とは何だろうか	池田 喬さん
	家屋の中心寝台寝床から中心が 竈と食卓へ移る 一日の周行も人生の周行も完結する		
24	1月27日	自主学習	自主学習
	ここまでの講義の振り返り		
25	2月3日	知って、見て、楽しむ浮世絵	十文字学園女子大学教育人文学部教授 樋口一貴さん
	浮世絵の歴史と変遷 美人画の人にお会いしたいものです		
26	2月10日	恋愛とは何か？—落語「崇徳院」における恋愛の本質	中央大学文学部教授 中村 昇さん
	恋愛の必要性とは		
27	2月17日	バッハからイザイへ	ヴァイオリニスト 戸田弥生さん
	戸田弥生さんのバイオリン演奏は素晴らしい		
28	2月24日	和辻哲郎の風土論(1)寒さとは何だろうか	池田 喬さん
	寒さの現象とは我々は寒さを感じることに於いて寒気を見出す		
29	3月3日	和辻哲郎の風土論(2)風土と人間	池田 喬さん
	寒気とは寒さの中に出ていること		
30	3月10日	ハイデガー・ボルノー・和辻 ——暮らしの哲学をどう活かすか	池田 喬さん
	全員が各自感じたところを発表 先生と意見交換		

コロナ禍で各種ボランティア活動が制限されて時間を持て余していたところ、友人のTさんからこの講座を知らされて申し込んだところ運よく抽選に当たることができて本当にラッキーでした。

バラエティーに富んだ講義内容で毎回新鮮な気持ちで講義に臨めて有意義な時間を過ごせました。内容が全く理解不能！で悲しくなった回もありましたが、メイン講師の池田先生がおっしゃった「日常で考えないようなこと、分からないことを真剣に考える経験は大切だし、有意義だと思う。」という言葉は心に響きました。当たり前の毎日に難しく理解に苦しむ宿題は辛いものでしたが、一時学生時代に戻っての音読は家事を忘れられました。

また自主学習での話し合いは意見を言う、聞くことの大変良い練習になりました。

人はそれぞれに様々な指向を持って生まれ、それぞれ違う価値観を持っています。その違いを尊重しながら、自分の存在を認めてもらい、相手の存在も認める。こうした基本的な価値観を受け入れていくことで初めて、私たちの社会は多様性のある豊かなものになっていくのではないのでしょうか。対話を通してお互いへの理解を深め、より良い社会を作れたらと思います。そのためにはこのような講座が続くことを願っています。

一年を振り返って～『存在と時間』の登山口に到着～

コロナ禍より通い始めた市民大学も、今期で3年目を迎えた。

昨年の西洋哲学史の講座を受けて、その集大成となるハイデガーを集中的に学ぶ目的だった。結果、一年間を楽しく学び通すことができた。

とにかく難解であるハイデガーに臨むにあたって、メイン講師の池田先生のわかりやすく、受講生との対話を大切にしてくれたことは、大きな足掛かりとなったように思う。生徒の立場から言うと、哲学という学問を上方に眺めるといふ従来のスタンスから、池田先生が私たちの生活の中に降りてきて、言葉をつないでくれた。「暮らしの中の哲学・文化芸術」のテーマを講義方法の実践の中で、体現していただいたことに感謝する。

とにかく人気のあるハイデガーの『存在と時間』も、三年後の2026年に出版100周年を迎えるという。カリキュラムの中で、ハイデガーと共に、ボルノー、和辻哲郎を横展開したことも、逆にハイデガーの深さを理解する一助となった。ボルノーに至っては、始めて聞いた名前だったし、和辻の『風土』も国語の教科書で学んだ程度だったが、ハイデガーと同時代にドイツへ留学し、同い年のライバル心からハイデガー「空間性」の欠如を指摘する野心的な著作内容も、リアリティを持って読むことができた。

市民大学にとっては、自主学習は独自の取り組みとなるが、講座参加メンバーとの話し合いの中で、今期は過去の年と比べて、クオリティの高さが強く感じられた。講座は終わるが、個人的には『存在と時間』の入り口に立つことができた、という感慨である。

講師の先生、事務局、企画、運営、そして机を並べた同窓の皆様へ感謝します。晴れた日の教室の窓からの富士山と高層ビルの一帯が印象的でした。

私は今まで哲学について学んだ事が無い。とても難しい分野だと勝手に思い、哲学書にも触れてこなかった。

今回このコースを受講するにあたって、「しあわせの哲学」「ハイデガー『存在と時間』を解き明かす」これらの著書を購入して、自分なりのペースで読んでみた。しかしながら読みきってはいない。今後も継続して読んでいきたい。

暮らしの中の哲学って何だろうか？そして文化芸術にはどのような哲学的 element があるのか、ととても興味が湧き、このコースを選択した。一年間を総括するには勉強不足ですが、様々な事柄に触れるにつけ、合点する事も多々あり、けして裏切られる事は無かった。しかし難解であった事は否めない。

趣味の世界遺産を巡る旅の中で、多くの宗教画や近代美術まで目にして来た。その中で、気になった絵画が何点かあったが、深くは追求しなかった。「美的なものにおける情念と感情」の講座で明らかになった。特にヨーロッパの美術館で観た多くの絵画を思い出しながら、絵の中にある深い情念や愛憎を絵から読み取る事が出来たらと思う。今後再び同じ絵画に触れた時、以前とは違った観かたが出来るだろうか。

演奏を哲学するでは、ピアニストの中川賢一さん、ヴァイオリニストの戸田弥生さん、ジャズの渡邊伸廣さん、それぞれの演奏が素晴らしく、心にしみる最適な時を過ごさせていただきました。

今回のコースを受講して本当に良かった。たくさんの感銘をうけました。企画委員の皆様、運営委員の方々、担当職員の方、講師の先生方、一年間長いと思っていたのですが、それを感じさせない程楽しく学べた事に、感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

難しいから楽しい

「先生、哲学って何故こんな難しい言葉使うんですか？」

休憩時間にそんな声が聞こえて来た。受講生の一人の質問、衝撃的に良い質問だった。

今まで解ったふりしてたけど、本当はそれが聞きたかった。でも聞けなかった。

「世界が複雑なので言葉も複雑になる。自分が解っている言葉だけで理解しようとする、正しい理解にはならない。受け止める側（自分）が変わらないといけない」

池田喬先生の回答を、私なりに受け取るとそんな答えになった。

「簡単」「解りやすい」が正義で、「難しい」「難解」が肩身の狭い思いをする昨今の風潮を否定するようなその言葉は、新鮮で痛快だった。自分自身も難しい言葉に、しっかり向き合いたいと思った。

そして「読書百遍」というが、難解なハイデガーの「存在と時間」の中の一文も、繰り返し繰り返し読むうちに、急に理解できたという体験をした。その言葉が難しければ難しいほど、理解出来た時の快感も格別であることを知った。

「学びなおし」と思っていたが、「学び始め」の有意義な一年となった。池田喬先生を始め、様々な発見の機会を与えてくれた講師の先生方、この教室の準備をしてくれた生涯学習センターのスタッフの皆さま、運営委員の皆さまに心から感謝いたします。

初めての市民大学。暇つぶしの一年と思っていましたが、充実の一年でした。

本当にありがとうございました。

今回の講座を受講するにあたり、まず頭に浮かんだのは、「哲学って何？」という疑問でした。それ程哲学超初心者の私が何故この講座に応募したかという、タイトルの中に「芸術」という2文字があったから。正直「哲学」は二の次くらいに思っていたのですが、蓋を開けるとまさに「哲学の嵐」。1年間みっちり学ばせていただきました。

教室を見渡すと、右も左もあたまの良さそうな方ばかり（実際、皆さん知性に溢れていました）。完全に場違いだと恐縮しつつ始まった講座でしたが、結果、受講して本当に良かったと感じています。哲学書を読み解く講義では、講師の先生や他の受講者の方が懇切丁寧に教えてくださり、自主学習の哲学対話では、年齢も性別も様々な人たちの思考や価値観に触れることができました。元より興味があった芸術についても、プロのピアニストやヴァイオリニストの演奏を間近で体感し、考えをうかがうことができ、とても有意義で贅沢な時間を過ごすことができました。

哲学者の名前なんて誰一人知らなかった私ですが、「ハイデガーって知っている？」と聞かれば「世界内存在の人！」と答えられるし、「和辻哲郎は？」と聞かれば「ハイデガーの時間よりももっと空間にフォーカスあてた人だよね！」くらいには答えられるようになりました。多くの先生が根気強く説明して下さったにもかかわらず、深掘りされたら困ってしまうレベルではありますが、「難解すぎてよくわからないけれど、わからないことが面白い」と思えるのは、今回哲学を学んだ成果の1つだと確信しています。自分の大好きな「芸術」を哲学する楽しみも増えました。貴重な機会をいただきありがとうございます。

受講を終えて

「暮らしの中の哲学・文化芸術」のタイトルを見て、生涯最も遠ざけて来た「哲学」と最も身近かで興味を持ち続けた「文化・芸術」が併列するタイトルと、その「暮らしの中の」存在について強い興味を持ち、受講することになりました。現在ほぼ一年の受講を終え、JAZZを始め「音楽」「民芸」「文学」等々を通じての生活の中の芸術文化の見方・考え方については、ある程度の実感としての理解も進んだと思われま。一方それら文化芸術とは別の観点からの「ハイデガー・ボルノー・和辻」の「暮らしの哲学」の理解は、現在までの実生活上の物の見方・考え方として、かなり距離を感じ、理解の難しさを感じています。但唯一和辻哲郎の「風土論」に関しては、学生時代、欧州50日間の旅をし、気候・文化人種・芸術・生活等あらゆる違いを感じた後読んだ印象と今回の講義を受けた際の「風土」に対する違いは大きかった様に思われます。但この本の存在が自らの生涯に大きな影響を与えたものであることに違いはなく、今後改めて読み返したいと感じています。更に今後生きていく中での課題として「存在と時間」について、心理的な面からの自らの心持ちの有り方、周囲の環境、世間の目、今後の生き方等々客観的に考え、それを現在の生活の中で、どのように考え対処しているのか、今後どうすれば良いのかを考えて行きたいと思ひます。但それを考える際、自分のほぼ満足している現状とどのような違いが生まれて来るのか、もし自らの考え方生き方が違うのかもかもしれないとなった時の不安は、どのように解決するのかの課題は残るようです。更なる学習の必要性を感じた次第です。

＜暮らしの中の哲学・文化芸術＞というタイトル通り、分野がより広いために哲学に絞って考えると哲学そのものをもう少し学びたかった感が残るものの、哲学を下敷きにした文化芸術も学べて、このコースの学びは豊かなものとなりました。

メイン講師の池田喬先生は「暮らしの中で生かせる哲学」を頭においてハイデッカー、ボルノー、和辻についての講義をゼミ形式をとりながら、丁寧に、そして易しく解説して下さり、哲学の難解な字句や内容に恐れを抱いていた私でも、彼ら哲学者が何を言わんとしているかを部分的とはいえ大分掴むことができたのではないかと思います。(わからない)という決めつけの自己閉鎖から、(わからないのでは?)という不安を抱えたままに哲学の森や哲学的思考へ踏み出したことは、ともあれ大きな喜びとなっています。

自主学習の、ハイデッカーのDVDもわかりやすく理解への助けになり、初めての哲学対話では自らの振り返りや他者を知るよい体験でした。

一方、ヴァイオリンの演奏では高度なテクニックに驚きながら、単に名器、素晴らしい演奏者としてみるだけでなく、ハイデッカーの道具や手について学んでいたことで哲学的にも考えることができたようです。

こうした機会を下さった講師や企画・運営委員の方々、事務局のSさん、そして共に学んだ受講生の皆様、特に講義を下さったYさんにここから感謝申し上げます。

「生きながら生きるとは何か」を自分なりに考えてきたつもりですが、未だ不透明です。正解はないのかもしれませんが、「人間は一生成長する」という恩師の言葉も胸に刻みながら、今後も「学び」を、そして「生きることとは何か」を考えていきたいと思えます。

市民大学にお世話になり、10年強が経ちました。

サラリーマン生活から退職して以来、すばらしい終活の時間を過ごさせてもらいました。

三鷹市の三鷹市民による三鷹市民の為の生涯教育を方向付けされた先達に御礼を申し上げるとともに、この市民大学も今年で55年の歴史を刻み、三鷹市のすばらしい教育の伝統を誇りに思っている処でございます。

これ迄、近現代史・政治経済・哲学・文化芸術を勉強させて頂きました。この間多くの市民仲間との出会い、話し合い、意見交換をしながら、無知の知を追い求めるなど誠に楽しい時間でした。また、今年度も哲学・文化芸術コースを楽しく進めていただいた運営委員ならびに職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

問いを立て、当たり前のことをよく考える

古 林 紀 彦

毎週金曜日の10時から12時は一週間のうちで一番楽しみな、「不知の自覚」を認識できるとても豊かな時間でした。受講した講座の中から印象深かった回のメモを見直しました。

Q：人の特徴とは何か？（西先生）

チンパンジーには「今、ここ」しかない。一方、人には過去・現在・未来がある、「時を生きる動物」。人は人生が有限であることを知っているし死んだ後のことも考える。時を生きてたえず自分の方向を探して、人は不安になるのだ。

A：人は未来を認識する動物であり、不安はつきもの

Q：人は不安を無くせるのか？（自主学习にて：100分 de 名著ハイデガー：戸谷先生）

自分が「世界内存在」であり、この世に生きていることが不安の源泉。何も確かなものがない苦しみ、確かなものにすがりたい気持ち。やすらぎの反対とは「世人の中に取り込まれること」。であれば、不安の中に留まることができればそれがやすらぎ。

A：不安の中に安らぎを感じることができる

Q：良い生き方とは？（浅見先生）

「世は定めなきこそいみじけれ」（吉田兼好）恥を忘れて生き延びてやろうというのは「もののあはれ」がわからない。みな無常を嫌がるけど、常往だったらどうなるか…無常だからこそ、想いが出てくる。無常なことが大事。

A：無常であることで味わいがあるのだ

Q：「いとおしさ」とは何か？（鞍田先生）

愛し（いとおし）は労し（いとおし）。生きることの辛さ、悲しさを「いとおし」といい、共感、同情。「労」は「いたわる」であり、不完全な生活をしているのは私だけではない。生きることの辛さ、不完全な私。弱さ、小ささ、儂さ、限りあるものへの共感。

A：自分自身のことを受容すること

哲学、ってなに？

武 田 紀 代 美

ツイッターをのぞいていたら、「市民大学受講生募集」という、三鷹生涯学習センターのツイートを見つけました。

哲学コース、哲学って、何？

カリキュラムを見ると、音楽、絵画などの講座もあり、参加してみようかと応募しましたら無事当選できました。

西洋画の鑑賞の仕方、ピアノやバイオリン演奏、古典文学、校外学習の博物館見学まで幅広い講座で、メイン講師の哲学とうまく混ざり合って、違和感なく、哲学、を学習できました。

受講者の方々は、何年も参加している方から初めての方まで、皆さん和気藹々と、とても良い雰囲気でした。

運営企画担当の方々が熱心に、事務局の担当者もテキパキと、講座を進めて頂きました。

大変有意義な一年を過ごさせて頂いた事、お礼申し上げます。

「暮らしの中の哲学・文化芸術」が今年のテーマ。

カリキュラムには、絵画や文学、音楽・落語など「文化芸術」が並んでいる。

なるほど、今回は「哲学コース」と言っても、実情は「文化芸術」にかなりの比重があるのだろう。そんな風に思った。

ところで哲学と文化芸術とを一緒に語れるものだろうか？

もちろん、絵画や文学、あらゆる創作には作り手の意図があり、表現者の思いがあり、鑑賞する側にもそれなりの考え方というのものが、その背景には国や地域によって異なる思想があるのだろう。

それらを「文化評論」として読むのは面白いと思うのだが、「哲学」とは異なる気がする。

「哲学」と言うからには、もっとこう、「世界の真理」や「生の意味」、「正しさ」の根拠だの、何か深淵なもの・超越的なものに迫る営みでなければならないのでは？

誰に教えられたわけでもないが、漠然とそのようなイメージ（ステレオタイプ）で哲学を捉えていたのだ。しかし、それは完全に私の勘違いだった。

ありふれた日常の中にも、確かに「哲学」はある。

いや、むしろ「人間とはなにか」「我々はどんな存在なのか」をしっかりと考察しようとするのなら、日常こそを出発点とすべきかも知れない。

メイン講師の池田先生がとりあげたのはハイデガー、ボルノー、和辻。

単に関連する哲学者を並べましたと言うのではなく、お互いの哲学の影響や違いを感じることで、初心者ながらに大いに学びがあった。先生に感謝したい。

もう一つ触れておくべきことがある。

ロシアによる軍事侵攻が始まってから約1年が過ぎた。2023年3月の現在も終わりは全く見えない。日常と哲学の関係について私が学んでいたこの一年、ウクライナでは多くの人々の日常が奪われていた。そのことを思うと辛いし、自分がのうのうと生きていて、無料で勉強までさせてもらっていることに罪悪感さえ覚える。

21世紀も人類は戦争を続けるのか？なぜ暴力に依らず対話で解決できないのか？そもそも皆が受け入れられる「正しさ」など無いのか？だとしたら、世界平和など所詮は絵に書いた餅か？

つつい超絶的な問いに思いを馳せてしまうが、答えは遥かに遠く、むしろ考えるほどに遠ざかってしまう。

ただ一つ確かなことは、今、私には「日常」があるということだ。

そして、そこから何かを考えることができるということ。なんと有難いことだろう。

私などがどう考えたところで、大した哲学的洞察には辿り着けないだろう。だが、それでも学ぶことはできる。ありふれた日常の有り難さを噛みしめながら。

生涯学習センターの職員、講座の企画委員、講師の先生方、この講座の実現を支えてくれた全ての人に感謝したい。そして、この日本に、これからも平和な日常がありますように。

文化芸術には興味があり、コース名に惹かれ今回初めて市民大学を受講しました。

西洋美術のキリスト教による情念から始まり、目に見えないその場に起こることのすべてを楽しむ音楽、「音楽は何のために」を考えて演奏を聴きました。また民具の中に「用の美」を見出す「民芸」に触れ、暮らしの中の言葉に日本語の変遷を思い返し、本居宣長の「古事記伝」の大和言葉にこの国の魂を探しました。

最後の「落語『崇徳院』における恋愛の本質」中村先生の話にはこの講座での意義をみた気がしました。子供の頃は私のいる意味が分からない、世界の存在の意味が分からない。大人は笑って生きている、何か知っているのではないか、いつかわかる時が来ると思っていたが、どこまで行ってもわからない、世界の不可解さを笑うしかない。それが落語の話となり恋煩いから恋愛を哲学する深い考察となりました。そして言葉によって世界を認識している、言葉の違いによって違うものを見ている等々、言葉の力という新たな興味も生まれました。

そして「ハイデガー・ボルノー・和辻の暮らしの哲学」へ引き継がれますが、暮らしという事で、難解な言葉や文章も具体性を持って受け止められたように思います。哲学とは「人間が生きること（生活すること、暮らすこと）への省察」とされた池田先生の、「生きながら生きるとは何かを考える」という言葉が強く心に残ります。

考えるという事は同時にいかに話すかとのことにも繋がり、哲学対話や発表においての実践でもありました。またコロナ禍において遠のいていた対面で皆様と直に言葉を交わすことの有難さ、心に響く時間を持ってましたことに感謝いたします。

オムニバスセレクトにて

コース名は大したものなのでこれだけで疲れがでた。

これらの言葉を理解しての前提ならそそくさと退散しようと思っていた。初日に開講式があり、偉そうな人の挨拶ありで、まるで学校の入学式！辟易した。三十回の講座は一回のみ二回、八回継続とあり自主学习十回ICU大学博物館見学など。テーマの哲学文化芸術他はすべて関係しながら成立しているということである。講座の中で個人的興味として音楽、美術、落語があった。中川賢一氏のピアノ演奏と理論、ヴァイオリニストの戸田弥生氏。特に戸田弥生の演奏。ヴァイオリンを手に取り弾き始めた途端音が戸田弥生になり言葉を越えて響き渡り始めました。心を動かされました。これが現在社会、頭で考えた人工社会に必要なものであると思った。人間の意識、観念だけの都市は自然を排除して世界中に増殖します。このようなシナリオ的社会、計算された社会、理屈通りに行くと知っている人間の思い上がりの社会には芸術美術が必要なのです。ある意味不条理な世界が人間に癒しを与えているのは確かでしょう。愛とは何か？

落語「崇徳院」における恋愛の本質は中村昇氏の分析もさる事ながら中村教授の人間味に引かれました。不断を出す人と出さない人がいますが先生は前者でした。その中から考えていること苦しんでいることが窺^{うかが}えて本の解釈分析より今回のテーマに近さを感じました。

このコースでも少し教授、学習者との話し合があればと思いました。授業は生徒が作るものですから。今日の世界問題日本の諸問題等ジャンルにとらわれず関連づけて話し合えればと思います。個人がひとつの点であっても。

市民大学との出会い

K.T.

2年前の市報で、市民大学企画委員募集を目にした。「面白そう」と簡単な気持ちで応募したものの、哲学・文化芸術に詳しい訳ではない私は、委員会に参加してみて大慌て。今更知識がある振りも出来ず、それならいっそのこと特別な知識を持っていない人でも楽しめる講座内容にしたいと、自分なりの案を練っていった。

企画経験者を中心に、次々と講座内容を決めていく様はとても面白く、久し振りに知的な刺激を受けた。

いよいよ5月から開講、毎週わくわくしながら講座に臨む。招いた講師の方々は皆それぞれ熱のこもった講義をしてくださり、贅沢な時間を過ごすことが出来た。講義だけでなく、美術館見学、音楽鑑賞、映像、ディスカッションといろいろな手法で見聞を広める機会に恵まれた。

企画から受講終了までの足掛け2年間、期待以上に充実した日々だった。

ここに改めて受講を支えてくださった方々に御礼申し上げます。

講義を終えて

S.M.

まず運営委員の皆様が前半にピアニストそして後半にヴァイオリニストの方の演奏を入れて頂きコース名通り文化芸術の香り高い講座でありました。

自主学习で、国際基督教大学湯浅八郎記念館見学も、非常に印象深くトラ年のトラの置物、東海道木曾路新版振分道中雙六など珍しい品々を見学できました。

メイン講師の池田喬先生は、一方的な授業でなく、私達と双方向性のある中味の濃い時間を過させて頂きました。哲学は、半世紀以上前習ったもの、すっかり忘却の彼方にあり、久しぶり休んでいた頭脳が覚醒しました。

学びの成果を地域や生活の場に生かすことが「総合コース」の主旨ですが、日々の行動の中で少しでも友人知人に何らかの事が伝えられ、ば幸いです。最後に事務局の皆様にお世話になりありがとうございました。

講座を受講して

H.M.

子供が小学校高学年になり、自分の時間が増え、人生や歳をとることについて考え直したくて哲学・文化芸術コースを受講しました。

はじめは、普段の生活では使わない哲学用語が出てくる講義に圧倒されました。

しかし、受講生の方々と勉強し合う中で、わからないことや普段当たり前に使っている言葉について考える楽しさが芽生えてきました。

メイン講師の池田喬先生の講義では、ハイデガーの空間論に関わる文章を輪読していくという、これまでの日常生活で無縁だったことを経験できました。自分の番が回ってくる緊張の中で、予習ではわからなかった文章が、他の方の感想や先生の解説で少しわかるようになり、違う見方をできるようになる充実感を味わうことができました。

また、老いをテーマにした哲学対話では、自分より年上の方々と年齢を重ねることについて話すことができ、歳をとることについてポジティブなイメージを持つことができました。家族や日々の生活から離れた所で、これからの人生を俯瞰して考えることができたことは、とても貴重な時間でした。

部屋で一人本を読み考える時間と、外に出て他の方と話し合う時間、その両方が大切だと改めて感じました。充実した時間を過ごすことができたことを、受講生のみなさん、企画運営委員の方々、担当職員の方にとっても感謝しています。

1. 今年の哲学クラスは、各講義が甲乙つけがたい素晴らしい内容で全体としてまとまりがあった点が特筆されると思います。講師の先生方が「暮らしの中の哲学、芸術文化」というテーマをよく咀嚼して講義を準備されたことが勝因の一つだと思います、その意味でこのテーマを提案されたT企画委員の眼力には敬意を表したいと思います。テーマが講師先生の講義内容に大きく影響するという事は発見でした。
2. 個々の講義での感想は以下の通りです。
 - ① メイン講師の池田喬先生は、まさに暮らしの哲学を前面に押し出した中身のある講義でした。ハイデッガーを単に抽象的に議論するだけでなく、より人間の知覚や行動にそって展開していくところに説得力がありました。また、ハイデッガーの影響を受けたボルノーの空間論、和辻哲郎の風土論は魅力がありハイデッガー哲学の素晴らしい副産物だと思いました。ハイデッガーについてはまだまだ奥が深く研究の余地があるので自主学習グループで勉強していきたいと考えています。
 - ② 哲学の分野では古田徹也の「くらしの中の言葉を哲学する」という講義が印象的でした。先生の議論は「言葉の魂の哲学」という本でも感じましたが、日常言語の背景の社会文化についての深くかつ分かりやすい分析がスリリングだと思います。
 - ③ 芸術文化については、樋口一貴先生の浮世絵の講義が印象的でした。浮世絵という素晴らしい文化を生んだ江戸時代の経済力、文化力はかなりの水準だったと改めて感動しました。フランスをはじめ海外から高い評価を受けている浮世絵をうんだ江戸時代はある意味で日本の歴史の中でもピークであったといえます。江戸時代をたんに近代化により否定された時代として片づけるのではなく、再評価が必要だと思いました。

市民大学に参加して

コロナ禍に引越しをして三鷹市の住民になり、今はこの講座を受講する事で、この地に居場所を見つける事が出来たと思っています。

毎回講師の先生や学習生の皆様のお話を理解するのは刺激的な体験であり、よろこびでした。しかし哲学対話などで人前で発言した後は後悔と反省に深く見舞われました。

哲学で大切な「本質の共通理解」に辿り着くには到底及ばず、相手の意見を尊重しつつ聞く事、物事の本質を考え、自分の言葉で話すことはとても難しい事でした。

公開講座の後で、世代の違う人と戦争と防衛問題について、ここ三鷹市では自由に発言出来るすばらしさを話せた時は冷戦時代の東のようだった地方から西側にやっと辿り着いたような気持ちになり感謝の気持ちになりました。

残念なことに後半入院し、身体的苦痛の前では哲学は無力とと思いました。しかしこのような状況でも哲学することは出来るのではないか、そしてそれが自分を見失わないことに繋がる、その為にも学びが必要だと思いました。

このような有意義な時間を与えて頂きました事に感謝いたします。

哲学と文化芸術を組み合わせた「暮らしの中の哲学・文化芸術」ではピアノ・ヴァイオリンの演奏会から西洋の宗教絵画の観方、浮世絵の捕え方『古事記伝』についての文学の世界、落語における恋愛論など多面的な文化芸術に幅広く触れる機会となり、毎回の学習がとても楽しみでした。基督大の湯浅八郎記念館へ行き『器』についてや松浦武四郎氏の一畳敷の書斎という印象的なものも見学することができとても良かったです。その後当館で特別展示された『バンクス植物図譜』も行きました。無料でゆったり観覧できるこの小さな博物館のファンになりました。メイン講師の池田先生の学習は事前に配布される資料を予習するのですが、一般的に使われていない漢字やいいまわしを理解しようと国語辞書や漢和辞典を引きながら努力しますが、なかなか頭に入ってきませんでした。『難しいからいいのです。そこで考えることが大切です』と先生は言われますが…哲学書独特の文章に慣れず苦労しました。ハイデガーの『住むことの存在論』ボルノアの『暮らしの空間論』そして和辻哲郎氏の『風土と人間』という3本柱による学習から日常生活の中に哲学が息づいていることがわかりました。また、文化芸術すべての中に哲学があることも知りました。

感動して涙したり笑ったり心に強く感じるものこそ哲学でそれは単に外に出たら「寒い」と感じることにあつと学びました。日常生活の中で哲学的に物事をとらえるのは難しい事ではなくて『哲学対話』でも体験したように楽しいことであり、人生を豊かなものにすると思います。

哲学講座を受講して

A.W.

私が尊敬する日本語教育学の金田一秀穂先生の最終講義を拝聴したことが哲学講座を受講する契機となりました。「人工知能や自動翻訳機とインターネット技術の発展と普及によってこれからは言語の壁を超えて世界の人々とコミュニケーションをとる機会が増え、それが求められるようになる。何の言語を用いて発信するのか、よりもその内容がより問われる時代になっていく。」とあり、外国語習得のための時間と労力は哲学を学ぶことに換えようと思いました。

講座の内容は毎日の暮らしの中にある身近すぎて意識せずを使う道具のことや生活を彩る美しいものたちをテーマにして、毎回魅力的な講師の方々のお話しはとても面白く興味深かったです。私の知ることのできなかった世界の新しい扉がいくつも開いてはまた奥に扉があることを知り、2時間はあつという間に過ぎたが、まだまだ新しい扉があるだろうことが想像できました。

この場を借りて運営委員、職員の皆様方のご貢献に感謝いたします。

暮らしの中での世界の感じ方への変化

渡 邊 伸 廣

哲学コースは4年目になりますが、今年は難解なハイデガーについて学び、益々迷走の感ありです。一方で自主学習グループを立ち上げ、ハイデガーの読書会でうんうん言いながら仲間と共に助け合いながら継続できた事は私の財産になりました。そのせいか、暮らしの中で「自分」や「世界」についての感じ方や捉え方が幾ばくか変化したような気がします。

もう一つの成果は、自主学習で実施した「哲学対話」です。これも別の自主グループで毎月実施をしていますが、素直に相手の言いたい事を理解しようとする（同意する事ではない）姿勢と、素直に自分の思う事や相手に対しての質問が安心・安全の空間の中でできると言う雰囲気を作りだせたのは大きな事でした。こんなコミュニケーションがもっと昔からできていたら自分の人生は違っていただろうなと言うのが実感です。

また、今年のコースで良かった事は、「哲学+文化芸術」だった事です。色々な方と知り合う事とお話をする事ができました。また、講師陣も美術・音楽・民芸・言葉・中世文学等々と幅広く、例えば暮らしの中の雑器としての民芸がハイデガー的な道具としての有意味性ネットワークにつながる点を考えながら鑑賞でき、あらたな共通領域の味わいの視点に開眼できました。来年は「宗教」との共通領域へと発展し、益々面白くなりそうです。

最後になりますが、難しいハイデガーをかみ砕いてお教え下さった池田喬先生と、我々受講生や運営委員の要望をご理解され最大限のサポートをして下さった事務局の方にも大いなる感謝を申し上げます。

学びの幸せ

吉 田 和 子

2年連続で落選の知らせを受け、すっかりフテクサれていた私に斉藤さんから敗者復活のお電話をもらったのが8月中旬でした。前半も楽しそうだったので羨ましい気持ちを引きずりつつ、夏休み明けからイソイソと参加させていただきました。

今回は哲学・文化芸術コースという事で、以前とは少々雰囲気が柔らかくなった気がしました。

早速メイン講師の池田先生、読んで感想・疑問などを述べるという方式は、学生時代に戻ったような気分でした。

その後の土曜日公開講座はパレスチナで仕事をしている坂元氏。携帯を通してのライブで現地の様子を聞けたり、正統派ユダヤ教徒の生活についてのお話など大変興味深いものでした。（お勧めのネットフリックスも見ちゃいました。）

そして何より毎回素晴らしい講師の方々の講義を聞かせていただき、とても充実した半年でした。

企画・運営委員の方々、スタッフの皆様、なんとも贅沢な時間をご馳走様でした♪

ポストコロナの日本経済

～格差は克服できるか～

講師：岩村 充
(早稲田大学名誉教授)



自主学習日 10/8 杏林大学井の頭キャンパスにて

フェスティバル展示発表

SDGs 取り組みの加速と課題

1. 背景

地球温暖化

世界のCO₂排出量と濃度の変化

大気中CO₂濃度

食料危機

日本の地球の糧の確保と世界の食糧の危機は2050年よりもっと顕在化する可能性がある

気候変動の要因

人間活動による気候変動は急激なペースで進行している

2. SDGsとは

持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) の概要と17の目標の紹介。

3. 社会の大転換

「脱炭素化」は決して努力だけで達成できる目標ではない

社会の「大転換」が起きる必要がある

「大転換」(transformation) 一歩を踏み出すには、人々の世界観の急激な変化が必要

4. わたしたちのできること

許容度の範囲内での環境負荷 農産物の地産地消を学校給食

個人 省エネ、プラスチックのリサイクル

企業 E-V、水資源の効率的な利用、再生可能エネルギーの活用

自治体 地産地消、スマートシティ、スマート農業

国 太陽光発電の補助、省エネ対策

5. SDGsの課題

富の格差拡大 南北格差拡大 持続可能な成長の達成

低経済成長時代の深刻な課題

年金

年金の持続可能性と課題

イノベーション

イノベーションの重要性と課題

分配

分配の課題

メイン講師紹介

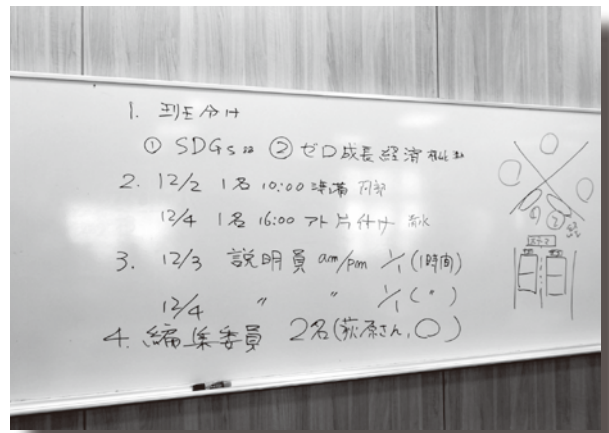
いわむら みつる
岩村 充さん



早稲田大学名誉教授。
1974年東京大学経済学部卒業。
同年日本銀行入行、ニューヨーク駐在員などを経て1997年同行を退職。
1998年早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授、研究科統合などを経て
経営管理研究科教授、2021年退職、早稲田大学名誉教授になる。早稲田大学博士。

主な著書

- 『貨幣の経済学』（集英社、2008年）
- 『貨幣進化論』（新潮選書、2010年）
- 『コーポレート・ファイナンス』（中央経済社、2013年）
- 『中央銀行が終わる日』（新潮選書、2016年）
- 『金融政策に未来はあるか』（岩波新書、2018年）
- 『国家・企業・通貨』（新潮選書、2020年）
- 『ポストコロナの資本主義』（日経BP・日本経済新聞社、2020年）



●カリキュラム

回	日付	講義名 学 習 内 容	講 師
1	5月14日	開講式・オリエンテーション	自主学習
		企画委員からの挨拶、学習生の自己紹介、運営委員の選出。	
2	5月21日	経済成長は19世紀に始まった	早稲田大学名誉教授 岩村 充さん
		19世紀までの経済拡大は人口増と比例していたが、人々が豊かになるものではなかった。19世紀からは国民国家の普及、株式会社制度の準則主義化、中央銀行制度による通貨供給体制形成などで、経済成長は始まった。	
3	5月28日	限界に突き当たる経済成長	早稲田大学名誉教授 岩村 充さん
		なぜ成長に限界を感じるのか。1. 成長そのものが持続できない(地球環境の制約、人口構成の変化、技術進歩の停滞、分配の偏り)。2. 成長が融和をもたらすとは限らない(分配の偏り)。	
4	6月4日	脱成長の可能性	杏林大学総合政策学部教授 大川昌利さん
		以前は景気を測る指標として、GNP(国民総生産)が用いられていたが、現在は景気をより正確に反映するGDP(国内総生産)が重視されている。日本のGDPは停滞しているが、日本人は不幸になったのか。経済成長と幸福感の関係は？気候環境が崩壊しているため、経済成長は不要と言う考えもある。	
5	6月11日	自主学習	自主学習
		自主学習への要望、提案、岩村先生の提案に関する討議。その後、4グループにわかれ、討議、発表。	
6	6月18日	分断の時代の自由貿易～相手特定・地域限定への回帰をどう防ぐか(オンライン)	同志社大学大学院ビジネス研究科教授 浜 矩子さん
		WTO(世界貿易機構)には通商三原則、最恵国待遇の世界があり、これが平和のための通商理念である。FTA(自由貿易協定)とEPA(経済連携協定)は通商理念違反である。GEPO(地球的経済連携機構)は通商理念を貫き、二国間相互主義を排除しなければならない。	
7	6月25日	気候危機のリスクと社会の大転換(オンライン)	国立環境研究所上級主席研究員 江守正多さん
		地球温暖化、CO ₂ の排出は人間健康へのリスクなど8つのリスクを伴う。脱炭素化はしぶしぶ努力し達成できるものではない。社会の大きな大転換が必要である。ルールが出来ると常識が変わる。大転換の事例として、分煙革命が挙げられる。	
8	7月2日	自主学習	自主学習
		4グループがそれぞれテーマを選び、討論。この討論は、岩村先生への質問をまとめる場となる。	
9	7月9日	コロナ後の農業問題と貿易	東京大学農学部生命科学研究所教授 鈴木宣弘さん
		コロナ禍で露呈した生産資源の脆弱性。輸入依存で自給率はさらに低下。日本の政策は米国の圧力が大きい(米国の陰謀)。政府だけでなく、加工、流通、小売業界、消費者も国産の想いを行動に移し、皆で支えあわないと有事は乗り切れない。	
10	7月16日	キャッシュレス決済と未来の通貨	杏林大学総合政策学部教授 大川昌利さん
		現在の貨幣は信用、信頼がある。キャッシュレス決済は、銀行に預金があるから信用、信頼がある。仮想通貨は投資目的となっている。今後は民間デジタル通貨と中銀デジタル通貨がうまく組み合わせれば、可能性を大いに秘めた通貨になるのでは。	
11	9月17日	国家は没落するか～財政における底辺への競争	早稲田大学名誉教授 岩村 充さん
		拡大する格差、個人所得最高税率の推移、主要税種別対GDP比率(法人税の財政貢献は小さい)、自由主義圏諸国の法人実効税率比較、法人税軽減と消費税増税が意味するもの、あまりにも多い資本収益税の抜け穴、税制を抜本改革する方法とは。	
12	9月24日	格差拡大に情けない共犯者～金融における底辺への競争	早稲田大学名誉教授 岩村 充さん
		アベノミクスの三段論法：物価が上がれば景気は良くなる、貨幣を増やせば物価は上がる、だから日銀はお金を刷るべき。インフレ、円安という新たな難題。積みあがる日銀の財務リスク。日銀を救出する方法とは。	
13	10月1日	コーポレートガバナンスの迷走～企業法制における底辺への競争	早稲田大学名誉教授 岩村 充さん
		コーポレートガバナンス強化という名の、企業支配における株主優遇競争。それは企業を活性化させるのだろうか。企業組織の目標を利益最大化から、付加価値最大化に転換すること。	
14	10月8日	杏林大学学生との意見交換	自主学習
		杏林大学に出向き、学生との意見交換。学生は2年生4人、4年生2人、計6人が参加。	
15	10月14日	【公開講座(金曜日)】ロシアのウクライナ侵攻と日本の安全保障政策	防衛ジャーナリスト 半田 滋さん
	10月15日	【公開講座(土曜日)】パレスチナで働いて思うこと —基本的人権と尊厳と平和について考える—	

回	日付	講義名	講師
学習内容			
16	10月22日	公的年金制度の課題と改革の方向性 第1回基礎編①(オンライン)	法政大学経済学部教授 小黒一正さん
	解決すべき課題：1. 目減りする基礎年金の問題と財源確保 2. 第3号被保険者の問題 3. 世代間の是正 4. 私的年金や税制優遇措置との連携、公的年金と私的年金等の貯蓄との2本柱		
17	10月29日	公的年金制度の課題と改革の方向性 第2回基礎編②(オンライン)	法政大学経済学部教授 小黒一正さん
	1. 急増する貧困高齢者と膨らむ年金債務 2. 基礎年金を刈り込みすぎのマクロ経済スライド 3. 日本独自の所得代替率の定義が問題の本質を覆い隠す		
18	11月5日	公的年金制度の課題と改革の方向性 第3回応用編(オンライン)	法政大学経済学部教授 小黒一正さん
	改革の方向性 → 積み立て方式に移行		
19	11月12日	イノベーションの課題と方向性	早稲田大学商学学術院教授 清水 洋さん
	経営資源の流動性を上げないと、企業の収益性は高まらず、イノベーションは生まれにくい。注意すべきことは、今までの基礎的な技術が育ちにくくなり、壊滅的なイノベーションが多くなる。		
20	11月19日	フェスティバル準備	自主学習
	事前アンケートにより、2グループでそれぞれ展示物の内容を討議。フェスティバル当日の説明者、前日の展示準備、翌日の撤退作業などの担当者を決める。		
21	11月26日	フェスティバル準備：開催日12/ 3(土)・4(日)	自主学習
	模造紙二枚を使用し、展示物の完成。		
22	12月10日	プラットフォーム問題のこれまで そしてこれから	読売新聞東京本社編集委員 若江雅子さん
	便利さの罠、GAFA vs 霞が関、ウォールド・ガーデンのゆくえ		
23	1月14日	財政再建～歳出の削減と社会保障の抑制について(オンライン)	政策研究大学院大学名誉教授 井堀利宏さん
	1. 財政の現状と課題、2. 国際市場の動向、3. 財政再建の目標、4. 社会保障歳出の削減努力、5. 健全化の考え方		
24	1月21日	自主学習	自主学習
	フェスティバル展示物の確認、討議、説明。岩村先生の提案に関する討議。		
25	1月28日	経済成長 vs 定常経済	杏林大学総合政策学部教授 西 孝さん
	1. 経済成長と景気変動、2. 持続可能でない経済成長とは、3. 経済成長に関する思想の変遷、4. 考察されるべき論点		
26	2月4日	自主学習	自主学習
	学習生の所感。最終講義の岩村先生への質問事項の決定。		
27	2月18日	三鷹市の産業・観光について	三鷹市生活環境部生活経済課長 立花省二さん
	1. 三鷹市における産業振興施策の位置づけ、2. 産業のあゆみ、3. 産業の概略、4. 産業の課題、5. 産業施策*三鷹市の観光		
28	2月25日	日本銀行の出口戦略	東京海上アセットマネジメント(株)チーフストラテジスト 平山賢一さん
	何故ETFの出口戦略が必要か、日銀が保有するETF等、政府による株式市場への介入事例、全銘柄に対する無制限介入による株価の歪、株価維持機関の戦略が株式保有構成に影響、アセットオーナーとしての日銀、ベストプラクティスを示すべき立場の日銀、矛盾を抱えたETF保有の将来、ETFの出口戦略の構想		
29	3月4日	データサイエンス～本質と活用法(オンライン)	横浜市立大学教授 上田雅夫さん
	データサイエンスが何を意味し、ビジネスでどのような活用が期待できるか、その限界を考える。		
30	3月11日	状況はどこまで変えられるか	早稲田大学名誉教授 岩村 充さん
	講義では無く、学習生5人からの質疑。(事前に岩村先生に連絡済)		

40 数年の会社員生活も残すところ僅かとなった頃、市報でこの講座（ポストコロナの日本経済－格差は克服できるか）の募集を見て自分の心に響くものがあり、申し込みました。

私が社会人となった 1980 年頃は日本経済には活気があり、ジャパンアズナンバーワンなどとも言われ、自分も含め多くの若者は将来の生活はより良くなるものと信じて疑わなかったと思います。ところがいつからか日本の経済は低成長、停滞となり貧困や格差が当たり前の社会になってしまいました。何故この様になったのか、何が問題なのか、どうすれば良い社会となりうるのか、著名な先生方から学べないか、そして出来れば自分にも子供や孫の世代の為に何かできないかという思いがありました。

メイン講師の先生その他、各界の専門の先生方から時宜に合った最先端のテーマで講義を受けましたが、数十年ぶりの座学は非常に新鮮、且つ興味を持って聴講する事ができました。

自主学習では参加者の方々の意見を交換する場もあり、このような考えもあるのだと物事の見方、捉え方を考えさせられる事も多かったです。

受講していく中で、自分自身の視野は広がり、日本経済・社会の問題、課題もより明確に認識できるようになりました。そしてどう対処すべきかと言った事も少しは理解できたと思います。

今後は自分として何ができるのか、そしてそれをどの様にやって行くのか、を考え（小さな身の回りの事からとなるでしょうが）実行していきたいと考えています。

賃金を考える

昨年公表された労働生産性の国際比較でみるとポーランドやハンガリーといった東欧諸国と同水準（購買力平価換算）、OECD 加盟国中 29 位、今までで最も低い順位となっている。相対的に低下していることが見て取れる、ことに付加価値の 70% を占める非製造業の低さが目をひくが改善すれば向上する余地も残されている。労働生産性は付加価値を労働投入量で割って計測する、技術、労働、資本との関わりから労働生産性が向上すれば原資が増え賃金上昇につながる。

昨年からエネルギーなどの生活必需品やそれに伴う各品目の価格上昇により賃金が目減りし生活が悪化している。海外の資源高はすでに落ち着き、国内の物価上昇もやがて鈍るとの見方もあるが行方が気になる。短期的な賃上げでなく、長期的に労働生産性が向上することで賃金を上げることが望ましい。

労働生産性向上には新しい設備や機械を投資することで労働投入量の減少を図ることができる。身近な例でコンビニやスーパーで使用されている自動精算機がドラッグストアでも見られる。それと最も重要な技術革新が生産性上昇をもたらす。人材投資を含む無形資産への投資も忘れてはならない。産業構造の変化に伴い生産性の低い産業から高い産業へ労働や資本が移動、拡大すれば経済全体として労働生産性は向上する。

長期に渡り生産性上昇率が緩やかに低下している状況や将来不安から企業も家計も貯蓄に励む習性から抜け出すことは容易なことではないが生産性向上が賃金上昇にとって重要ではないかと思う。

途中参加でしたが新しい気づきや興味がわき刺激にもなった。何より楽しく学べたことがうれしいが、空席が目立つようになり残念でした。

テーマを3つ掲げ順位付けと入替えをしました。9月頃 CO₂排出（気候変動） ②生産年齢人口の減少③未定 12月頃①CO₂排出（気候変動）②生産年齢人口減少③日本人のメンタル（官僚制） 1月以降①日本人のメンタル（官僚制） ②CO₂排出（気候変動） ③日本の生産年齢人口減少です。CO₂排出（気候変動）削減と資本主義は、互いの目的が真逆です。都留重人著「日本経済の奇跡は終わった」161頁で、シュンペーターの記述を引用後、「…経済活動の主体が私的資本の個々の単位である資本主義においては、サープラス（主としては利潤の形をとる）を蓄積にまわして自己拡大をはからねば競争に負けるという制度的要請が、そこにはあるのだ。」とあります。ドラッカーの「ネクスト・ソサエティ」273頁「…市民性の回復を実現する唯一の機関…」NPOの今後の日本社会での一層の多用は、CO₂排出削減効果に貢献すると思いますが、SDGsだけで現状打開可能かは疑問です。生産年齢人口の減少は「金融緩和の罫」23頁～、藻谷浩介・萱野稔人対談「生産年齢人口の減少を消費縮小の誘因とみる」の記述、2022年生まれの子どもの数80万人割れのニュース、ダイヤモンド2023.3.4川口大司コラム「…女性の就業率が10年代を通じて大幅に上昇して供給余力がそれほど残っていないと考えられることや、…」、「…これから40年にかけて15～64歳の生産年齢人口が毎年約70万人ずつ減少していくという予測を反映しており、構造的だ。…」、ジム・ロジャーズ「捨てられる日本」で、1960～1980年代の英国と日本を重ね合わせ日本を構造的衰退国家と呼ぶ等、構造的の記述が際立ちます。日本人のメンタル（官僚制）は、岩村先生の「貨幣進化論」200頁とドラッカーの前述書指摘、小室直樹日経ベンチャー特別講演会「資本主義の精神」動画等の諸説があり興味深いです。

充実

荻原浩二

自分の中での経済とは難しいもので、なんとなく分かったようで分からないようなものでした。ある経済学の大学教授が、経済は「気」と言っていたので、分かったような「気」がしたと言うことにして講義を受けていました。

講義内容はとても素晴らしいものでした。メイン講師の岩村先生を筆頭に、そうそうたるメンバーです。この市民大学講座の講義を引き受けてくださったことに、感謝いたします。

特に印象に残った講義は、江守先生のSDGs、鈴木先生の農業問題、小黑先生の年金制度、大川先生のキャッシュレス決済と未来通貨、若江先生のプラットフォーム問題です。また、三鷹市の生活経済課の立花課長のお話も印象的でした。三鷹市に60年以上も住んでいるのに、三鷹のことが全く分かっておらず、いかに無関心で生活していたか恥ずかしい思いでした。今後、三鷹市で生活していく上で、私にとっては役に立ちそうな内容だと感じました。

自主学習が10回ほどありましたが、こちらも充実した学習でした。フェスティバルでの展示物の作成は、面倒くさい作業でしたが、非常に面白く内容の濃いものでした。私はあまり戦力になっておらず、グループのメンバーにはこの場をお借りし、お詫び申し上げます。また、杏林大学の学生との意見交換会は、とても新鮮で、若返ったような気がしました。コロナ禍で時短での交換会でしたが、このような企画は素晴らしいものと思います。

最後に、この経済コースの企画委員、運営委員、担当職員の方に感謝いたします。ありがとうございました。

受講ができて本当によかったです

N.O.

ネット情報・新聞・テレビ等々、情報は過多というほど入手できるけれど、その情報にコントロールされているのではないかと、コロナの中で思うことが多くなり、気軽な気持ちで参加いたしました。まずは、受講生の知識量、勉強量にとっても刺激を受けました。そして、内容も毎回、とても濃いものでした。日本の現状は楽観できるものではありませんが、これから世界を支えていく人々が、日本で働きたい、と思える経済にする為、勉強を続けたいと思います。日本の現状は、思っていたよりも厳しいものでしたので……

ゼロ成長時代 この国の限界

岡田 健治郎

もう30年、日本経済はゼロ成長の呪縛から抜け出せないでいる。1年間の講義を通して、解決策があるのに日本特有の壁によって解決できない、ポストコロナの時代になってさらに混迷している、この国の課題を自分なりに考えることができた。

その典型が年金制度ではないか。物価高に伴い2023年度から年金の2%引き上げが決まったが、マクロ経済スライドが発動されてインフレ率を下回るため、実質的には目減りする。このようにカットされるのは基礎年金が28%と大きく、恵まれた人の厚生年金（上乘せ部分）の目減りは3%に過ぎない。高齢者の貧困化も深刻な問題ではあるが、制度の欠陥によってさらに割を食うのが後世に続く若い人たちだ。理不尽ともいえる世代間格差は見直す必要がある。その手立てや専門家のアイデアもあるのだが、政府も政治も前例や既得権を1ミリも動かすことができない。

産業の発展に欠かせないイノベーションも低迷している。それを客観的に裏づける指標があり、失われた10年（1991～2000年）はほとんどゼロに近かったことを講義で学んだ。経営資源の流動化が低いためイノベーションが生まれにくく、海外勢に後れを取った半導体や自動車のEV（電動）化。余剰人員をさっさと整理して経営資源を集中すれば、事業の転換もしやすくなる。ただし、米国流のそうしたやり方が本当によいかどうかは一概に言えない。

いまは横浜にある日産自動車の本社は、かつて東京・東銀座にあった。新橋演舞場の隣のビルでカルロス・ゴーン元社長に2度、会ったことがある。新聞社の週末版のデスク（副編集長）としてゴーンの聞き書きの連載コラムを企画し、担当記者に同行した。難しい質問も、顔に指を当てて考え始めたと思いきや、5秒以内にスラスラと答えが返ってきた。当意即妙、論理明快、かつ人を引きつける何かがあった。破綻寸前の日産に乗り込み、翌年に黒字化、2兆円の負債も4年で完済してV字回復を果たしたゴーン流は、コーポレートガバナンスのお手本とされた。まさか刑事被告人となり、国外逃亡という末路をたどるとは！ 強力すぎるガバナンスは独裁と腐敗を招き、やはり日本の企業風土になじまなかったということか。呪縛を打破する一筋の光かと錯覚した己の不明を恥じつつ、改めて思う。

はるか昔、大学で経済を学んだが、数学がわからず経済原論で可（ギリギリ合格）をとる始末で、とても苦勞した。まさか、今回、経済は難しいとの感想をもつとは思わなかった。ハイレベルな講座であったと思う。思うとしたのは、どうやらハイレベルと感じたのは私だけで、多くの受講生の皆さんにとっては、簡単であったのかもしれない。

そこで、講義自体の感想はご遠慮して、講義の周辺についての感想を書こうと思う。

1. 杏林大学学生との懇談会

とてもユニークな時間を持てたと思う。企画してくださった皆さんに感謝である。今回、経済について学んでいる学生さんとの懇談は果たせなかった。この点は次回のお楽しみであろう。学生さんがどんな研究をされていて、その研究について質問できる時間を持てたらまさに至福の時であろう。

2. フェスティバル準備

今回は、学んだことを模造紙に書いて発表する準備をおこなった。フェスティバルに精通されている諸先輩のおかげで、スムーズに準備できたと思う。一方、哲学のチームが、模造紙発表ではなく、フェスティバル当日に、来場者と哲学対話をされたと聞く。全くもって面白い取り組みである。経済で同じような座談会を行うのは難易度が高いように思うが、テーマを決めてやれば、できるかもしれない。これも次回チャレンジしてみたら面白いと思う。

3. 毎回の講義は、12時に終わる

丁度昼時なのである。近くのお蕎麦屋さんなどで、反省会でも有志でできたら面白かったかもしれない。コロナ禍で、なかなか難しかったが、これも次回のお楽しみであろう。たまには、講師の先生にもご参加頂ければ、これまた至福の時であったと思う。

2022年はコロナ禍で落ち込んだ経済にロシアによるウクライナ侵攻という想いもしなかった事態が発生して世界中が混乱した年になりました。その中で私たちが感じている閉塞感「なぜ日本だけ経済成長しないのか」という学習生の言葉に表されていると思いました。

メイン講師の岩村先生は経済社会の歴史から読み解かれ、GDPを大きくする意味、経済成長には限界がある事、日本の早すぎた成長がバブルを生み崩壊したことなどを学び、日本は低成長時代を先取りしていることが判りました。では低成長時代を生き抜くためにはどうすればよいかというヒントを西先生の講義で私は得た気がしました。「GDP変動がもつ2つの意味、経済成長と景気変動の区別」と「持続可能ではない経済成長」という講義は目から鱗のようでした。この視点で今までの政府の政策をみるとピントはずれであり、「日本だけなぜ経済成長しないのか」の答えが判ったような気がしました。

もう一つの心配は食料安全保障の問題です。鈴木先生の「食糧危機はもう始まっている」「米も酪農も減産ではなく、人道支援による需要回復」「自給率と自給力はリンク」の指摘に共感し、特に2017年の種子法の廃止の影響の恐ろしさには危機意識を刺激されました。

また、子供や孫の世代への心配事として年金問題があります。小黑先生の提案される「賦課方式から積立方式への移行」は理論的にも納得できるのに何故政府は動こうとしないのか不思議でなりません。最後に運営委員の皆さんと生涯学習センター小暮さんのお陰で満足の行く学習ができたと思っています。本当に有難うございました。

「ポストコロナの経済政策～格差は克服できるか～」というタイトルに惹かれました。日本はバブル崩壊後、失われた10年、20年、30年と困難が続き、コロナ禍まで加わり、反転の機会が得られないまま今日まで来ました。なぜこうなったのでしょうか。バブルの崩壊後、ヒト、設備、債務という3つの過剰が残り、当初これさえ克服すれば、と全力を傾けましたが、過剰が解消されてももとの戻りませんでした。実はこの間、世界でミラノヴィッチ教授が指摘したりカードの比較生産費説では説明できない大変化が起こっていたのですが、日本はこれに気づかなかったのです。そして今や世界の労働生産性は、途上国がもっと大きく5～6%、欧米がそれに続き2～3%、日本は先進国最低の1%以下になりました。これに対する処方箋は何か。私はとくに大川先生の「脱成長の可能性」と西先生の「経済成長 vs. 定常経済」の講義に期待しましたが、「日本経済はこのように進めばよいのだ」という処方箋はなかなか出てきませんでした。そうこうしているうちにフェスティバルが近づいてきました。2つのグループに分かれて発表することになり、私は経済グループに参加しましたが、SDGsグループのまとめ作業を見ていて、そうだSDGsがあったのだ、と思いあたりました。考えてみればSDGsは2015年9月に国連で全加盟国193カ国の合意を得て2030年を目指し、経済・社会・環境の総合的な目標として合意されました。ウクライナを見ると実に奇跡的なタイミングだったといえますし日本経済にとってももっとも貴重な羅針盤です。

講座を通して脱経済成長を考える**H.S.**

市民大学講座を初めて受講しました。各先生方の内容の濃い、レベルの高い講義に毎回のめり込み、非常に充実した時間を送ることができたと思います。紹介して下さる本も何冊か読みました。集中して学習することが、こんなにも面白いものかと、この歳になって改めて思いました。人間、生涯勉強といいますが、勉強は何歳から始めても良いというのを実感しています。今回の講座で学習したことをひとつひとつ詳しく述べることはできませんが、経済の仕組みや考え方、感覚が少し分かるようになってきた気がします。

コロナが落ち着くには、まだ暫く掛かるとは思いますが、収束した後にどのような世の中になるのか、日本経済が何処に向かうのか、正直良く分かりません。最近の日本経済は以前のような勢いがないと聞きますし、足踏み状態のような感じもします。これまで日本は凄い勢いで経済成長し発展して来ました。そのため格差も生まれたと言われていました。また、経済成長は幸福感には繋がらないという話もあります。しかし、以前に比べると現在は格段に豊かで便利な社会、生活があります。そこには色々なイノベーションがあり、技術開発された結果だと思えます。イノベーションの結果が経済成長ではないかと思えます。昨今、脱経済成長という言葉をよく聞きます。これまでと同じように、限られた資源を湯水のごとく使うやり方が通用しなくなっている、地球環境が耐えられなくなっているという反省ではないかと思えます。人間はもっと大きな可能性を持っていると思えます。更に叡智を絞り、これまでとは違う地球に優しいやり方で、みんなが平等に幸せになれる社会を目指すべきということではないかと思えます。

参加当初は、経済の知識を深めて我が子（小五と高一）に学校では学べない事を伝えられたらなと思ったり、講師や受講生と積極的に質問や議論をして、充実の2時間をと意気込んでいたのですが、毎回予習復習をせずに参加していたせいで、講師の話は聴く専門、自主学習の時間は私見が無く取り残された気持ちでございました。

それもこれも、主体性を持って参加しなかった自分が悪いのですが…

それでも、メイン講師の岩村先生はじめ、各講師陣の話には夢中になって聴いておりました。

何を学んだのかと問われると、難しい単語が飛び交っていたからか、直ぐに返答出来ないのですが、あの時の講師陣の熱い言霊は、今も記憶に焼きついています!!

Digitization と Digitalization—そして—

瀬 賀 登茂枝

日々進化を遂げている Digital 技術ですが、ここでは、Digitization と Digitalization について考えてみます。昨 2022 年、山口県阿武町で、生活保護費 4,630 万円の誤振り込みと、兵庫県尼崎市で、約 46 万人分の住民情報が入った USB メモリーを紛失したというニュースがありました。

これらは偏に前者はフロッピーディスクの受け渡しから、後者は、USB メモリーを入れたカバンの置き忘れによる事故、すなわち、Digitization（紙情報をデジタル形式に変換しただけ）によるミスで、これがもし Digitalization（オンライン上の直接的なやりとり）ならば、防げたと言われています。

翻って、当経済コースのフェスティバル開催準備のための自主学習を振り返ってみますと、我がグループは、和気藹々協力的なメンバーの集まりでしたが、作業は定刻を 30 分ほどオーバーしてしまいました。

展示用模造紙を作成するにあたり、紙情報の加工と、一部 Digitization ではありましたが、その出力依頼で、各々が、教室と事務室とを行き来した結果でした。

去年は、ある方が PC 持参で、事務室とはメールでのやりとり、すなわち Digitalization によるものでした。一人 30 分なら 10 人で 300 分の残業となります。

経済コースでは、イノベーションについてや、働き方改革「ジョブ型」「メンバーシップ型」についても学んできました。学んだ内容を自らの身に落とし込んで、自主学習でのパフォーマンスを上げるために、デジタルの活用の仕方を再考しなければ～と思った次第です。

そして、近い将来は Chat GPT のような対話型 AI の利用で、グループワークの作業の仕方も変わっていくでしょう。

経済の成長のとらえ方を産業技術の進歩、機械の発明などではなく、財産権、貯蓄と投資と教わり、貨幣、日本銀行の役割、新聞記事の経済欄にもり、我われの生活とも関連する法人税の軽減と消費税増税が意味するものを学びました。

米国のボーイング社の下で共同開発した航空機 B-767、また英国などと航空機エンジン V2500 など共同開発当時の英国首相サッチャーが導入した VAT (Value Added Tax) 付加価値税がありました。日本はまだ消費税導入する前で、価値が付加された税とは何だか理解できず英国駐在者に尋ねても物を買うとき定価に割り増しの金を払うくらいの説明でした。

所が岩村先生の「法人税引下げ軽減と消費税引上げが意味するもの」のところに消費税とは要するに売り上から原価を引いた残差を「付加価値 (Value Added)」と呼んでそれに課税するものです、ヨーロッパでは消費税に相当する税金を付加価値税 (Value Added Tax) と言います」と税の導入の狙いや付加価値の意味が一瞬で理解できました。

買い物をしたからといって、それだけで価値が増すのではないが、税率の数字だけを変えるだけで幾らでも国の収入を増やせる消費税は困った、素晴らしい税である。何に、何の様に使われるのかを確り監視するのは国民の義務だと思います。

頓首

まず最初に、一年間の講義運営を支えてくださった、三鷹市生涯学習担当の小暮さん、経済コース運営委員の林さんをはじめとした皆様方、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

おかげさまで、経済ど素人の私でもいろいろ勉強となり、また今後の自己啓発テーマの一つにこの「経済」というものを組み入れることができたように感じております。今まで新聞等で種々の情報を得ていても、この「経済」関連事項については、なんとなくぼやけていたのですが、それがこの一年間、いろいろな観点より講義を受けることで、わずかですが、明かりが見えてきたように感じております。特に興味を惹かれたのは、鈴木先生の「農業問題と貿易」と黒先生「年金問題」です。岩村先生の講義は、私にはかなり難しかったようで、キーワード「格差社会」「財政、金融、コーポレートガバナンスにおける底辺への競争」などが頭に残っているレベルです。お恥ずかしい限りですが、今後自己研鑽を重ね、先生の講義を振り返ってみようと思っています。そしていつかは、岩村先生の講義内容が少しでも身につけているレベルになることを目標とします。今後は、これらのわずかな突破口を無駄にすることなく、自己研鑽を重ねてゆこうと思っています。

いろいろありがとうございました。

新型コロナワクチンの普及で重症者も減少し、ウィズコロナの雰囲気も広がり、以前の生活に戻りつつありますが、3年過ぎた今でも高齢者には不安なコロナ感染は続いています。この3年間で、生活スタイルも一変し、オンラインは当たり前、デリバリーサービス等も広がりをみせました。

去年は、まさかと思えるウクライナ紛争が勃発し、円安に伴うエネルギー価格の高騰、更に輸入原材料のコストアップの影響も受けてインフレ気運が高まり、商品価格は急上昇し、生活が圧迫されてきています。一方、企業では、株主優先のポリシーは、相変わらずで、従業員の給与は多少上昇するも実質賃金は、マイナスであり、格差解消には至っていません。

メイン講師の岩村先生からは、[国家・通貨・企業]に関する役割や課題に関してかなりハイレベルの内容を学んだ感じがしますが、少子高齢化の進む日本では、如何にしてこの苦境を乗り切るかも話題になりました。イノベーションの一層の推進や内外の高度人材の活用等、従来の枠組みを超えた取り組みが必要と感じます。また、教育費の無償化や若者世代が活躍できる施策の早期実現が待たれるところです。

本年は自主学習で、岩村先生と大川先生のお手配により、杏林大学の学生さんとの意見交換等の新しい交流もなされて新鮮な刺激を得ました。更に、フェスティバルでは、今回初めて学習室が割り当てられ、学習生が協力して作品を作り上げることや討議などを通してより学習内容の理解が深まった感じがします。

地球温暖化の進む世界で、新たな気持ちで、社会転換の促進を意識する昨今ですが、小さな日常の試みとして、節電、ペットボトルのリサイクル等に取り組んでいる次第です。

我々の未来

堀江通弘

昨年5月の開講時、私としては、

- 1、コロナ禍
- 2、ウクライナ戦争

の中、世の中がどうなるのだろうか、という漠然とした不安がありました。そして1年が経ち、状況は変わっていません。むしろ一層混沌としています。

確かに「モノ不足」は、対象となる「モノ」自体に変化がありました。昨年当初は、戦争勃発により医療品の品薄が懸念されました。また物流の遅延でフライドポテトが入手できないという問題がありました。

その後、医療品の不足はなく、現在は鳥インフルエンザにより、鶏卵が不足して、ファミレスのメニューに影響を与えています。

ただ、従来の未来予測で一つだけ実現したのがありました。ロボットです。「鉄腕アトム」や「鉄人28号」に馴染んだ我々としては、ファミレスの配膳ロボットに、ようやく夢がかなった思いがあります。

ただ課題はあります。「鉄腕アトム」は「人間になりたい」ロボットがテーマです。人間になる為には、悪いことも、できなければなりません。それができないアトムは悩みます。

また「鉄人28号」は、意思はありませんが、その分、操縦桿を奪われれば、簡単に敵側に寝返ってしまいます。今のドローンを使った攻撃みたいなものです。

我々の未来はどうなるのか。

諸先生方、また皆さんから頂いた知見で、予測していきたいと思います。

講義はロシアによるウクライナ侵攻、西側の経済制裁と反発するロシアの天然ガス供給削減や穀物輸送妨害等のエネルギー・食糧危機が懸念され、依然として感染拡大が続く新型コロナと相俟って波乱の中でのスタートであった。

経済コースを選んだ理由は主に格差問題に関する関心からであったが、残念ながら格差問題に関する講義は少なかったが北米の現在の繁栄は中南米で発見された金・銀がなく他にめぼしい資源もなかったことが幸いし、中南米に見られた収奪的支配から免れた事等、格差の起源に関する話は興味深かった。又 日本の格差の拡大は非富裕層の拡大、米国の格差の拡大は富裕層の急拡大という指摘も興味深かった。

メイン講師が日銀ご出身という事もあり講師の方々に日銀出身者が多く、日本経済の今後に大きな影響を及ぼす黒田日銀のかじ取りについて忌憚のない見解も期待した。各講師とも直接的な批判は無かったが ①政府との距離が近すぎる ②通貨発行の自由の確保 ③日銀の金利政策は現在と将来の取り換えを行っているに過ぎない ④頑なな金利政策のもたらす円安 ⑤膨大に膨れ上がったETF・国債の処理 等の課題の指摘は多かった。

年金制度の課題と改革、コロナ後の農業政策、データサイエンスの本質と課題（主体はあくまで人間である）等興味深い講義が多く大変参考になった。

日本の財政再建～歳出の削減と社会保障の抑制について

丸山 健蔵

井堀先生による日本の財政再建の対策等について、多くの皆さんに知っていただきたくこのテーマを選びました。2022年6月末の国債発行残高は1,065兆円、うち日本銀行が保有する割合は49.6%、3ヶ月後の9月末には50%を超える異例の事態である。足許の政府支出拡大により、この比率は今後も上昇する見通しである。政府債務残高が累増する一方、名目GDPは横バイのため2021年の政府債務残高対GDP比率は262%で他の国々に比べて突出している。因みにギリシャは199%、米国は128%である。また2022年の1人当たり名目GDPは、2000年には2位であったが2022年には30位まで転落した。現状を改善する方策として井堀先生は、主に以下の4点を提言されています。

①直近3年間のコロナ対応の多額の財政支出分をカバーするために、東日本大震災復興特別会計と類似したコロナ危機特別会計を設定、50年かけて所得税5%の増税を実施する。②2025年度基礎的財政収支の黒字化を達成し、政府債務残高対GDP比率を安定的に引き下げる。③コロナ対応の増税とは別に、通常の「国の会計」では社会保障費の需要拡大による財政赤字を消費税で対応する。④年金改革にも触れられており、60～80歳の給付期間は個人の積立方式に切り換え、80歳以上の後期高齢者のみを対象に現状の賦課方式とすることにより、政府支出を抑える。将来国民年金は28%、厚生年金は3%のカットが起これるとの試算もあり、国民の負担は増えますが私は上記の方策に賛同します。最後に、講師の先生方、生涯学習センターの職員の方にもお世話になり、感謝申し上げます。

世界はコロナ被害からウクライナの戦争により大きく変動している。戦争は経済的問題から起こることが多い。最適な企業活動を行うために従業員が企業の良き利害関係者になるために自身による投資が必要である。学費や研修費を国や企業が肩代わりしイノベーションを起こし国や企業、国民に利益を与えることが必要である。

コロナが収まり、ウクライナ戦争が終結し正常な経済交流が世界的に始まれば最適な企業活動している企業が発展するでしょう。今年度の国家予算で防衛費が2割以上増える予定ですが誤っているように思えます。日本憲法を順守し武器による防衛でなく対話や経済援助による防衛が良いと思います。そのためにも国が企業に援助しイノベーションを起こし国民全体が裕福にならなければいけないと思います。

反省と感謝

宮 下 国 生

三鷹市民大学総合コースは市民の生涯教育の一環として設けられている。市民は応募し、抽選など経て学習生となり得る。

応募資格の中の一つに「16歳以上（在勤・在学含む）とあり、全日程参加可能な方」とある。老齢の私はこの項目が今年度は何故か気になっていた。経済コースに一年ぶりに当選し、気を良くし、10月の自主学習での杏林大学学生との対話交流の日までは全学習日程出席した。ところが10月中旬、近所のバス停近くで歩いていて、フアッと前向きに転倒してしまった。顔面制動の形であり、上顎、左手親指の骨折もあり、救急車で運ばれるという大失態。結局 3カ月強市民大学は休まざるを得なかった。特に聞いたかった「日銀の国債保有残高の問題と MMT」という講義も聞けなかった。積極参加のつもりであったフェスティバルも一度も参加できず、皆さんに礼を失することになってしまった。

さて 自主学習で初めての試みであった杏林大学キャンパス訪問・学生との対話交流では広島出身の学生の話や自衛隊に入隊することを既に決めている女子学生の覚悟も聞け、私にとっては自主学習としてユニークなものとなった。

講義内容の中では近年の分断論争の一つ「経済成長 vs 定常経済」、ポストコロナ、それに新たなインパクトになったロシアの無思慮なウクライナ侵攻という世界情勢の中で、日本の財政・金融、福利厚生、脱炭素の環境問題、更にコーポレート・ガバナンスの態様などについて、それぞれ新たな、多様な観点からの説明があり、問題を読み解く道筋を教授いただいた。私たちは今新たな厳しい転換点に立っていることは紛れもないことと思われるが、迫りくる老齢認知の障害を撥ね退ける術をいただいたものと大いなる感謝の念が湧いて来る。自分の迂闊さへの反省と厚意鞭撻をいただいている各位への感謝の念がしきりの学習であった。

この1年の始まりの頃は、コロナの感染者が多かったが、だんだんと収まり、年度末には5類への移行が決まりやれやれ。しかし思ってもみなかったロシアのウクライナ侵攻が始まり、その影響で、世界の物資の流通が滞り、原材料の不足や価格の高騰・サプライチェーンの機能障害が世界経済に影響を及ぼし、我が国の経済状況も為替変動や日常の消費生活への影響が大きく出た。

そんな中で、コースは、メイン講師の岩村充早稲田大学名誉教授が6回の講義で経済学の基本事項を紹介し、また小黒一正法政大学教授が3回の連続講義で主に年金問題を取り上げ、その他各講師が幅広い分野のテーマを分担する形で構成された。特に目立ったトピックスは、世界経済の成長鈍化が目立つことから、経済成長かあるいは脱経済成長・定常経済かという視点での議論であった。

日銀の総裁・副総裁の交代がニュースになる時期にタイミングよく「出口戦略」の講義が組み込まれており、コース企画の工夫がうかがえる。また、プラットフォーム問題など私にとって不慣れなテーマも学ぶことができ、問題意識が広がった。

1年間で6回のオンライン授業があり、リモートで参加した。コロナ感染の観点から導入されているのであろうが、やり方によっては非常に便利な方法であり、学習生も慣れて効果的に使えるようになれば良いと思う。ITリテラシーに差があるであろうが、メール連絡や学習記録のデータ化も積極的に取り組むのが良いと思う。

とても満足した講座だったので、企画委員・運営委員の熱心な取り組み、事務局の気を配ったサポートなど授業を支えていただいた関係の方々に感謝します。

今あらためて日本の民主主義と ジャーナリズムを考える

講師：杉田 敦
(法政大学法学部教授)



リベラル・デモクラシーの再興のために

講師 杉田 敦

三鷹市の市民講座には、これまでも何度かお邪魔していましたが、このたび貴重な機会をいただき、一年にわたって6回の講義を行う中で、私自身、思考を深めることができました。企画に携わった方々、大変熱心に参加していただいた受講者の皆様に深く感謝します。また、各回の講師の先生方には、それぞれのご専門の立場から、大変貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

昨年はロシアによるウクライナ侵攻という、世界史の転回点ともなりかねない出来事があり、コロナ禍もなかなか収束しない中で、講座は進行しました。我々の政治体制であるリベラル・デモクラシーは、意見や利害の多様性を前提とし、その調整に時間をかけ、権力の集中を警戒し、熟慮に基づく政治的決定に期待する政治体制です。こうした体制は、戦争や疫病という緊急事態においては、効果的でなく、まだるっこしく、無意味に感じられがちであり、そこから体制の変質が生じる危険性もあります。

そもそも、コロナ禍やウクライナ戦争以前から、リベラル・デモクラシーの先進国と見なされてきたアメリカや西ヨーロッパで、問題を単純化してマイノリティに責任を転嫁するようなポピュリズム的な政治が猛威を振るっていました。こうしたポピュリズムは、我々の政治体制を内側から蝕みかねません。

このような背景をふまえ、私の講義では、リベラル・デモクラシーとはそもそも何であり、それはどのような意義をもつか、そしてどのような問題点があり、それをどう解決すべきなのかについて、参加者の皆さんと一緒に考えようと試みました。

古代の直接デモクラシーが、ヨーロッパ中世の身分制議会の流れを引き継ぎながら、国民代表を通じた議会制デモクラシーへと展開した経緯を確認した上で、現代のリベラル・デモクラシーは、国民の絶対的な主権の権力を樹立する求心的な側面(デモクラシーの要素)と、権力を規制し分立させる遠心的な側面(リベリズムの要素)とを併せもつ、一種の「混合政体」である、ということをおは強調しました。

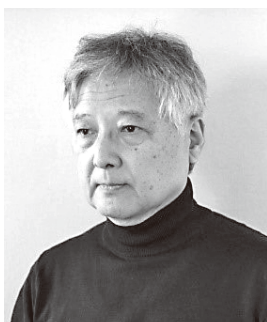
私の理解では、ポピュリズム現象はもちろん、今日の日本政治の最大の問題点である行政権力の肥大(閣議決定の濫用など)といった現象も、「リベリズムなきデモクラシー」の表れであり、こうした傾向が進めば、我々の体制はいつの間にか、権威主義体制に近づくことにもなりかねません。こうした流れを逆転するためには、アリストテレス以来の政治的叡智を再確認し、「混合政体」としてのバランスを取り直す必要があります。

私の講義では、この他にも、とりわけコロナ対策などをめぐって明らかになった、「トランスサイエンス」的な諸問題など、新たな政治課題にも言及しました。

いずれにしても、私の拙い講義では、十分に論点を深めることはできませんでしたが、これを一つのきっかけとして、受講者の皆様がさらに学習を続けられ、リベラル・デモクラシーの再興の輪に加わっていただくことを期待します。ありがとうございました。

メイン講師紹介

すぎた あつし
杉田 敦さん



法政大学法学部教授。
1959年生まれ。東京大学法学部卒。
東大助手、新潟大助教授などを経て現職。研究分野は政治理論。
日本政治学会顧問(元理事長)、政治思想学会理事、日本学術会議連携会員
〔安全保障と学術に関する検討委員会〕元委員長

<主な著書>

『境界線の政治学 増補版』(岩波現代文庫) 『権力論』(岩波現代文庫)
『政治的思考』(岩波新書) 『両義性のポリテイク』(風行社)
『デモクラシーの論じ方』(ちくま新書)など

講座の様子

稲葉先生（ゲスト講師）



自主学习（グループ討議）



自主学习（学習生発表）



自主学习（学習生発表）



●カリキュラム

回	日付	講義名	講師
	学習内容		
1	5月14日	開講式・オリエンテーション	自主学习
	自己紹介、運営委員決め		
2	5月21日	デモクラシーとは何か	法政大学法学部教授 杉田 敦さん
	リベラリズム・ナショナリズムなどをふまえてデモクラシーの存立条件を考える		
3	5月28日	意見交換	自主学习
	自主学习の内容と進め方・課題・問題意識		
4	6月4日	緊急事態とデモクラシー	杉田 敦さん
	人々の生命・生活を守る権力と人権		
5	6月11日	日本の偏狭なナショナリズムと民主主義	東京大学名誉教授 島蘭 進さん
	日本のナショナリズムと国家神道		
6	6月18日	権力集中とデモクラシー	杉田 敦さん
	健全なデモクラシーの回復はどうすべきか考える		
7	6月25日	意見交換	自主学习
	政治を語り合う		
8	7月2日	日本のジャーナリズムは国境を越えることができるか	言論NPO代表 工藤泰志さん
	言論不況の今日的な意味		
9	7月9日	学習生発表	自主学习
	メディアの現場の片隅から		
10	7月16日	市民の信頼を失い始めた民主主義の修復は可能か	工藤泰志さん
	日本の未来と市民社会の可能性		
11	9月17日	民主主義下の主権者の権利	高千穂大学経営学部教授 五野井郁夫さん
	主権者は誰か。人民主権の故郷(ローマ)他		
12	9月24日	多様化する世界の民主主義	青山学院大学名誉教授 羽場久美子さん
	先進国の少子高齢化にどう対応するか		
13	10月1日	SNS時代の民主主義	法政大学キャリアデザイン学部教授 上西充子さん
	国会パブリックビューイング他		
14	10月8日	フェスティバル参加に向けて	自主学习
	①民主主義 ②宗教と民主主義 ③民主主義とジャーナリズム		
15	10月14日	【公開講座(金曜日)】ロシアのウクライナ侵攻と日本の安全保障政策	防衛ジャーナリスト 半田 滋さん
	10月15日	【公開講座(土曜日)】パレスチナで働いて思うこと —基本的人権と尊厳と平和について考える—	

回	日付	講義名	講師
		学習内容	
16	10月22日	学術・科学とデモクラシー	杉田 敦さん
	科学者の科学的助言と政治的決定との関係について考える		
17	10月29日	ジェンダー問題と民主主義	東京大学大学院法学政治学研究科教授 前田健太郎さん
	政治を見る視点の重要性		
18	11月5日	なぜ低投票率なのか	東京大学大学院法学政治学研究科教授 谷口将紀さん
	低投票率は悪いのか		
19	11月12日	日米地位協定と沖縄	法政大学法学部政治学科教授 明田川融さん
	補足協定、全土基地方式他		
20	11月19日	フェスティバル準備	自主学習
	あゆみ編集委員とフェスティバル当日の動きを説明		
21	11月26日	民主主義と憲法	東京都立大学法学部教授 木村草太さん
	日本国憲法、民主主権の意義他		
22	12月10日	生活困窮者支援の現場から	一般社団法人つくろい東京ファンド 代表 稲葉 剛さん
	「セーフティネットのほころび」という問題他		
23	1月14日	三鷹市企画経営 丸山課長	自主学習
	「参加と協働」のまちづくり		
24	1月21日	SNS時代の民主主義(ジャーナリスト編)	アジア太平洋資料センター共同代表 内田聖子さん
	監視資本主義。その基本的原理と問題点		
25	1月28日	自国の民主主義を掲げる中国との関係と展望	東京大学大学院総合文化研究科教授 阿古智子さん
	中国の民主主義		
26	2月4日	デモクラシーの様々な回路	杉田 敦さん
	主権者教育のあるべき姿。直接投票、デモなどの国路の可能性を考える		
27	2月18日	学習生による提題	自主学習
	2名により提題、質疑		
28	2月25日	学習生の振り返り	自主学習
	印象に残った講義、講師、その他		
29	3月4日	低すぎる日本人の人権意識	ジャーナリスト 安田浩一さん
	差別と偏見の現場を取材するようになったのか		
30	3月11日	リベラルデモクラシーの未来	杉田 敦さん
	人権を保護し、自由平等などの価値理念とデモクラシーのあり方の構想		

テレビにニュースが流れていた。「…丁寧に説明致します。みんなのために是非ご理解頂きますように…」海辺で俯く漁師の男性。「みんなの中には、俺たち、入っていないんだよな…」いつもの光景だ。これが多数決重視の民主政治だ。

冷戦後、世界は落ち着くと思った。しかし、頻発する地域・宗教紛争、難民、移民、感染症、ウクライナ戦争、等々、世界が揺れている。多様化する世界の民主主義。今や世界の少数派だ。特に、感染症対策を巡って、民主政治の確立している国の人々の自由と統制に対する考え方、行動には驚いた。

個人の自由、平等、民主国家の動揺の原因等、根本から学び直す必要性と、強い焦燥感に駆られ受講した。民主政治の変遷、理論、現状、課題、展望をしっかり学んだ。多数決の原理だけは、なじめないが。

政治に対する姿勢は、政治家に要求するだけでは十分でなく、有権者自身が考えを深める自己統治が必要だ、ということがよく判った。

我々の選んだ政治体制は、リベラル・デモクラシーで、不可逆的なもので替わりはない。これを大切に見守り、ワンヘルス、即ち、人間、動物、環境の健康を守り、一市民としてよく考え、日々、謙虚に生活しようと思った。又、現在、変動の激しい世界情勢を注視していこうと思う。

有意義な一年だった。毎回、学習生の質問が興味深く、楽しみだった。友人・知人がまた増えた。

企画・運営に係わった方々、職員の方々に感謝致します。

民主主義についての講座を受講する中で、今思うこと

小野浩美

日本がアメリカとアジア、太平洋の国々に対して戦争を行い、敗戦した後に私は生まれた。そして戦後アメリカによる民主主義教育が行われる中で、それが当たり前のこととして育ってきた。民主主義に対して意識してきたことは、ほとんどなかった。

日本が戦争をしてきた過ちの原因は、軍国主義体制にあったことを学生運動をしていた活動家によって教えられ、そのとおりであると考えてきた。さらに労働者が主人公である社会主義体制が、実は権威主義的政治体制であり、社会主義国家が次々と崩壊するのを目の前にして、初めて政治体制として民主主義を目指すべきではないかと考えた。

今回の講座の中で、メイン講師の杉田先生を始め様々の講師から今起きている問題について、民主主義との関係での講義を受け、本当に勉強になったと実感している。民主主義の考え方は、ギリシャ時代からあったということは今まであまり意識してこなかったもので、新鮮に感じた。

同時に今社会が多様化し様々な価値観が混在する中で、民主主義を追求していくことは、いかにたくさん問題を抱え困難な道りであるかを改めて感じている。解決の方向性は見えないが、他の道もないことを今実感している。

今改めて考えた民主主義とジャーナリズム

C.K.

ゼミナール形式の一年間にわたる講義は毎回学びがあり、刺激的だった。多岐に渡る内容もさることながら、学習者からの率直な質問を通して講義の内容をより深く理解することができた。質疑応答の時間がもう少し長く取れるように、講義内容を調整してもらえれば、学びが尚深くなったかもしれない。

この講座を通して、これまで漠然と空気のように感じていた民主主義について学び、主権者としての個人の在り方や、社会のあらゆる側面で民主主義が問われているという現在の状況に気付いた。また民主主義そのものは、常に変化し続ける存在で、これを維持する不断の努力なしに継続しえないものであると理解した。

ジャーナリズムに関しては、SNS時代の民主主義に関する講義もあったが、日本のメディアの特殊性や多様化するメディアの社会的影響について、一段と掘り下げた講義や議論があってもよかったと思う。

自主学习を通して、学習者同士で率直な意見交換ができたのも、大きな収穫である。様々な経験を持つ学習者から学ぶことが多く、貴重な機会となった。

学習者、企画者、運営者として市民の顔が見える市民講座は、とてもユニークで貴重な学習の場を提供してくれる。人と人とが繋がり、共に考え、話し合いながら、啓発し合える場でもある。

この講座を企画、支えて下さった皆さん、また一年間学びの場を共にした皆さんに感謝します。

受講を終えて

M.K.

市民大学は今回が初参加でしたが、一人では達成できなかった充実した学びの機会となり、企画運営に携わっていただいた多くの方に感謝申し上げたい。参加のきっかけは日本の政治への不信でした。議会制民主主義が健全に機能せず、民意が置き去りにされている状況でこのままでは子供達の未来が危ういと感じ、不勉強であった政治について学習したいと思っていたところ三鷹市市民大学の存在を知りました。土曜日の開講で、託児も可能であり、平日勤務の子育て世代でも参加機会が得られて大変ありがたい企画でした。講義内容は民主主義の歴史を学びつつ、人権や貧困問題など政治と深く関連し、我々が今直面している社会問題を各分野の専門家がわかりやすく解説し、講義後には質疑応答時間が必ず設定されていました。多彩な講師陣のため、元々興味があったテーマ、自分一人では触れなかった分野も幅広く学習できました。受講生は幅広い世代でありつつ、私と同様に現行の政治のあり方に問題点を感じ、どうしたら市民にとってより良い社会実現が可能かを真剣に考えられている方が多い印象でした。質疑応答では多角的な論点を学ぶことができ、こうしたテーマで様々な意見を伺うことができる貴重な場でもあり、自身の学習へのモチベーションが高められる時間でした。こうした恵まれた環境での学習を通じて、市民による民主主義が機能した社会には市民の政治リテラシーの向上が重要であり、それは我々一人一人が意識と行動変容を起こさねば達成が難しいと感じました。学習後の実践として、その変化を一市民の自分自身が達成し、またどうやって周囲へ広げていけるのか、それが今後の課題・目標にしたいと思います。

メイン講師として法政大学教授杉田敦先生が6回登壇され重厚な時間を頂きました。予測不可能なコロナパンデミック、ロシアのウクライナ侵攻は日常の生活に影響を与えております。先生の講義のなかで「緊急事態とデモクラシー」が特に印象に残りました。古代ローマ共和制では侵略や感染症などの緊急事態には共和制を守る為に6か月という期間を定めた元老院の指名を受けた独裁官が全権を把握していたといひます。カエサルが無期限独裁官にアウグスティヌスにより共和制が帝政へ17世紀イギリスのクロムウェルの個人独裁へとなりました。一次大戦後ドイツの政治危機からヴィマル共和制を守る為に独裁体制が必要とされ委任独裁であれば期限付きなので有用であるとされましたがヒットラーの出現となってしまいました。開発独裁政権下では経済発展し人々の生活向上になったと評価されている例もあります。感染症対策のロックダウンは権威主義国家と同じ状態になり国民の健康のためにスウェーデンを除いて多くの国が百年まえと同じ規律権力が行使されました。戦争とデモクラシーに対してはロシアが武力行使をしてきたがという視点からマキャベリの傭兵は逃げるので市民兵が重要である今のウクライナの男子出国禁止は潜在的な兵士として動員される存在なのです。日本ではロックダウンもどきが行われ安保3文書が閣議決定され米国大統領に大喜びされました。ウクライナ、ロシア幾人婦。

いま、政治コースを学ぶということ**児玉千津子**

市民大学に巡り合えたこの一年は、とても充実した、楽しいものでした。しかし、ロシア、ウクライナの戦争は続き、トルコシリアの大地震では5万人以上の方が亡くなり、テレビに写し出される建物の瓦礫の山は、「どうして一時休戦して世界が救援に向かえないのか」と悲しかった。21世紀でも戦争を止められない、大地震を予知することもできない、そしてコロナで亡くなる人をゼロにもできていない。確か映画「戦場のピアニスト」のオープニング映像だったでしょうか、建物の瓦礫の間を主人公（ピアニスト）がフラフラとさまよっている、あの80年以上前の時代設定から今年、全く同じ映像をテレビで見て、未来への希望を語る事ができない自分に驚きます。

でも「市民大学」で学びました。「基本的人権の尊重」「平和主義」「国民主権」、日本国憲法を持つ私たちは、「民主主義」が古代ローマ時代から長い歴史に揉まれ、様々な人の英知、勇気、希望の光として育てられ、その未完成さを知りつつ、決してあきらめなかった人々の道しるべだったことを。後退してはいけない。「子ども食堂」でも「ジェンダー平等」でも、「多様性の容認」でも、やっそここまでたどり着いた「平和立国」の証なのです。何か一つでも、前へ、前へ、抗って、抗って、世界の人と横に繋がっていききたい、と切に思います。

世界は大転換点にあり、大きく変わりそうだ。平和と秩序が壊れ、分断と人権の軽視が進み、戦争や気候変動、コロナ禍、食糧世界はおおしく危機など、不安定さの要因には事欠かない。1年前に始まったウクライナ侵攻は、人々の生命や暮らしを奪うとともに世界に食糧・エネルギー問題などの負の影響をもたらし、アフガニスタン、ミャンマー等々、戦火の絶えない地域が数多いことを忘れてはならない。

一方、日本は安全保障と称した軍事増強に舵を切り、従来の国の軸を失いそうだ。安全保障関連3文書の改定、防衛費の増大等は戦後の防衛政策を大きく転換させるにもかかわらず、本質に迫る論議が進んでいるとは言えない。政府は「丁寧な説明」と度々繰り返すが実際は説明すら行われず、「閣議決定」を乱用している。本当は「説明」に基づき、国会論争をはじめあらゆる場で真摯な論議が繰り返される必要がある。そのためにこそ政府が機能しなければならないのに実態を伴わない「丁寧な説明」という言葉と「閣議決定」で逃れようとしている権力者の姿が見えてくる。

だからこそ私たちは知らなければならないし、考え、話し合わなければならない。問題解決に必要な力を即、効果的に発揮できるのは、政治である。政治の方向や形によって問題の本質を押さえたアプローチができるか、目の前の形だけの解決に止まるか、それとも権力に都合の良い方向に利用されるのか、大きな違いが生じる。私たちが何を選択し、政治に何を要求していくのか、明確に自覚していく必要がある。政治の果たす役割を見直して基本と現状を学び、気軽に政治についての意見交換ができるように場を身近なところにつくっていかなければならないと思う。市民大学総合コースをその一つの間とし、活用するための方策を考えたい。

今、変革・更なる進化の時

1943年生まれの私はドブプリ戦後民主主義に浸かって生きてきた。その先生役であり「自由と民主主義」の国と確信していたアメリカが、トランプ大統領登場以来自由も民主主義も限界があると見せ始めた。そこで「現代民主主義とは何か？」にしっかり向き合い、この問題を考えたくて本講座を受講した。

私は現代民主主義はピンチにあり、変革し更に進化すべき時を迎えていると思う。

それは憲法の基本的理念である「個人の尊重」が、社会の多様化により現代民主主義では「人権の確保」が出来なくなってきた事にある。

古代ギリシャの市民が平等な資格で参加する直接制によってスタートした民主主義は、現在は間接制（代表制・議会制）により成り立っており、マジョリティによって選ばれた人々の「話し合い・合議」が大きなファクターとなっている。

しかし、急速な多様化によりマイノリティ、ジェンダーギャップ等での人権尊重が大きな問題になってきた今、以前のように「思いやりの気持ち」や「多数決による合議制」で扱っては少数者個々人の気持ちを汲んだ政策策定は困難だ。「人権の確保」のためには、何らかの形でこれらの人々も入れた「間接制+直接制」のハイブリッド型による行き届いた政治が必要だ。

世界を見てもロシア・中国等の権威主義的な国の存在感が増し、自由民主主義は格差・移民・ゼノフォビア等による分断により崩壊の危機に面している。加え中国の経済停滞・ウクライナ戦争による世界経済の低迷により貧困層の人々との激しい分断も予想される。日本でも年寄り主体のオジさん政治と若年層との分断が懸念され、IT、SNS等も採り入れた「間接+直接型」ハイブリッド民主主義に移行しなければならない時を迎えている。

私は、昨年度に続き、2回目の受講でした。昨年は育休中の平日に受講していましたが、今年は育休から復帰し平日はフルタイム勤務、ワンオペで2人の子育てをしながら、土曜日に参加することになり、なにより体力的に続けていけるか自信が持てない中で参加することになりました。それは、昨年の受講の経験から、学びつづける大切さを感じたからでした。そして、今回の講義の中でも改めて感じるようになりました。民主主義以外の中で、「統治」される立場にいることは、権力の暴走を引き起こすこと、つねに自律かつ自立的にいることが、必要であると学びました。そのためには、常に情報にアンテナを立てて、学びつづけることが必要であると感じさせられました。

翻って現在の私には、その余裕がないという現実も突き付けられました。毎日の仕事、育児に追われて、「生活」をしていくことで精一杯。学ぶことへの余裕はほとんどありませんでした。

そんな中で、土曜日の2時間だけでも学びに触れることができ、貴重な時間になりました。ありがとうございました。

ロシアのウクライナ侵略は即時停止せよ

田 畑 洋

2022年2月24日、ロシアは特別軍事作戦の名目でウクライナを侵略した。一年を経過した現在、アメリカ、ヨーロッパの軍事支援により長期化の様相を呈しています。

私は、ロシアのウクライナ侵略の即時停止の理由と解決策について考えてみました。

1. ロシアのウクライナ侵略の即時停止の理由

(1) ウクライナの国内の問題

- ① 市民が8千人以上殺されています。ロシアは侵略の理由として、ウクライナは同じルーツを持つ国、NATOの東方拡大を挙げていますが人を殺してよいという理由にはならないと考えます。
- ② 国土が破壊されています。多くの施設や住居が破壊され、790万人が国外に逃れています。原子力発電所が破壊されると放射能汚染により人間は住めなくなります。

(2) 世界共通の問題

- ① 核戦争の危険性
プーチン大統領は核兵器の使用を、ほのめかしています。核戦争が始まれば人類は破滅することは必定です。
- ② 気候変動への影響
戦争により温室効果ガス大量に排出され、気候変動に大きな影響を与えています。
- ③ その他の影響
上記の外でも食料の供給不足、エネルギーの価格高騰、金融市場の混乱など世界各国に大きな影響を与えています。

したがって、ロシアのウクライナ侵略問題は、新型コロナ感染問題と同じように、すべての国が当事者意識で取り組まなければと考えます。

2. 解決策

本題は、国連の安全保障理事会で協議すべき事項ですが、常任理事国の拒否権問題で十分な討議ができません。しかし、問題解決できる機関は国連しかありません。国連が、仲介する形で、ロシア、ウクライナをはじめ主要関係国による停戦合意の会議を開催することが唯一の解決策と考えます。私個人としては、できることとして、周りの人と意見の交換を図ってまいりたいと思っています。

疫病と戦争が世界を席卷する現在、世界で民主主義の危機が叫ばれています。今年メイン講師は2回目のご登壇となる杉田敦先生で、前は最終講義がコロナでキャンセルとなり、再度のお願いに快諾して頂きました。杉田先生の講義は、民主主義の淵源たる古代ギリシャから現代に至る歴史と変遷を解きほぐし、緊急事態、権力集中、学術・科学との関係性や、民主主義の様々な回路について語って頂き、視野が広がる思いがしました。

またゲスト講師陣は、日本の国家神道について天皇の位置づけと共に語られた島藺進先生、主権者の権利行使について明るい展望を示唆された五野井郁夫先生、日米地位協定の歪さが沖縄に忍従を強いる実態を明らかにされた明田川融先生、本来公助が担うべき生活困窮者支援を實踐して来られた稲葉剛さん、世界に広がるデジタル監視資本主義の現状を伝えられた内田聖子さん、現代中国の民主主義をご友人の中国人弁護士を伴ってビビッドに語られた阿古智子先生、ヘイトスピーチを例に日本人の低すぎる人権意識を熱弁されたジャーナリストの安田浩一さん等々、多彩な方々の専門知から多くを学ぶことができ、多幸感に浸る思いがしています。

自主学習日には3名の学習生から、メディアの現状とジャーナリズムのお話、民主主義に関するご自身の卒論を基にディスカッション、在日3世としての経験談が個性豊かに語られ対面で年代の異なる学習生同士が共に質疑応答できる場の有り難さを痛感しました。

こうした豊かな時間を持てたのはとても贅沢な事で、講師の方々、運営を支えて下さった職員の方、運営委員、共に学んだ学習生の皆さんに改めてお礼申し上げます。

民主主義に思うこと

C.N.

久しぶりに総合コースを受講することができ、あらためて三鷹の人たちの底力を感じました。政治のコースには、若い世代の方々の参加も多く、彼らに学ぶことがたくさんありました。

カリキュラムは杉田敦先生が6回の講義でしっかりとデモクラシーの基本的な構造について話して下さったので、その他の先生方の講義もその構造に照らし合わせながら考えることができました。2時間という枠の中ではとても展開しきれない内容が多く大変残念に思うことが何回もありました。個人的には島藺進さん、羽場久美子さん、阿古智子さんなど、そして現場を担っている、稲葉剛さん、安田浩一さんなどの報告は衝撃的でさえありました。

今まで知らなかったことを多く学び、たとえ体験がなくても、知識を共有することで共感の輪が拡がり、民主主義を考える土台になると思いました。

あの事件のあと「民主主義の根幹を揺るがす事件」とコメントしていた政治家たちも、実は宗教団体の支援を受け民主主義の仮装をまとして政治の舞台で平然と活動しています。民主主義の根幹を揺るがしているのは、誰なのでしょう。ここまで揺るんだ社会を前に考えることがありすぎです。

民主主義は、未完の体制で、根本は一人一人の心の中に深く根ざした人間尊重の精神で築き続けていくものと思っていますが、それが大変難しい。でも、民主主義は大きな「希望」です。

「参加と責任」

これが民主主義を考える上での大切なキーワードだと、宇野重規氏は著書で述べている。

「参加」のイメージは、こんなものだろうか。

例えば、何かの課題に関与し、考え、こうすべきだと主張する。

それはそれで正しいことのように思える。しかし、「すべきこと」は他者にのみ向かって言われることではない、とも。他者にのみ向かって言おうとすると、つい要求が厳しくなる。けれど、すべきことを自分が責任を持ってしようとする、実際には、そう簡単なことではない。誰もが経験していることだろう。

それに、その他者と自分の立場は、時により場合によりしばしば入れ替わる。きっと迷彩模様のように入り組んでいるのだろう。だから自らが参加の責任を取るとしたら？と頭の片隅に置いておくことは、民主主義的態度としても大事なのだと改めて考える。当たり前のように思われることではあるが「身じかなどころから」と宇野氏も言っていることだし。

日本の民主主義は未熟だと講座で何度か聞かれた。確かにそう思われるが、未熟さは今の限界性ではあっても、この先の可能性でもある。全ては発展途上。システムとしての民主主義も、人権意識のような個々の思考・態度も、この先の可能性のあることに希望が持てる。

受講を終えて考えた事

今回、民主主義について様々な角度からの講義を受け勉強になりました。ここから以下の点を感じ取りました。

最近の世界情勢を見ると、コロナ禍の対応、ロシアのウクライナ侵攻、米中関係、経済市場低下等々の問題に対し、民主主義国家と言われる先進国欧米諸国の政治的対応は、混迷状況にある。この背景には、各国が抱えている格差・貧困の問題、移民問題、人種差別問題、温暖化問題等への対策に苦慮し、自国利益優先への方策を取る傾向が見える（ポピュリズムの台頭）。他方、権威主義を取る中国・ロシア・北朝鮮等は、独裁的指導者が取る政治的判断の早さが、注目されている。他方、グローバル化とAI技術が進歩している今日のネット社会の中、日々国内外で起きる政治、経済、社会、文化等の動向に対しては、新聞・テレビ、雑誌、ソーシャルメディア等メディア、ジャーナリストが提供する情報が判断材料となっている。メディアの役割が、権力に対する監視と批判と言われているが、提供される情報の信頼性、真実性を見極めることが困難であり、時間を要する状況にある。

近年、民主主義国家である我国においては、政治不信政治不正、強権であるという言葉が取りざたされている。国民も慣れっことなり、世論の盛り上がりも少い状況である。将来の我国を考える時、現在抱えている多くの問題をどの様に解決し、安心を持たらす民主国家となれるのか、政治の質の向上が不可欠であると同時に国民の意識改革が求められると考える。

最後に、コロナ禍の中、多方面でバックアップして頂いた事務局の方々に感謝致します。

3回目の政治コース受講を終えて思うこと

藤橋 君枝

杉田先生のデモクラシー論の講義によりパンデミックの緊急事態宣言下と憲法の関係が良く理解できた。日本のジャーナリズムの関係として、新聞・TV・SNSなどの情報よりも多彩な講師陣により良く解った。

安倍元総理の専制と癒着が日本国民にツケを回した。

人間の弱さに付け込んだマインドコントロールのあくどさは信教の自由と憲法関係を明らかにした。

ロシアのウクライナ侵攻と北朝鮮のICBMや核武装は日本の防衛予算を増大・強化した。第三次世界大戦への恐れを増した。第二次世界大戦の苦い経験を忘れたのは政治家の怠慢に怒りを覚える。

経済問題としては国民や年金生活者にとって厳しい物価高騰などへの対策が必要だ。

政治コースに参加して正義感が益々強くなった。

まずは選挙投票に行く行動が一票の重みを認識したいと思います。

これからも日本の政治を良くする努力をして行きたいと思います。

最期に運営委員や事務局の方々に感謝申し上げます。

“驚き”の市民大学

古川 英一

ある日、市の広報紙に三鷹市民大学の募集案内を見つけました。ほぼ1年にわたって30回の講義、政治のコースは杉田敦先生、こんな贅沢なことがあるのかと心躍らせ、応募開始と同時に申し込んだのが、ついこのうのこのことのような気がしています。毎週土曜日、自転車走らせ会場の元気創造プラザへ向かう。講義を終えると、残念ながらその余韻に浸る間もなく、仕事へ出かける、そんな日々の積み重ねのなかで感じたことは「学ぶ」から「共に学ぶ」ことの楽しさでした。

講師の方々との質疑応答では、学習生の皆さんの問題意識の高さに刺激を受け、そうした相互作用から自分一人では考えもつかなかったような、ものの見方や切り口というものを学ぶことができる、「共に学ぶ」ことの醍醐味でした。

政治学の杉田先生の古代ギリシャ・ローマの時代から現代までの民主主義の変遷をたどる講義が立て申です。そして、いま世界や日本で起きている具体的な問題…ウクライナ侵攻などの国際情勢、メディアと政治、日本の貧困、ジェンダー、外国人への差別・ヘイトなど実に多岐にわたるテーマで講師の方々が話をする。それが立て申とクロスすることによって、民主主義を現実の中で、より密接にとらえることができました。

この重層的な講義の組み立てに驚き、さらにこうした講義を企画したのが、学習生自身ということに、2度びっくり、驚いた勢いで新参者ながら運営委員、企画委員を務めさせていただきました。“市民大学愛”にあふれた“鉄壁”の諸先輩にもまれながら、2023年度の政治コースの組み立てを共に考えるという貴重な体験もさせていただきました。

おや、いま周りを見ると、ここはどうやらギリシャの丘の上、広場・アゴラに何やら私たち学習生に似たような風体の人たちが集まって、喧々諤々の議論をしています。耳を傾けてみると、デモクラシーがどうのこうのと尽きることがない様子…そして、はっと気づくと、ここは市民大学の学習室。はてさて、これは幻想だったのか…

2023年度コースで、新しく学ぶ人たちに、たくさんの驚きがありますように。

「義」に篤い父 母は「慈愛」をきた 年中冷寒の七部屋は「その日ぐらし」貧乏に苛まれる少年期。明治生まれ〈無学・無知〉両親は意気時に乏しく実想が分からないまま戦災の残滓を側目に生きた一大正期市中堀削の庄内川支流（通称堀川）は〈木片は沈み 鉄塊を浮かせ〉国民の戦後を唯々諾々と水量多く激流で歴史行き過ぎの満 19 年間で眺め（'59）単身上京した▼狐老、昨暮れ慌しく「両眼」の白内障と左眼中の「微少黒片」除去施術。全治 14 日の初めてメス執刀が酷い暗闇を強いられた一敗戦焦土の飢餓状況下、「母」は家族や隣近所の「食い扶持・買い出し?!」《くびきを負うが善し》早暁、農家を訪う 50 代小柄な母と纏わりつく幼子、諸手の風呂敷包みは辛く悲しい。帰路、昼下がりのアルマイト弁当箱の細い薩摩芋を頬張り母の温い背上で眺める稲沢操車場の長い架橋から広大な modern の情景に優しい母を独り占めの安らぎ。“好事魔あり” 架橋下を驀進する汽車の黒煙まじりの蒸気に母子は汽笛をもろに浴びた▼学童 5 年時、帰還遅くキビキビした青年（将校・福原忠吉氏）赴任：黒板上部に「日本は平和・男女同権」と「自由」の墨文字の半紙が貼られた 教卓には「憲法があって『日本の本質』をなす」。益せた子らは“茄子・ナス・なす”と声高な唱和が流行った 温かな教諭は 7 年後市内の副校長転勤された 高校在学 10 数名が宿直時僅かな茶菓を持ち寄り民主主義を実践した▼1945 年大戦時東条内閣〔商工相〕（1896-1987）A 級戦犯逮捕が不起訴、'59 年 3 月第 1 次内閣組閣—60 年 7 月退陣、保守内閣は家父長的政治権力で米国隷属⇒現在直も継続《'50 年：朝鮮半島南下の北鮮侵入⇒'53 年 7 月末休戦 南北戦火を利して復興》震災国は狂信的な反共宗教団体《統一教団》と結託……軍隊創設《形振りかまわず妖怪一族面目躍如の長期政権成す》孫（1 次'06 年）短政権を悔い 2 期 7 年 8 カ月の毎日が自らの権力維持の政策＝人事、解散・総選挙、官僚組織の人事先行型「村宅政権政治」の長期政権＝検証する責任反故か、『保守政党の暗躍 70 年間、未だ戦中にあり慄然する（後藤謙次・白鷗大学名誉教授「平成政治史」（岩波書店））60 年安保・年金世代は、COMMUNITY と一緒に「孫世代」へ利他的な遺産を残したいク

★マルク・ブロック（1886-1944）・仏歴史家：対ナチスのレジスタンス指導者、『1944 年 6 月秘密警察ゲシュタポに銃殺された『マルク・ブロックの記憶のために……歴史を遡行的に読むことを提唱し』仏パリ大学・歴史教室にはプレートが飾られ『歴史はその時代に生きていた人の時代解釈に歴史を遡行的に記憶を学びたい』。

“同じあやまちを繰り返さないため” 樋口陽一・憲法学者、パリ II 大学客員教授経て後年東京大学法学部教授

市民大学講座で学びの習慣を

M.Y.

初めて受講して、普段の日常生活や WEB サイト巡りでは得られない、さまざまな知識や知見を得ることができて、とても勉強になった。

例えば、2022 年 2 月からのロシアのウクライナ侵攻について、ロシアを批判しても何故ロシアが侵略したのかまで想像が至ることはなく、考えが浅かった。背景にはアメリカの NATO 拡大やウクライナのミンスク合意の反故があったと学んだ。講義で学ぶことで理解を深め、掘り下げて考えることができた。

今や「スマホを持たずんば人にあらず」と皮肉ることができる世の中で、スマホと GAFA と AI の強い影響力により、自分にとって耳ざわりのよい情報しか見聞きしなくなり、個人の知識と意見がどんどん偏っていると思う。長期的にみて市民社会が弱くならないか心配だ。

この市民大学講座のような、意識的に学ぶ機会を設けることで、多様な知識をアップデートし、自分の頭で考える習慣をマヒさせないように心がけて、これからも行動していきたい。

4歳の息子、妻と暮らす一人（の父親）として参加した初めての市民大学講座は、とても楽しい（意義深い）ものでした。と言うのも、コロナ禍の2020年5月25日、BBC Newsを聞きながら息子（当時2歳）の寝かしつけをすれば寝落ちする確率が50%程度に低下することを学習していた自分は、George Floydという男性がアメリカで殺害されたニュースを育児の傍らで知り、Black Lives Matterとして全米、全世界で抗議デモが広がる一方、日本では何の運動も起きないことに驚愕していたからです。…理由になっていないですね。もう少し詳しく申し上げます。寝かしつけと共に耳にするBBC Newsでは毎日（本当に毎日です）彼のことが報じられました。BBC Newsは、Edward W. Saidが『オリエンタリズム』の冒頭で西洋的な価値観（装置）として言及しているものなのですが、一年経っても、今日はGeorge Floydが殺害された1st Anniversaryで、彼の家族がどう事件に向き合っているか、裁判がどのような状況なのか、が報じられます。涙ながらに家族がスピーチしている肉声を聞くことができます。その一方、日本では大した報道もされません。それどころか、ステレオタイプなマッチョな黒人が商店を襲い、肉・果物を盗むような光景と共にBLMが報じられたりもしました。残念ながらこの国では、民主主義も、ジャーナリズムも機能していない…。そんな絶望と共に、本コースのことを知りました…。おっと残念ながら、もう字数がありません。ここから先は、参加してみればお分かりいただけるかと思います。この学びを糧に、次は現場に出ようという決意表明と共に、毎週土曜の午前中、快く自分を送り出してくれた妻子に心から感謝申し上げて、結びに代えます。

「結局、民主主義って 何だ？」

渡 辺 衛

終戦の日から2週間後、マッカーサーが厚木にコーンパイプを咥えて降り立った日に生まれた私は、与えられた物とは言え、戦後民主主義の満々中に育った。小学校の先生は民主主義下の教育に眼をキラキラさせて取り組み、男子生徒を君と呼び女子はさんと呼んだ。それからの教育で民主主義は政治体制の到着点で途上国も共産国も経済が豊かに成るにつれて民主化して行くと理解していた。でも、どっこいそんな風には行っていない事に私も気が付いた。民主化を求めると言う旗印でアメリカが起こした戦争のどれ一つもその目的を達成していない。と言う事は途上国の市民も指導者も手間と時間の掛かる民主主義より効率の良い異なる体制を望んでいるのだろうか？確かに今回コロナでは民主国家は制圧に手間取った。ではそもそも何をもって民主国家と言うのだろうか。自由でオープンな1人1票の普通選挙が行われ、選ばれた代議員による熟議の場が有り、三権が分立し、司法は独立して法治主義が確立され、自由・人権が守られ、統治者・政権のチェック機関としてのジャーナリズムが存在する、大まかに言ってこれらが民主国家を標榜する必要条件の様だ。でも待てよ、我が日本国はこれらの条件を満たしている様に思われるが、この内のいくつかは存在はするが機能していない様だ。国会での熟議は暫く聞いていないし、女性や弱者の権利が守られているとは言えない、又ジャーナリズムの健全な権力のチェックは見えていない。そんな国でも民主国家と言って良いのだろうか。結局、民主主義とはそれを構成する制度の有無では無く、国家を統治・運営する指導者の意識・哲学に有るのだ。と言う事を気付かさせた1年間、各先生方に感謝です。

ロシア軍のウクライナへの軍事侵攻以来、私たちは戦争の歴史の目撃者となった。

住民たちは住み慣れた街も、大切な家族や思い描いていた人生計画もすべて失い、平穏な日常生活が破壊され死に直面する毎日が続いている。泣きながらひとりあてどなく歩く男の子、幼子を抱きしめて泣きわめく母親、虐殺され穴に捨てられる遺体の数々など、人間がここまで残酷になれるものかと目を覆いたくなるような不条理な状況が伝えられている。そして、戦争はいつも子ども、女性、一般市民を守らないのだと思いき知らされる。

3月10日の東京大空襲から78年。私の実家は被害の中心地となった下町とは離れた新宿だったが、当時幼かった私もあの夜のことはしっかりと覚えている。男たちは皆、根こそぎ徴兵制で戦場に駆り出され、どの家も残っているのは老人、子どもばかりで、女性が大黒柱となって家族を支えていた。私の母親も臨月の身で4歳、2歳の私たち姉妹と年老いた義母を抱えて、空襲で揺れ動く家で身を伏せていた。皆で被っていた布団から一瞬覗き見た真っ赤な夜空の光、あの2時間で100万人の人が家を焼かれ、死者は穴に埋められた数だけで約10万人、しかも川から海に流されたり、行方不明になった人は数知れないとのことをずっと後で知った。

壊滅状態になった戦争直後の東京の街は、衣食住のすべてを失って生きる術を求めての大混乱。その中で子ども心に今も特に心に刻みこまれていることが2点ある。

①「浮浪児」：今は死語になっているが、天涯孤独で行く先を失った戦争孤児たちが大勢いた。鉄道のガード下にはごろ寝して冬の寒さで凍死したり、ゴミ箱であさって食べ物と奪い合い、中毒死や餓死する子ども大勢いた。闇市等での犯罪も多く、逃げないようにと裸で鉄格子の中に入れられたり、「ドブ鼠」と世間からは揶揄されていた。誰からも保護されず自分の責任でもないのに、戦争の結果故に生死の狭間を生きてきた「浮浪児」とされていた私と同年代の子ども達の姿が忘れられない。

②「民主主義」：戦争が終わって町中に漲るもう一つの思い出は大人たちの活力。貧しかったが悲壮感はなく、爆撃の恐怖に怯えることもなく自由に家族を守って次の世代を育てて生き抜こうとする親や先生たちの活力を、私たちも子どもながら感じ取っていた。家の手伝いや学校での勉強にも励んで、出来ることはなんでもしようとしていた。戦後の小学校で忘れられないのは「二度と戦争の悲劇を繰り返さない」という信念のもとに「新憲法」を力強く私たちに教えてくれたのを熱気あふれる若い担任の先生の授業。「民主主義」の大切さについて「帝国憲法」との比較や事例で十分に時間とって討議させてくれた。

あの戦争の悲惨さを知る人達が少なくなり残虐な殺害の記憶が風化されて、平和の配当の時代が終わってしまったためだろうか。今回の戦争で多くの人命が失われ続け、原発が攻撃的とされ、核兵器の脅威がよぎる中、人類の終末時計がずっと進んだという。戦争を止めさせるためには「市民が主役」ということを私は今回の講義で学んだ。権力者やメディアのプロパガンダを見破り、武力ではなく、自由と安全が優先される秩序ある世界を希求する市民。個人として群れることなく冷静な知力で判断し言動する市民の力こそが、命の大切さを第一とする本当の平和を取り戻す力になると信じている。

受講を終え、「あらためて日本の民主主義とジャーナリズムを考える」 八杉茂樹

日本の民主主義は、約9年続いた安倍政治によって毀損されたといっても過言ではない。憲法を守る立場で憲法を無視あるいは軽視し、民主主義の根幹である国会を無視もしくは軽視さらにはウソをつき続けてなお議員であり続けたとは、驚異いや脅威というほかない。

その後の政権でも国会での論議の前に、国葬や防衛費増、原発政策の方針転換が唐突に閣議決定されるなど国会を形骸化し、議会制民主主義がないがしろにされている。まさに、自民一強による“内閣寡頭政治”の状況である。国会を本来の熟議の場にするために「世襲だらけの・忖度しまくりの・説明をしない・責任を取らない4S政治」をただす役割は野党である。法案や政策は批判・修正の連鎖によってこそ中身の練度が高まるというものである。そして、市民社会においてはジャーナリズムがその任にある。

翻って、メディアの役割は、「市民が知りたいと思う事実」を的確に伝えることであり、そのために絶えず政府の政策に疑問を呈し、政策の中身の説明を求め続けることである。この点、日本のメディアは決まったことの広報が多く、大統領の政策に厳しく論陣を張ってウォッチドッグの役目を果たしている米国のメディアに比べ、記者クラブ制度が続く限り、政権のペットドッグと揶揄されても仕方ない。また、政治や政策の話題をタブー視する国民性や、分裂弱体化して無党派の受け皿になり切れない野党にも大いに問題があるが、メディアは「権力は腐敗する・隠そうとする」を常に肝に銘じて臆せず、取材・調査による報道を望みたい。

そんな中、総理秘書官のオフレコ発言を明るみにしたことは一筋の光明であり、当コースの受講を終えた今、日本がいつか来た道を再び歩むことにならないためにも、あらためて徹底した調査報道によるジャーナリズムの力を信じ続けたい思いである。

なお、書き終えたところに飛び込んできた、言論・報道の自由に関わる「総務省行政文書」の問題。民主主義・ジャーナリズムのために、うやむやに終わることは許されない。

あゆみ原稿

LKY

いままで漠然と考えていた「民主主義」や「ジャーナリズム」といった考えを論理的レベルでまたは実践的レベルで講義を聴ける機会をもて感謝しています。今年で3回目の受講となりましたが様々な分野で活躍の方々の講義、講演はこの場でしか接することのできないものばかりでした。自分自身の問題意識を客観的にするのに大いに役に立ちました。今後も受講を希望したいと思います。

令和4年度三鷹市民大学事業総合コース
学習記録「あゆみ」第55号

発行 公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団
編集 三鷹市民大学事業総合コース「あゆみ」編集委員会
〒181-0004 東京都三鷹市新川6-37-1
元気創造プラザ4階 三鷹市生涯学習センター
電話 0422-49-2521

<https://www.mitakagenki-plaza.jp/shogai/>

※ウェブサイトにも本誌のPDF版を掲載しています。